アンチをアンチする妙な小説

偽善者と書き道化

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アンチをアンチする妙な小説

【Ｎコード】
Ｎ２４５０Ｑ

【作者名】
偽善者と書き道化

【あらすじ】
第一章は最低系転生者をアンチしている作品です。
他にも、管理局アンチをアンチし、クロノとユーノアンチをアンチ。
第二章は少々趣味に走っており、アンチのアンチは殆どでない一話一話が短編のような作風です。時期はＡ'ｓ終了後から七年後の辺りをメインにしています。
タイトル変えたかったけど……思いつかないので多分変える事は無

いかもしれません。

外伝　たまにはギャグも書きたいんです！

ユーノ・スクライアには最近悩みがあった。

それは、自分の想い人、高町　なのはからの相談事である。

いや、ユーノにしてみれば、本来ならなのはからの相談は嬉しい限りで、この無限書庫と言う仕事地獄に舞い込んだ至福の一時なのだが……。

「最近ね、クロノくんがお兄ちゃんみたいになってきたの…」

相談事が彼の黒い親友の事でなければ……だが。

「そっ……そう。

それで、どんな風にアイツは恭也さんみたいに？」

「えっとね……まず、お兄ちゃんの影響で最近、盆栽を始めたみたいなの…」

（盆栽……て、リンディさんの部屋にあったアレかな？

……僕は結構好きなんだけど）

後に、恭也に盆栽仲間が増え、なのはが頭を抱え、桃子と美由希が嘆く事になるが、それはまた別の話である。

「他には？」

「えっとね……私とお出掛けに行く日以外で家に来ると、お兄ちゃ

んと一緒に釣りに出掛けちゃうの…」

ユーノの心にダイレクトアタック！

ユーノは必死に微笑むが、最早、彼の微笑みは無理しているのが一目瞭然である。

しかし、恋する乙女にはユーノの状況は分からない。

司書達はとても見てられないと顔を背ける。

「それにね、お兄ちゃんの影響で、最近、無意識でフラグを乱立するし……、お兄ちゃんと同じで、自分の容姿の良さに気づいていないし……」

ユーノの心にゲイボルグ！

最早、顔は真っ青である。

しかし、漢ユーノはそれでも尚、なのはに微笑み続ける。

司書達には、それがとても尊い姿に見えた。

何故、彼はあんなにも強いのか？

司書達は、自分達の小さな上司の姿に感動すら覚えていた。

何故か、瞬間、ユーノの背中の先に紅い荒野が見える。

そこには、司書達が知らない少年が立っていた。

「行くのか……ユーノ。
ここから先にあるのは……救い無き無限地獄。
いくら、キミが足掻こうと、けして辿り着けぬ理想だぞ？」

「それでもだよ……クリフ」

ユーノは歩む。

更なる地獄へと。

「キミは……分かっているのか！！
キミがコレから挑むのは、無限に待ち構える惚れ気話！
只でさえ、誰もが砂糖を吐く様な言葉！！
そんな言葉を彼女に好意を持つキミが聞けば……っ！！」

「でも……なのはは笑っている」

ユーノは、微笑んでいた。

クリフはその表情に、最早言葉は届かぬと悟る。

「ならば……行くといい」

「ああ、僕は……けして折れないよ…キミの見せた剣の様に…」

瞬間、紅い荒野は消え去る。

「それでね、クロノくんと一緒に出掛けた時にね……クロノくんにいっぱい色んな女の人から視線を背けられた時なんか、自分の容姿

が怖いからとか言い出すしね、あっでも、そんな事ないよ　て言ったら嬉しそうに微笑んでくれたの。
それでね……」

いつの間にか、クロノへの不満からクロノとの惚れ気話に切り替える少女。

表情はへにゃ〜　て感じだ。

それに微笑みながら堪える少年。

その背中に、無数の剣が突き刺さっているのを司書達は幻視した。

『……ああ、やはりここに居たのか』

司書達は、突然画面に現れた黒い少年に目を向ける。

「あっ、クロノくん。どうしたの？」

『今日の仕事が思ったより早く終わってね。
良ければ、コレから一緒にクラナガンを歩かないかと……』

「うん！
じゃあ、今から準備するね！！」

少女は嵐の様に去っていく。

「あ……の…スクライア……司書長？」

「僕は……やりきったよ…クリフ。

ああ……綺麗なお花畑だな…」

「司書長ーーーーー！！！！
ダメです！帰って来てください！！」

「あれ、族長？
えっ、そっちに行っちゃ駄目？
でも……」

「アルフ司書ーーーーー！！！！」

「今、フェイトに連絡入れて……」

「ユウウウウウノォォォォ！！
行っちゃ駄目ぇぇぇぇぇ！！！！」

とても騒がしい無限書庫。

しかし、クロノとなのはが婚約するまで、コレは、割りと日常的な風景だったりする。

外伝　エリオくんの日記帳

最近、ランサーには1人の弟子が出来た。

弟子の名前は、エリオ・スクライア。

その弟子は、思った以上に素質があり、ランサーは自分の槍の全てをエリオに伝えたいと心から望んだ。

だが、ランサーの修行時代で有名なのは影の国である。

流石に、あんな訓練をマスターの子供に施す訳には行かない。

そこで、同じ武人でありながら、恭也と言う素晴らしい剣士を育て上げた男が居たことをランサーは思い出す。

ランサーは、この時代の一般的な鍛練方を参考にしようと高町　士郎の下に赴いた。

そして、ランサーは高町　士郎の鍛練方を参考にしてしまった。

以降、一年間青い不審者にラチられた少年の日記である。

○○月△□日

なんだかお腹の辺りが硬い物に当たっているのに気づいて目を覚ます。
その硬い物はランサーさんの肩だった。
何故か僕の体は荒縄でぐるぐる巻きに固定されていた。
ランサーさんに質問すると、これから修行に出ると告げられる。
これからは、ランサーさんの事を師匠と呼ぶ事になった。
修行……てどんな事をするんだろ？

○○月△△日

修行に出てから一週間。
……ストラーダをラン……師匠に取られた。
魔法に頼っては駄目らしい。
今日も、師匠は僕の目の前で美味しそうにご飯を食べている。
師匠曰く、自分の飯は自分で見付けろらしい……。
でもさ、ここら辺の食べ物になりそうな物……全部師匠が取っちゃったよね？

○○月△○日

ようやく分かったよ。
つまり師匠は、飯を食いたきゃ奪ってみろと言ってたんだ！
早速、師匠の集めて来た食料を奪おうとして……蹴り飛ばされた。
……負けるものか、僕の命が懸かってるんだ！！

○△月□○日

師匠が突然森を出ると言い出した。
追手がどうたらこうたら呟きながら、僕を抱えて師匠は走り出す。
後ろから　息子を返せー　と父さんの声が聞こえたのは気のせいだと思う。

□○月××日

最近、師匠と一緒に受ける仕事に慣れてきた。
僕達の仕事は、命を守る事。
僕は、この仕事に誇りを持てる。
そして、将来の夢も出来た。
僕は騎士になる！
師匠の様に誰かを守れる騎士に！！

×○月□○日

……師匠とはぐれた。
本来、それは不安な事の筈なのに、命が救われたと感じたのは何故だろう？
最近の修行を振り返る。

……集団対個人の修行の為にマフィアを一ヶ所潰した。
お金が無かったから、護衛の仕事を請け負って銃弾の嵐を槍一本で切り抜けた。
雪山で遭難した。
山で熊と決闘した。

……別に、命に関わる事なんてないよな？
師匠と一緒に修行すると何時もの事だし。

早く師匠と合流しないと！

×〇月□□日

師匠とはぐれて途方にくれていた時、アイリーンさんと言う人に助けて貰った。
アイリーンさんは歌手らしく、歌も優しい感じだ。
そう伝えると、コンサートのチケットをくれた。
コンサートは明日らしい。
このコンサートで得たお金は、全て貧しい子供達への募金になる様だ。

……とても優しい人達だな。

コンサートが楽しみだ。

×〇月□◇日

アイリーンさんのコンサート会場に来たとき、嫌な殺気を放つ女性……違う、女装した男を見付けた。

人目が付かない所までその男を着けて、軽い殺気をぶつける。

男は嬉しそうな顔をしながら、ギターのケースから大剣を取り出した。

やっぱりテロリスト！

男は、御神流と言う剣術の使い手と殺し合いをしに来たと言った。

……やらせない。

アイリーンさん達の優しい歌を血で汚させてたまるか！！

結局、僕は男に負けた。

だけど、その男は、御神流の剣士に倒されたとアイリーンさんに教えて貰った。

それと、アイリーンさんには怒られた。

涙を流しているアイリーンさんを見ると、申し訳なさでいっぱいだった。

×〇月△□日

アイリーンさんの家で厄介になってから何日か経った頃に師匠と合流出来た。
その日、アイリーンさんに別れを告げ、師匠と共に修行を再開する。
アイリーンさんの友人のフィアッセさんが、僕達を見て昔の恭也さんと言う人と士郎さんと言う人を見ている様だと言っていた。
僕達以外にも、こんな事をしている人がいたんだな……。

○○月□◇日

もうすぐ、師匠と修行に出てから一年が過ぎようとしている。
突然、師匠は槍を取り出した。
どうやら、一年位前に来た追手が来たらしい。
僕も槍を取り出し警戒する。
突然、師匠は駆け出し黒い服を着た男の人と対峙した。
その人は、あり得ない事に、幾ら宝具を使っていないとは言え、師匠のスピードに食らい付き、二本の小太刀で応戦していた。
僕の方にも誰かが魔法で襲いかかって来た。
僕に魔法を使ったのは人は、ロウファ・S・ハラオウンと名乗った。

その後、戦闘に入る。

ロウファさんは、最初こそ魔法無しで戦う僕のスピードと師匠に教わった技に驚いていたけど、最後には、僕の動きに慣れてきたみたいで、バインドで捕まってしまった。

その後、僕と師匠はミッドチルダに連行された。

父さんとフェイトさんは、師匠が僕に施した修行の内容を聞くや、師匠の両腕をガッチリと固定し連行して行った。

父さん達の笑顔がこれ程怖いと思ったのは初めてだ。

恭也さんは、僕の修行の内容に身に憶えがある様で、用事が出来たと言いながら小太刀を光らせていた。

その日、僕の受けた修行が正気の沙汰では無いことをロウファさんに教えられた。

外伝　と言うか間幕

1人のスナイパーが嫌な汗を流しながらライフルを構えていた。

（大丈夫だ……当たる……当てる）

彼の名はヴァイス・グランセニック。

彼の心は今、狙撃手とは思えない程動揺している。

スコープの先に見えるのは、犯罪者と……自分の妹。

その妹が人質になっていたのだ。

（大丈夫だ……何時もの様に狙うだけだ。大丈夫……）

そして、ヴァイスはストームレイダーの引き金を引いた。

その後、本来の歴史では残酷な結末が待っている。

この世界でも、その弾丸はヴァイスの狙いからズレ、ラグナの瞳に……当たらなかった。

「俺は早く平和な我が国、日本に帰りたいとは思ったさ。早く帰って、ジャ○プを読みたいと思ったさ。

思ってたのに……何処ですかここは？

遠くからよくわからねえ光の玉が飛んでくるわ、目の前では幼女を人質にするクソッタレがいるしな！！」

ヴァイスの弾丸を切り放った少年は、そのまま犯罪者に蹴りを打ち込みラグナを救出した。

「あっ……」

ヴァイスは、ラグナの無事に安堵した後、ある事実に気付く。

あの少年がいなければ、自分の弾丸はラグナの目に……。

「あっうあああああああああああああああああ！！」

ヴァイスの手からストームレイダーが落ちた。

その日から二週間。

次元漂流者と認定された少年……武蔵はグランセニック兄妹の家に厄介になっていた。

「なあ、何時までヘタレてんだよ。

ヴァイスはあの時全力を尽くした。

ラグナに怪我はなかった。
つまり、万事解決だＯＫ？
と言う訳で、さっさとラグナと話してこい」

「すまねぇ……でも、もう少しだけ待ってくれねえか？」

武蔵はすでにこのやり取りを何度もしていた。

ため息を吐きながら廊下に出る。

「俺じゃあ無理なのかねぇ……」

だが、武蔵はどうしても諦めきれない。

ラグナとヴァイス。

この２人が仲のいい兄妹だったと言う事は、２人の落ち込みようから察する事は容易い。

仲の良かった兄妹がバラバラになっていく姿等、武蔵には我慢できないものがあった。

「そんな兄妹が、あんなクソッタレのせいでバラバラになるなんて、我慢出来る訳ねぇーだろ。
お前もそうだろ？」

＞当然です、武蔵。
相棒とラグナの絆……私も、取り戻したい＜

武蔵とストームレイダー。

1人と1機は決意する。

自分達がヴァイスを立ち上がらせると、この兄妹の絆は自分達が再び結び直して見せると。

彼等の物語は六年後。

うちひしがれた青年が、兄の意志を継ごうとする少女と出会った日より動き始める。

外伝　リュウジ

「なっに……？」

それは、あり得る筈の無い光景だった。
転生者たる……自分が……殺される。

「俺は……負けない。
アンタ何かに負けない……みんなに支えられている俺が1人だけのアンタに負ける筈が無いんだぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

一瞬、自らに敗北を齎したティーダ・ランスターの背に2人の男を見た気がした。

1人は、ずっと警戒していたクロノ・ハラオウン。

もう1人は、原作に登場すらしない脇役。

「1人だと？
キミの目は節穴なようだな。私には多くの友人や恋人が…」

「他人の感情や心を操るアンタの隣に誰が居る！？
アンタに……本当の心で笑いかけている人などいるものか！」

ティーダの言葉に一瞬、視界が真っ白になった。

「管理局が悪だとアンタは言ったな。
なら……アンタの行いは巨悪だよ！
気に食わないから殴る。気に食わないから殺す。

そんな男が正義の味方などであるものか！！」

やめろ……

「殺す覚悟がないだと？そんな物あってたまるか！

俺はアンタを殺す。

でも、殺す覚悟なんてない……。

俺は、アンタの命を奪った事を一生悔いて必死に生きる」

やめろ！

私を否定するな！！

「アンタは、ハラオウン元隊長やユーノさんの足下にも及ばない……。

アンタは……ただの過去に類を見ない程異常な犯罪者だ！！」

「黙れ、クロノ・ハラオウン！！」

奴に向かって神速の剣を振り下ろす。

しかし、その一撃は……死に損ないの槍騎士に阻まれた。

「俺は……クロノ・ハラオウンじゃない。ティーダ・ランスターだ！」

ティアナのオレンジ色より少し暗いそれが自身の心臓を突き穿つ。

だが、この魔法は……。

「死して尚……立ちはだかるか…」

スティンガースナイプ
クロノ・ハラオウンが最も多用する魔法だった。

私には死は無い。
天生のスキルがある限り、別の平行世界に私は蘇り続ける。
「管理局が管理外世界に手を出すな！」
今、私の前でかつての私と同じ事をする男がいた。
それは……なんて…滑稽な姿か？
今ならば、第三者として見る今ならば分かる。
その姿は確かに滑稽で愚かとしか言えない。
「だいたいな、女に手を挙げるなんて最低野郎が……」
武器を持つ相手に手を挙げるなとは……随分愚かな事を言うものだ。
「俺はな、大切な奴を守れりゃそれでいいんだよ」
少々、流石に苛立ちを感じる。
この男は、目の前の男の脅威が理解出来ないらしい。
「ハッ、てめえみたいな偽善者は此処で死……」

「どけ、その男は私の獲物だ」
取り敢えず、目の前の転生者［愚者］を斬り捨てる。
後ろで誰かの悲鳴が聞こえたが……どうでもいい事だ。
「久しぶりだな……クロノ・ハラオウン」
「キミは何者だ！？何故、彼を殺した」
思わず笑いがこぼれる。
目の前の男は……クロノ・ハラオウンはなんと言った？
「くはははは、クロノ・ハラオウン。
何故、自身の命をを狙っていた男の事でキミが怒りを感じているのかね？」
「キミは……自分が今、１つの命を終わらせた事に何も感じないのか！？」
何も感じないのか……か。
……感じる事はある。
実に愉快で快楽だ。
愚者を斬った事では無い。
目の前の男の救えなかったという苦しみと怒りが、背後から聞こえるなのはの嘆きが！
「実に愉快だよ」

「なに…」

ああ、認めようティーダ・ランスター。
私はキミの言う通り巨悪らしい。

よく考えれば、ただハーレムを作り出す為ならば……いちいち管理局に手を出さずとも良かった筈だ。

しかし、私は管理局を潰した。
潰した過程に酔い痴れた。
潰した後にも敵がいた事に喜んだ。

認めよう。

私は……

「私は、人の不幸や絶望が好物でね。
特にキミみたいな正義の味方のは……クロノ・ハラオウン！」

その日、私は地球をクロノ・ハラオウンやアースラごと消し去った。

素晴らしい時間だった。
なのはを殺した時のユーノの表情が、アースラを墜とした時のクロノの苦悩が、プレシアを殺した時のフェイトの崩壊が、何もかも愉快だった。

しかし、まだ足りない。

後は……そう、ティーダ・ランスターと名も知らぬあの局員。

あの2人の絶望こそが……。

「くっくっく、私の生み出したイレギュラーに私を初めて殺した男よ……」

さあ、私に……絶望を……

「この、天夢　龍二が全力全開で…」

贈らせてはくれないか？

「殺しつくそう！」

最早、どれ程の世界を殺し、どれ程の人に絶望を与えただろう？
慢心した愚者も、名も知らぬ人も、原作キャラも油断無く、尚且つ娯楽を無くさぬ様に殺して来た。

不屈の心を持つ原作主人公なのは。

心が弱くも仲間の支えで何処までも強くなるフェイト。

常に誰かの支え止まりの名脇役のロウファ。

私が介入しない限り死ぬが、生きていれば脅威となるティーダ。

私に傷を与える事は無くとも、死ねば誰かの心に生き続けるザフィーラとヴァイス。

逃がしてしまえばレジスタンスを作り出す厄介極まりないグリフィスにはやて。

大切な存在を奪った時、限界以上の力を発揮したエリオ。

たまに現れる、正義の味方見習いクリフ。

だが、やはり私の宿敵は……。

「さあ、我が宿敵……クロノ・ハラオウンにユーノ・スクライア。最も油断出来ない最大の敵よ……」

また、私から絶望を贈らせてはくれないか？

外伝　聖夜の夜の亡霊（前書き）

今晩は、偽道です。
今回の外伝もなんか暗いです。
ＰＳＰのなのはを友達に借りてやった時に頭に浮かんだネタです。
では、どうぞ……。

外伝　聖夜の夜の亡霊

目を醒ました時に見たのは大海原だった。
雪が降っているし寒い…。
しかも、何か妙な結界が自分を中心に展開されている。

これは何の冗談だ？

それ以前に、何故昨日まで暖かい気温だったのにこんなに肌寒いのだろう？
さっきから念話も通信も誰にも繋がらないし……。

「一体何が起こったんだ？」

取り敢えず、記憶を整理しよう。
自分は確か、ジュエルシードの探索の為に第９７管理外世界に来た。
その後、２人の魔導師の決闘を止めて……。

そこで記憶は途切れていた。

あり得ない。
何故自分がここに居るのかまったく解らない。
幾ら何でもコレはおかしい。

頭を悩ませていると不意に誰かが結界に侵入した事に気付いた。

それは、黒い翼を持つ天使に見えた。
普通、黒い翼が６枚なら堕天使ルシフェルを連想する所なのだが……。

彼女には、それが当て嵌まらない気がしたんだ。

「……て、何をやっているんだ俺は。
レイデン・イリカル・クロノフル。
我、契約を持って命ずる者なり」

B2Uを弓へと変え、黒い天使の前に立つ。

「あれ、どちら様ですか？」

「自分は時空管理局所属、執務官補佐、クリフ・ハラオウンだ。
キミは何者だ？
キミの様な魔導師はアースラには居なかった筈だが……」

『嘘……クリフくん？』

黒い天使の脇に現れた画面を見て警戒を解く。
そこには、エイミィがお化けでも見る様な表情で映っていた。
つまり、この黒い天使はアースラの魔導師だと言う事か。

「エイミィさん、彼女は？
いつの間にアースラに……」

『……そっか、闇の書の残滓…なんだ。
クリフくん、その子は現地協力者のはやてちゃん』

「八神　はやてです。
よろしくお願いします」

「えっと……ああ、よろしく」

……何時の間に？
まだ、ここには着いたばかりの筈…。

『…で、はやてちゃんは魔法の初心者だから。クリフくんに模擬戦の相手をして欲しいんだけど…』

「待てエイミィさん。俺に死ねと？」

パッと見、はやてと言う魔導師の魔力量はあの黒と白の魔導師より上だ。
不意討ちやせめて遮蔽物の多い場所ならまだしも、こんな場所で戦えば義兄ならともかく、俺では経験の差が物量の差に押し潰されるぞ！？

『でも、タダでは負けないよね？』

……確かに自分は勝てない戦いをする時は次に繋がる様に相手を弱らせる戦いをする。
だが、だがしかし！

「つまりキミはたかが模擬戦で俺に死ぬ覚悟をしろと？」

『うん♪』

やばい、士郎さんの口癖が喉の先まで出かかったぞ！？
はやてって子も同情する……いや、さっきの無し。
うちの子以外の騎士と戦えると言いながら目を輝かせていらっしゃる！！

「はぁ……エイミィさん。これが終わったら焼きそばお願いします。それで手を打ちます」

『そう……だね。
うん、ちゃんとクロノくんとクリフくんにエイミィさんが腕によりをかけて作ってあげるよ！』

「楽しみにしています」

まあ……でも、幾ら魔力が大きいと言っても新人であろう子だ。
流石に初っ端から負ける事は……。

「幾ら新人さん言うても、うちにも広域攻撃Sランクの意地がある！」

うん、無理。
コレは負ける。

線や点の攻撃なら避けれる余裕があるから何とかなる。
面の攻撃をどうやって避けろと？
弓で戦う気だったから間合いも遠いんだが……。

「響け終焉の笛」

「はぁ……無駄だと思うが…」

〈スフィアプロテクション〉

全魔力をプロテクションに集中する。
過去に似た様な事をして痛い目にあった気がするがきっと気のせい

だ。

「ラグナロク！！」

「前言撤回。彼女は絶対ルシフェルだ」

「あれ……終わりなんか？」

はやてが少し拍子抜けした様に呟くと、エイミィは首を横に振る。

『はやてちゃん、まだ終わってないよ……。

コレはクリフくんの何時もの手だから』

「何時もの……ですか？」

『うん、クリフくんはランクだけ見ればとても弱い魔導師だからね。

だから、自分より格上の相手だと最初の一撃で……』

はやてはエイミィの言葉が終わらない内に何かに吹き飛ばされる。

「はぁ……何て馬鹿魔力。

諸に入ってバリアジャケットに傷なしか…」

はやてが声の聞こえた場所に視線を向けると、そこにはボロボロのバリアジャケットを身に纏うクリフの姿があった。

『直撃を受けたフリとか、実際に直撃を受けて墜ちたフリするんだよ』

「なんやか、うちの子達とは違う戦いをする子やね」

ジト目で見られたクリフは苦笑する。

「仕方がないだろ？
俺にはキミみたいに魔力量が多くない。
義兄さんの様なやりくりをする余裕すらも…ね」

クリフの身体は既に透け始めていた。
初撃の防御だけで彼の魔力は殆んど底尽きており、今は飛行魔法を維持するのもやっとと言った表情だった。

「とにかく、この攻防はキミの勝ちだ」

「なんや、納得がいかへんな……」

「ふむ、納得がいかないなら……また次の機会に模擬戦をしよう。
すまないが、今は……なんだか…眠い」

「そうやね。今は眠って……また明日になったら模擬戦や」

「明日……か。
そうだな……また、明日」

エイミィはその2人のやりとりを泣きながら見ていた。
はやては知らない。
既にクリフと言う少年には明日がない事を……。

また、明日。

その約束は、絶対に遂げられない事を……。

外伝　聖夜の夜の亡霊（後書き）

以上です。
クリフは最後まで自分が何であったのか知ることなく消えました。

本当は、はやてがエイミィやクロノと一緒に焼きそばを持ってクリフの墓に行く所とかも書こうと思ったのですが、どうしても文章が定まらないのでカットしました。
そのうち、他の外伝で書くかもしれません。

では、また次回！

外伝　ネオランサーズヘブン……？（前書き）

偽道です。
今回は少しホロウネタと、二部に全く出て来ないランサーの事で書いてみました。
……最近、ちょっと忙しいのとスランプが合わさって更新が遅いです。
楽しみにして頂いている方……本当にすみません。
では、どうぞ……。

外伝　ネオランサーズヘブン……？

空は快晴。
強い日差しは季節の感覚を麻痺させる。
海風は頬に心地よく、ウミネコの鳴き声が寂しさを緩和させる。
文句のつけどころのない絶好のロケーション。

そんな港にアロハシャツと全身黒い服の男達がぼんやりと釣りを楽しんでいた。

「鯖か？」

「ああ、鯖だ」

アロハシャツの男、ランサーは釣り針から魚を取ると、ヒュンッと気持ちいい音をたてながら再び釣り糸を海に垂らす。
黒い服の男、高町　恭也は変化のない釣竿を眺めながらぼんやりと待ち続ける。

無言……

ランサーはマスターであるユーノが無限書庫に行ってからはっきり言って暇だった。
最初はユーノについて行こうともしたが、その場合ゲイ・ボルグを所有し続ける事が難しい事が分かっていたからだ。
ロストロギアかつ質量兵器であるゲイ・ボルグ。
因果の理を捻じ曲げしゲイ・ボルグ。
“心臓を穿つ”と言う結果を“槍を放つ”という原因より先に生じる魔槍。

今の世の常人の思考なら破壊するか、出来なければ封印するかの物騒な持ち物だろう。
で、ランサーは結局地球に残った。
今では香港国際警防部隊……世界最強にして、非合法ギリギリの法の守護者の一員である。
と言うか、幾ら実力主義の集団とは言え……国籍不明の物騒な槍を持つランサーを受け入れたあたり流石としか言えない。

「……なのは達はどうしているだろうな？」

「さあな、俺としちゃあ、嬢ちゃんは心配ないと思うけどな…」

「……そうか」

再び無言。
もともと、恭也は喋る方でもなく……寧ろ無口な方であるし、ランサーは何故か港では余計な事は口にしてはいけないと身に覚えのない記録に強く告げられている。

「衛宮も、釣りに来ていたがって……」

「あの坊主が来るなら、俺は場所を変えるぞ」

ランサーの脳裏に赤と金のアングラーのサーヴァントの姿が浮かんだ。
アーチャー［弓兵］ではない、アングラー［釣り人］だ。

「絶対やめとけ……後悔するぞ…」

「……お前がそこ迄言う程ならやめておこう」
恭也もかれこれ、ランサーとは六年の付き合いがある。
勝負好きのこの男が、それを回避しようとしているなら……回避出来るに越した事はないのだろう。
「……また鯖か？」
「ああ、鯖だ」
恭也は……今夜の夕食の想い馳せながら海を眺めた。

今日の天気は快晴。
恭也は釣り道具一式を持ち何時もの港へ向かっていた。
港には見慣れたアロハシャツ姿の槍兵、ランサーの姿が……。
何時もの恭也ならば、その近くに腰を下ろし無言で釣りを始めただろう。
だが……
「おい、ザフィーラ……なんであいつを連れて来たんだ？」
「すまぬランサー。アレはどうやら……我の事を苦しめたいらしい」
何処か、暗い空気を纏わせた槍兵と守護獣……そして…。

「フィィィィシュッ！！
槍兵と守護獣よ……別にこの港の魚を全て釣りつくしてしまっても構わんのだろう？」

「黙れアングラー！
魚が逃げちまうだろうが！！」

「無駄だ……ランサー。
我が何度も言ったが……この港のあくまは人の言葉など通じん」

全身真っ赤な服を着た、褐色のアングラー……士郎の姿があった。
あらゆる修羅場を乗り越えた恭也だからこそ……いや、この場合そうでなくとも分かるだろう。
彼処は危険だ。
取り合えず、後で合流する筈だったクロノとユーノに連絡をとりながら恭也は別天地を求める事にした。

「……頼む。悪いところがあったのなら謝ろう。
だから、我の楽園を返してくれ」

「俺は今回何もしちゃいねーぞ……幸運か？幸運Eが悪いのか！！」

恭也は身をもって士郎の危険性を教えてくれた二人に心の中で礼を言いながら足早にその場を去る。
出来れば、あの二人の楽園が取り戻される事を願いながら……。

対談　九理歩道場【アンチ纏め？】（前書き）

今晩は、偽道です。

今回のは今まで自分が書いたアンチをギャグ風に纏めたものです。

あくまで、自分の主観に基づいた意見なので……ここはおかしいと思う場所があれば遠慮せずに言って下さい。

次の対談でそれに対する意見を書かせて頂きます。

最後に……本編が行き詰ってる故の時間稼ぎでは無いよ…。

対談　九理歩道場【アンチ纏め？】

少年は世界の為に自分を投げ出した。

その際、少年は作者に出会い契約を一方的に結ばれる。

その契約は…

偽道「タイガー道場的なノリでアンチ纏めしたいから、師匠役やってくんね？」

クリフ「別にいいが……」

そんな、軽いやり取りで出来た空間……その名も！

九理歩道場

住所　虚数県　空間市　或歯座痾度

ユウ「てっ、何でだよ！つーかアンタ、俺を永遠の孤独に落とすとか言って死ななかったか！？」

九理歩「ていっ！」

ユウ「あたっ」

九理歩「貴様、師匠に対してその口の聞き方はなんだ弟子一号！」

弟子一号「誰がてめえの弟子だ！」

九理歩「キミだよキミ。本編で一度もフルネームが出なかったキミだ」

弟子一号「ざけんな！……て、オイっ！？何時の間に名前のとこを弟子一号にしやがった？」

ユウ「まったく、油断も隙もねえな」

九理歩「まあ兎に角、さっさと俺達の役目を説明するぞ」

ユウ「まあ、暇だしつきやってやるよ……で、オリキャラ野郎。さっきから名前のとこ九理歩になってんだが？」

九理歩「母さんに貰った湯呑みに九理歩って書いてあった」

ユウ「書いてあったて……何時貰ったんだよ？」

九理歩「死んだ後墓前に」

ユウ「怖ぇーなオイッ！？つーか、お前死んでるのか？」

九理歩「ああ、今では立派な浮遊霊だ！一時期テレビの人気者だったぞ？」

ユウ「成仏しろやぁぁぁぁ！何やってんだよお前、つーか守護者に為ったんじゃ！？」

九理歩「それは、平行世界の俺。俺は世界じゃなくて作者と契約したの」

ユウ「作者って誰だ……て、言わなくて良い。だいたい予測はついた。それより、話をもどせ。」

九理歩「そうだな、さて……このコーナーは今までのアンチを解説する為の場所だ。タイガー道場みたいに」

ユウ「タイガー道場関係ないだろ！アレは、途中で死んだＭｒ．歩く死亡フラグの為に出来た救済コーナーだ？」

九理歩「何かノリが良いな弟子一号。本編じゃ嫌われたり憐れまれるキャラだったが、こっちなら人気が狙えるＺｅ！」

ユウ「あんたはキャラがぶっ壊れたな！？と言うか何ちょっと格好良く言おうとしてんの！？全然格好良くないからね」

九理歩「まあいいや、本題に入ろう」

ユウ（こいつ……本当にあのオリキャラ野郎か？）

九理歩「では、過去のアンチ～♪」

ユウ「何その今日のワンコ的なノリ！つ～か、続ける気あったんだアレ」

九理歩「アンチ内容、管理局に管理外世界に出て来るなと言い出す馬鹿について！」

ユウ「いや、まんまだろ。管理外世界は管理の外にある世界だ。首を突っ込む方がおかしい！」

九理歩「はあ……確かに、キミの言う通り多少おかしいだろう」

ユウ「だろう！やっぱ「しかし」あ…？」

九理歩「しかし、今回のジュエルシードはユーノ・スクライアが管理局に受け渡しを行った物だ。つまり、俺達は自分達の所有物を回収しに来た」

ユウ「うっ！」

九理歩「さらに言うと、キミの大好きなフェイトやアルフにプレシアだって不法侵入だろ？それ所か、プレシアにいたっては輸送機を攻撃し、ジュエルシードを管理外世界に落ちる原因を作ったぞ？」

ユウ「うぅ…」

九理歩「つまり、キミ達が不法侵入を理由にアンチを行うなら、それらの事も納得がいく様に説明してくれ」

ユウ「（アンチのアンチになったらまともに戻りやがった…）解った、その点はそれで理解する。だがな、フェイトに警告無しでいきなり攻撃は無いだろ？」

九理歩「いきなり攻撃……ね。何時、義兄さんがいきなり攻撃したんだ？」

ユウ「そりゃあ、原作のクロノの登場シーンだよ！」

九理歩「……」

ユウ「何だ、そのビデオ？」

九理歩「原作のビデオだ。今から、義兄さんがいきなり攻撃したか見てみよう」

ユウ「おっおう！（何故ビデオ？今はＤＶＤの時代だろ……。そういや、原作アニメを見るのは初めてだな…）」

クロノ『ストップだ！ここでの戦闘は危険すぎる？』

ユウ「うわっ……空気読めてな…」

九理歩「……キミは現場の状況を読めていないな」

ユウ「どういう事だよ？今から決闘を行うとこだぜ。邪魔するのは不粋だろ」

九理歩「決闘が神聖化されていたのは過去の話だ。そうだな……目の前で２人の少女がそれぞれ殺傷力の低い木製の棒を持っている」

ユウ「ああ」

九理歩「キミは、今日は非番で管轄外の場所に散歩しに来た警察官だ」

ユウ「警察か…」

九理歩「さて、キミはこの喧嘩をたまたま見掛けた。このままでは周りの人にも迷惑がかかりそうだ……どうする？」

ユウ「警察とか抜きでも常識的に止めるだろ」

九理歩「なるほど、では……喧嘩している2人はなのはとフェイトだ。警察は義兄さん。管轄外の地区は管理外世界。ついでに喧嘩している2人の近くには街1つ簡単に吹き飛ばす危険物まである……どうする？」

ユウ「……」

九理歩「たまに、このシーンで義兄さんを叩く為にジュエルシードを完全に封印する奴もいるが……。さて、原作に於いての義兄さんの判断は間違っているかな……常識的に」

ユウ「ろっ論点はそこじゃねえ！フェイトをいきなり攻撃したコトだろ！？」

九理歩「そうだな、では進めよう」

アルフ『フェイト、今の内に！』

ユウ「……」

九理歩「ご覧の通り、義兄さんはアルフに先制攻撃を受けている」

ユウ「じゃあ、いきなり攻撃って…」

九理歩「原作を知らずに二次創作で得た知識か……二次設定だな。キミは前者だろ？」

ユウ「……ああ」

九理歩「二次設定を悪いとは言わないが……あたかも原作ではこうだったと言わんばかりに書かれるから……間違ったクロノ像が広まるだよな」

ユウ「……」

九理歩「他には何か？女性に手を挙げたとかか？」

ユウ「いや、フェイトは戦場で戦う覚悟をして武器も持ってた。某主人公風に言うと、撃っていいのは撃たれる覚悟があるやつだけだ…。つまり、ここまでちゃんと理由があるならフェイトは撃たれても文句は言えないだろ」

九理歩「……意外だな。キミの事だから、批判すると思ったが」

ユウ「俺はなのはに剣を向けたんだぜ？戦場に女も子供も関係ねえ」

九理歩「……あまり好きな台詞ではないが…同意する」

ユウ「……と、今回はここまでか？」

九理歩「ふむ、その様だな。最後まで、俺達の話を聞いて頂きありがとうございました」

ユウ「誰に言ってんだ？」

九理歩「画面の向こうの皆さん」

ユウ「……なんだよ。この世界も二次創作なのかよ」

九理歩「今後も、作者の気が向けばアンチの纏めにこのコーナーが書かれるかもしれません」

ユウ「いやさ、確かに作者つぅ～単語聞いた時から予測してたけどさ」

九理歩「その際、作者の見解だけでは意見が自分に都合良い様になるので、出来ればアンチ庇護側もアンチのアンチ側も俺と弟子一号に意見をください」

ユウ「……まっ、いいや。で、次の題材は？」

九理歩「次は今回の対談に対する意見がきたらそれについて。来なければ【死者蘇生は良いか悪いか！？】だ」

ユウ「答えの無さそうな題材だな…」

九理歩「勿論、死者蘇生反対側は自分、九理歩・ハラオウンです」

ユウ「賛成は必然的に俺……つーか、九理歩って気に入ったの？うみね○みたいな名前の着け方しやがって」

九理歩「では、何時かまた会いましょう！」

ユウ「スルーされた！？」

対談　九理歩道場【感想で対談の材料頂いたのでそれで】　（前書き）

偽道です。

今回は自分の意見を強く前に出し過ぎているので一部の読者様には不快かもしれません。

もしも、意見があったら感想下さい。

それでは……どうぞ。

対談　九理歩道場【感想で対談の材料頂いたのでそれで】

ＣＭ

正義の味方……。
そんな幻想を求めた男がいた。

正義の味方……。
そんな空想を求めた男がいた。

これは、正義の味方の始まりの物語。
これは、ある少年の終わりの物語。

「聖杯？」

『ええ、ロストロギア、聖杯。
アレが第８２管理外世界に現れたのですが……。
何故か世界全体に謎の結界が張られていて“彼等”しか中に送り込めませんでした』

「彼等……ね。
あの子は良いとして、彼は信用出来るかしら……自称、正義の味方を…」

『何かがアレばアルメイダ捜査官が対応するでしょう。
彼は確かに危険ですが……味方なら心強い』

それは、救いなき物語……。

「アーチャー……聖杯がアレば…ロストロギアを破壊する事は…出来るか？」

「ふん、小さいな。
だが……それもまた一興よ。精々足掻くがいい……雑種」

信頼を裏切り憎しみに身を置く捜査官と金色の王。

「怖いよ……ライダー…」

「安心してください……クリフ。私が貴方を守ります」

ただ、戦いに巻き込まれた現地の少年と堕ちた女神。

「セイバー……私は…聖杯を破壊する。構わないか？」

「……やり直したい事はあります。
取り戻したい過去も有ります……だが、王がそれ等を受け入れ誇っているのなら…。
私はその誇りを穢すつもりはない……貴方に従いましょう…エミヤ」

悲劇を破壊する為に剣を取る正義の味方と裏切りの騎士。

それは……語られない悲劇の物語…。

第零章　エミヤ&ロベルト

始まりません。

ユウ「ならやるなぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

九理歩「今日も元気だな弟子一号」

ユウ「だって上のアレ見ろよ！始まりません！？なら書くなよ！！」

九理歩「作者はプロローグだけ書いてないわぁ～　と思ったらしいぞ。

ついでに、ロベルト・アルメイダのアルメイダは２４時間娘の為に走り回る捜査官の仲間、トニー・アル〇イダから来たらしい」

ユウ「どうでもいいよ！どうせロベルトの方はＺから来たとかもどうでも良いんだよ！！」

九理歩「まあ、兎に角今回の議題は……群雲さんより…此方だ」

クロノは管理局の狗
管理局が滅べば次元世界は平和になる
管理局は管理外世界に手を出すな

ユウ「二つ少なくね？ミッドは三権分立をしてない政治体系的に劣った世界ってやつと管理＝支配」

九理歩「作者の低脳ではちょっとまだ調べるのが追い付いていないのと、思ったより長い文章に為ったから次回のようだ」

ユウ「あっそ……で、まずはクロノは管理局の狗」

九理歩「いや……じゃああんた等は警察見る度に政府の狗とか言うのか？軍人見る度に政府の狗とか言うのか？」

ユウ「クロノは気に食わないキャラだけど、これは理解出来ないわ。寧ろ俺はアイツは甘ちゃんだと思うね」

九理歩「ほう……随分な暴言を吐いてくれるな？」

ユウ「はっ、だってそうだろう？ただの管理局の狗だとしたらフェイトもアルフもはやてもヴォルケンリッターも管理局に突き出すだけでいい」

九理歩「確かに……それは否定しない。はやては兎も角、フェイトとアルフとヴォルケンリッターは完全に犯罪者だ。
よく、地球の法律を持ち出す奴がいるから地球で言うと……ヴォルケンリッターを例にすると、通り魔でボコるだけボコって現金を盗む凶悪犯。
理由は治療費を稼ぐ為に仕方なく襲っていました、殺してはいません……かな？」

ユウ「それを、将来的にとか言って助ける辺り甘ちゃんだろ？
ヴォルケンリッターの在り方は同情出来るけど、ちょっとＴＶ前でニュースを見てるつもりになれば、ふざけた連中に見えるぜ？」

九理歩「まあ、それを庇った義兄が管理局の狗とは言い難いな」

ユウ「うちの作者がＡ'ｓの内容を書かなかったのはヴォルケンリッターへの処遇が納得出来てなくてアンチになりそうだったから回避したんだと」

九理歩「……うちの作者は、どんな理由があろうと犯罪者は裁くべき。それが結果的に被害者と加害者両名の為になると考えているからな」

ユウ「ＬＡＷに出て来たオリキャラの闇の書に対する考えが一応作者の考えに最も近いらしいぜ」

九理歩「では、次に「管理局が滅べば次元世界は平和になる」と「管理局は管理外世界に手を出すな」……？」

ユウ「俺はパス、オリキャラ野郎の意見は？」

九理歩「論外だ。管理局が滅べば平和になるだと？
馬鹿げてる、ならキミ達はＯＮＥ　ＰＩＥＣＥと言うアニメを見て海軍が無くなれば海に平穏が齎されるとでも？
ルフィ海賊団が敵対した海賊を思い出したらどうだ？
あんな海賊みたいなのが管理局と言う枷が無くなり世界中に蔓延るんだぞ？
キミ達は平和な次元世界に大海賊時代を再現させるつもりか？
次元航空技術が未熟な原作なら……まあその場合は管理局自体の存在が怪しいがまだわかる。
しかし、アニメ版の割と自由に別世界へ行く技術がある世界観でそれを管理する組織があるのは当然だ。
確かに管理局の中にも汚い奴はいるが、それは警察機関もだろう？
キミ達はニュースで警察の犯罪者を見る度に「警察などこの世に不要！警察が無ければ世界は平和に」と寝言を言うのか？
それに管理局は時空とは直結した意味を持たん。公式ページを見てみろ？
管理局はミッドチルダ他、幾つかの世界が共同で運営している物だ。

因みに共同とは、　複数の人や団体が、同じ目的のために一緒に事を行ったり、同じ条件・資格でかかわったりすること。
けして、支配しているとは言えない。まあ、作者も最近調べ直したみたいだが。
そもそも、本来なら管理局は基本管理外世界に手を出さない。
しかし、管理外の世界で魔法を悪用しようとする者がいないかを監視するのも、管理局の任務の一つである。
管理外である筈の無いデバイス持って暴走してる奴はどう見ても怪しいだろう？
他にも、ロストロギアの暴走を食い止める仕事もある。
もしも、管理局が無ければそれだけでどれ程の世界がロストロギアによって滅びるだろうな？
アニメでその脅威は義母さんが語っていた……まさか知らないとでも？」

ユウ「ストップストップストッーーープ！！
あんたの意見は解ったから！絶対上の台詞は途中で読み飛ばしてる人は何人かいるから！！」

九理歩「……つまり、よくオリキャラが言う管理局要らないは論点が何処かずれている。
管理局要らない、俺は別の世界など知らん、他の世界何て勝手に滅びれば？　と言ってる様な物だ」

ユウ「うわ……そこまで言うか？」

九理歩「ああ、だって……大切な存在さえ守れれば良いから管理局みたいな傲慢な組織と敵対するのだろ？
それは、自分達の技術ではどうしようも無いロストロギアの暴走で滅びかけている世界があるけど俺は管理局みたいに傲慢じゃ無いし、

大切な存在もい無いし、地球も巻き込まれないからどうでもいいや……どちらが傲慢だ！？」

ユウ「そこまでは言ってないだろ？」

九理歩「なら、時空管理局みたいな管理外に手を出す傲慢な組織は消しました。その結果、俺は大切な存在を守れました。代わりに何処かの世界で今日も悲しみが作り出されているみたいですし管理局があれば救えたみたいですが、俺はその事を知る由も無く、故に罪も無いので関係ありません……か？」

ユウ「だからな……」

九理歩「他にも、管理局が無くなりあらゆる犯罪者が世界中に現れました。
勿論、犯罪者は魔法の存在する管理世界で暴れるより管理外に言った方が効率がいいです。
かつて管理局と言われた組織も今は管理世界でのみ活動しています。管理外に逃げ込んだ犯罪者など管理外だから興味ありません。また理不尽に攻撃されたく無いし。
こうして、管理世界とごく一部の管理外世界以外は世紀末な弱肉強食な世界になりました……満足か？」

ユウ「もういい、今回はここまでにしてくれ……マジで」

九理歩「今回、俺の言った意見はあくまで作者個人の考えです」

ユウ「もしも、これに対する反対意見や賛成意見があったら感想お願いします」

九理歩・ユウ「それでは、最後まで読んで頂き有難うございました！」

キャラ設定　クリフ&ロウファ　（前書き）

もしも、勝手に声優さんの名前を載せるのが不味かった場合は教えてください。

キャラ設定　クリフ&ロウファ

クリフ・ハラオウン

イメージCV　関智一さん

年齢　13歳（故人）

性別　男性

魔法　近代ベルカ式

魔力光　赤

使用デバイス　B2U［bravery to you］

経歴

五歳の時、ロストロギアによる災害に巻き込まれた際に衛宮　士郎に助けられる。
クリフにとっての衛宮　士郎は、憧れであり自分の人生全てを掛けてでも辿り着きたい希望でもある。
無銘達の生涯を夢として観る事ができ、全てを救おうとした結果全てを救えない光景を何度も見せ付けられた為、どうしても出る犠牲はアッサリと見捨てる様になる。
その事から他の管理局員からは血も涙もない不気味な子供として扱われていた為、理解者は少なかった。
過去の改変や死者の蘇生を嫌い、どの様な理由があろうとそれを否定する。

ユウと共に虚数空間に落ちた後、英霊の記憶による精神汚染に耐えきれず短い人生を終えた。

Ｂ２Ｕ［ｂｒａｖｅｒｙ　ｔｏ　ｙｏｕ］

種類　アームドデバイス

形状　双剣と弓

使用者

クリフ・ハラオウン

衛宮　士郎

経歴

勇気をキミへ　という名を持つデバイス。

それっぽく単語を？げた馬鹿な文章なのでツッコミは無しの方向で。

ストレージのアームドデバイスで、登録されている魔法はブレイズキャノンを抜かしたＳ２Ｕ。

クリフの死後は、衛宮　士郎のデバイスとなる。

カートリッジはクリフが嫌っていたため付いていない。

ロウファ・Ｓ・ハラオウン→高町　ロウファ

イメージＣＶ　櫻井孝宏さん

年齢

六課成立三年前　１４歳

六課成立一年前　１６歳

性別　男性

魔法　近代ミッド式

魔力光　薄緑

使用デバイス　クルタナ

経歴

ＰＴ事件の際に殺されたライザス・ストリートの息子。
犯人も被害者も誰も死なせないが信条……と言うか義務だと思っている。
ついでに、彼はクリフ・ハラオウンを嫌っている。
ロウファの理想とクリフの在り方が対立する為である。
この世界のロウファが、他の世界の復讐心に囚われたロウファと出逢う事があればお互いを否定しあうだろう。
遠・近・中、全ての距離に対応出来るオールラウンダーだが、逆に突飛した能力は無い。
ベルカ、ミッド両術式に適性があったが、この世界のロウファはミ

ッドを取った。
「想いを守る為に」のロウファもミッド式である。

クルタナ

種類　ストレージデバイス

形状　杖

使用者　高町　ロウファ

経歴

ロウファが時空管理局に入局する際に貰ったデバイス。
デュランダルを一般局員用に改造すると言うコンセプトを元に作られた試作機。
凍結魔法の強化や最低限のＡＩがオミットされているものの、使い手を選び製作費が高い為断念された。
正式な名は無く、その為ロウファが勝手にクルタナと呼んでいる。
登録魔法はＳ２Ｕと同じ。

嫌いな人は読まないでね（前書き）

こんちわ、偽道です。

この作品は、衛宮の後継者的なキャラを書きたいなぁ～　とか、何でみんなクロノをアンチするのかなぁ～　とか考えた結果、特に深く考えずに書いた作品です。
主人公は時空管理局サイドで、本作品に出てくる転生者&チートオリキャラ、更には意味不明士郎は敵！

尚、今回の話はアンチなしのプロローグです。

嫌いな人は読まないでね

それは……大きな火事だった。

当時の俺は知らなかったが、管理局が言うにはロストロギアの暴走による災害だったと聞かされた。

俺はそんな火事の中ただ1人助けられた。

――今でも覚えている――

あの絶望の中、助けに来てくれたあの赤い背中……。

鷹のような瞳に浮かんだあの涙……。

『生きていてくれてありがとう……』

ああ……何であんなにもあの人は救われたような表情を浮かべたのか？

俺にもそんな表情が出来るだろうか？

月日は経ち、俺が義理の兄の部下になった時、あの人がS級次元犯罪者として捕まったと聞いた。

信じられないと思いながら牢に赴くと……あの人がいた。

「なんのようかね？」

彼が言った。

「お礼をいいたくて」

俺が言った。

彼は信じられぬという驚愕の表情をする。
「貴方が憶えているかは分かりません。
俺は……あの大火災で貴方に救われた」
彼は思い出したのか厳しい表情を崩し、優しく微笑む。
「そうか、大きくなったな」
「……はいっ！」
そして、俺は彼にいろんな話を聞いた。
彼の始まり……神話の再来……正義の味方への旅路……救えぬ悲しみ……。
「結局、私は“正義の味方”にはなれなかったよ」
自嘲気味に彼が呟く。
それが……とても悲しくて。
「だったら、俺が正義の味方になります」
無意識にそう答えていた。
「貴方が正義の味方になれなかったのなら、俺が正義の味方になる」
彼は驚いた表情をしていた。
何かに思い出すような表情をしていた。

「ああ……爺さんもこんな気持ちだったのか…」

そして、彼は全ての縛りから解かれたような安堵の表情で……

「ああ……安心した」

この日より、俺、クリフ・ハラオウンの進むべき道程は決まった。

クリフ・ハラオウンは“正義の味方”になる。

それが、あの人、衛宮　士郎さんとの約束であり、俺の唯一の夢なのだから……。

無限に広がるような草原に1人の剣士が立っていた（前書き）

2連続とうこぉぉぉぉぉう！！

何か狂った偽道です！

今回のお話は英霊・無銘についての妄想話。

後書きに自分の妄想説明があるので良かったら立ち寄ってください。

無限に広がるような草原に1人の剣士が立っていた

無限に広がる草原に1人の剣士が立っていた。

「すまぬ…」

いや、アレは確か……。
そう、母さんがある管理外世界にいると言っていたジャパニーズサムライだ。
忠義に厚く、主君と自身の誇りを命よりも大切にすると言う……。

「すまぬ……故に忘れぬ。
お主らの犠牲を忘れぬ、お主らに手をかけた感触も忘れぬ！
義の為に、お主らを斬った罪を忘れぬ！！
某は、正しき義の為に生きよう！
お主らに背を向ける事だけはせぬ！」

剣士は夢想する
かつて夢見た、誰もが笑顔を浮かべる太平の世を夢見る。
坂本　龍馬とか言う男が言った世界を夢見る。
だが、この日本には自身の利益と、自身の誇りの為と現状を維持しようとする輩は多くいる。

一殺多生

その様な少数を斬る事で、多くの民草の笑顔を守れるならば…。

「正しき義の為に……外道に堕ちよう」

―――I am the bone of my sword―――

突然に低い男子の声が響く。
それが言った言葉の意味は理解出来ず、化生の類いか、はたまたは坂本　龍馬の言う海の向こうの国の言葉か……。
しかし、それらの事は別段意味はなさない。
何故なら、この言葉の内にある“思い”は気付けたのだから……。

「よかろう、既に某は外道に堕ちた身。
これが、化生の誘いであろうとも……」

そして……

「某の死後は預けよう。
その見返りをここに受け取りたい」

瞬間、剣士を中心に炎が舞い上がる。
草原は荒野に変わり、剣士の前にはあの人の姿が現れる。

「戯けが、平和の為に自らを棄てるか」

彼が言う。

「ふむ、真に化生の類いだったか。しかし……お主」

どうやら、夢はここまでみたいだ。

あの剣士はどうなるのだろう？

何故、彼は剣士の前に現れたのだろう？

だけど、１つだけ理解出来た事がある。
この瞬間、赤い荒野に１本の剣が増えた……と。

夢を見た。
何時からか見るようになった不思議な夢。
主人公は何時も違う。

例えば、見知らぬ魔導師。
例えば、中世の世を生きた騎士。
例えば、質量兵器を持った兵士。
例えば、どう見てもオーバーテクノロジーの武器を構えた戦士。

主人公は十人十色。
どれも見知らぬ武器を持ち、誰もが見知らぬ顔だ。
その中には、クロノ・ハーヴェイと名乗る義兄の姿もあった。

そして、それらの人達は皆、“正義の味方”だった。

ある女性は全てを救おうと自身の命を棄てた。
ある男は多くの人々の笑顔の為にと、最愛の女性を斬った。
義兄は、悲しみをなくす為に大切な女の子から自身の記憶を奪った。
数々の功績に数々の悲劇……。

そして、皆、最後には同じ場所に辿り着く。
剣が連なる赤い荒野……。
迎え入れるはその世界の赤き王。

「正義の味方……か」

たまに思う。
正義の味方になる……と言う事は、あの赤い荒野に辿り着くと言う事なのだろうか？

身震いがする。

だって、彼処には剣以外なにもない。
あの人達は頑張った。

頑張って、頑張って、頑張って、頑張り抜いて……どの物語も悲劇で終わった。

あんな物はフェアじゃない。

あんな終わりが許されるのか？

なぜ、頑張った彼らは、彼女らは救われない？

腹が立つ。

何であんなにも報われない終わりなのに彼ら或いは彼女らはあんな穏やかな顔をしていたのか？

ある男は仲間に裏切られて殺された。

ある女性は魔女だと罵られて殺された。

ある騎士は悪魔の手先と叫ばれて自身の息子に殺された。

義兄は、全ての人から忘れられ、ただ1人、世界の為に命を落とした。

「兄さん…。あの人が本当に義兄さんなのかは分からない」

ああ、だけど、義兄の性格を考えればあんな結末もあり得るかもしれない。

「だったら、俺はあんな結末を望まない！」

死者は蘇らない。

過去は変えられない。

起こってしまった事を変える事なんて絶対に出来ない。

だって、それはその人の人生を否定する事だから。

だから、俺は夢に出てくる人達を救えない。

でも、今を確かに生きている義兄さんなら救えるかもしれない。
だって、まだそれは起きていない。
未来に抗う権利くらいきっと自分にもある。
「義兄さんを救ってみせる……絶対！」

少年は決意を決める。
しかし、少年は気付いているのだろうか？
自分もまた、正義の味方達の様に……自身より他人を優先している事を……。

無限に広がるような草原に1人の剣士が立っていた（後書き）

偽道「むっ、まさか本当にくるとは。ようこそ我が妄想結界へ。司会を勤めるは…」

クリフ「本作主人公のクリフ・ハラオウンと……」

クロノ「準主人公のクロノ・ハラオウンだ」

偽道「さて、では今回の議題は……あの夢なに？　だ」

クリフ「あの夢は、守護者・無銘に辿り着いた人達の記録だよ」（↑カンペを見ている）

クロノ「守護者・無銘？
そんなサーヴァントは知らないが……」

偽道「無銘はＰＳＰのＦａｔｅのゲームでの紅き弓兵……アーチャーの真名です」

クロノ「エミヤではなく、無銘？」

クリフ「うん。無銘って言うのは人々の思い、正義の味方の理想像なんだって。
この作品では、エミヤが無銘の主軸となって、数多の世界、数多の時間で名を知られる事もなく、しかし、大きな功績を挙げたエミヤに近い人々の座……と言う事になってる」

クロノ「なら、今回出てきた侍も」

偽道「無銘となった1人です」

兄は弟を支える（前書き）

今晩は、偽道です。
今回の視点は準主人公のクロノです。
後、前回の予告とは違うタイトルです。
すみません。

ではどうぞ…。

兄は弟を支える

時空管理局、執務官クロノ・ハラオウン。
この肩書きこそが１１年と言う訓練を経て得たスタートラインの名前だ。
自分の人生の半分以上を訓練に費やした。
最初の５年間は厳しい訓練（本当に色んな意味でも……）を孤独感を感じながら行った。
８歳の誕生日に、母さんは誕生日プレゼントと言い、Ｓ２Ｕを手渡し……。

「今日からクロノの弟になるクリフよ」

と、重大発言をあっさりとしてきた。
だけど、この時のボクにとっては、それはどうでもいい事だった。
つまる所、当時のボクはクリフを家族と認めておらず。
自分は家族と悲しみを消す事にしか興味がなかったのだ。
そんな、出逢いをしてから数日後。
ボクはある光景を目にした。
ある次元犯罪者が質量兵器を持ち学校にたち隠ったのだ。
人質は５人。
男性教師１人に生徒が４人。
その中に義弟の姿があった。

次元犯罪者との交渉は難航した。
次元犯罪者は無理難題な要求ばかりしたのだ。
次元犯罪者のストレスは溜まり、危険な状態が続く。
そして、破裂寸前の風船は遂に爆発した。

「ふざけるなぁぁぁぁ！！
舐めんじゃねぇぞ糞共！！
オレが本気だって事教えてやる！！」

次元犯罪者の銃口が男性教師に突き付けられる。
辺りの空気は氷付いた。

この時、訓練生だったボクは初めての現場に震えていた。
他の局員も手出し出来る距離にはいない。
誰もが、この状況に氷付く。

……ただ、1人を除いて。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

1人の少年が！

最近、義弟になったばかりの少年が！

犯罪者の腕にしがみついたのだ！！

銃弾はそれ、男性教師は救われた。

しかし…

「邪魔すんな！餓鬼ぃぃぃぃぃ！！」

パンッ　と乾いた音が響く。
クリフの胸から赤い水が噴き出す。

「かっ確保ぉぉぉぉぉ！！」

直ぐ様、我に戻った局員が犯罪者にバインドを掛ける。
ボクは犯罪者は他の局員に任せて義弟に駆け寄った。

「大丈夫か！？」

「ク……ロノさん、先…生は？」

義弟の言葉を聞きボクは男性教師に視線を向ける。
教師は、ただ呆然と義弟を見詰めていた。
ショックで思考が追い付いていないのだろう。

「彼は無事だ。キミが守ったんだ！」

それを聞くと、義弟は……痛いとも、助けてとも言わずに…。

「そっか……安心した」

それだけ言った。
まるで、罪など知らぬ聖人のような表情で。

「ふざけるな！目を閉じるな！
安心した？

そんな風に考える程、キミは歳をとってないだろう！！」

怒鳴り散らす。

義弟を叩き起こす為に、無力な自身への罵倒と共に。

「早く目を醒ませ……ッ！？」

そこで気付く。

この、勇敢なボクの義弟の名前が分からない事に。

絆を紡ぐべき少年の名を知らない事に！！

たった、たった数日前に母さんが名を教えてくれたはずじゃないのか！？

そう言えば、義弟はボクをなんと呼んだ？

ああ、本当は分かっている。気付いている！！

クロノさん

赤の他人を呼ぶように！

目上の人を呼ぶように！

義弟は申し訳なさそうなボクを呼んだ！！

当然だ、今までボクは義弟を名前で呼んだ事はない。

いや、それどころか必要最低限の会話しかしていない！！

ふざけるな！

何が悲しみを見たくないだ！

充分にボクの手によって悲しんだ人がすぐ横にいたじゃないか！

治癒魔法を受けている義弟を見ながら拳に血を滲ませる。
周りから見ればそれは、優しい兄が助けられなかった弟を見て苦しんでいる様に見えただろう。

病院に行き、駆け付けた母さんもボクを励まそうとしてくれた。

……違う！

ボクは……そんな優しい奴じゃない！！

悲しみを嫌いながら悲しみを理解せず。

悲しみを嫌いながら悲しみを与えた大馬鹿野郎だ！

その日から1週間…

義弟は目を醒ました。

初めて訓練から抜け出した。
優等生を気取っていたボクは、初めて教官にも、同じ訓練生にも何も言わずに病室に駆け付けた。

「あれ？クロノさん、訓練は？」

やはり、義弟はボクをいまだに“クロノさん”と呼ぶ。

だから言ってやろう！

ボクは本当に自分勝手な奴だから、勝手に絆を紡ごうとしなかった

ボクが！！

「来るのは当然だろう？
キミはボクの義弟だ」

今度は勝手に絆を作ってやる！

「義弟……。クロノ…さん。俺は、貴方達の家族になっていいんですか？」

「当たり前だ。遠慮はしなくていい。
兄が出来る事なら何でも手伝う」

義弟の瞳に涙が隠る。
それを、必至に手で拭い、義弟は顔を挙げた。

「クリフ……クリフ・ハラオウンです！
よろしくお願いします！！」

「ボクはクロノ・ハラオウンだ。
よろしく頼む……クリフ」

その日、出逢ってから半月経ったその日。
ボクとクリフは本当の出逢いを果たした。

クリフには憧れた人がいた。
ボクはその人物の特徴を聞き少し顔をしかめた。

紅き弓兵、動く質量兵器、血濡れた剣…

色々な呼ばれ方をするS級次元犯罪者。
しかし、最も的を射てる呼ばれ方は……。
“ 錬鉄の英雄 ”
最弱にして最強の魔導師。
レアスキル［無限の剣］を持つ男。
少ない魔力に紙の様なバリアジャケット。
かと思えば、強大な魔力の隠る剣にあまりにも硬い盾を持つ騎士。
クリフが錬鉄の英雄の戦闘データを見たいと言ってきた。
ハッキリ言って乗り気ではない。
あの男の在り方を見て、クリフに悪影響が出るかも知れないし、そもそも、あの男の戦闘スタイルが特殊すぎて、得る物は何もないと思ったからだ。
ボクは今でも……この時、素直に戦闘データを見せなかった当時のボクを恨む。
「義兄さん、さっき義兄さんは自分の出来る事なら何でもすると言いましたよね？」
その笑顔はとても綺麗なのだろう……目が笑っていれば。
クリフから謎の黒いオーラが放たれている。
いや、これは所謂幻覚だ。
余りのプレッシャーに幻覚を見ているだけだ！！
「見せてくれますよね……義兄さん？」

「ハイ、ワカリマシタ。ドウゾ」

S2Uを渡すと、クリフは満足そうな笑みを浮かべた。

……この日、真の出逢いと共に“あかいあくま”を降臨してしまったのだ。

クリフは、この日より半月後に退院した。

退院したクリフの一言目はこれだった。

「義兄さん、俺の教導……お願いします」

クリフの魔力ランクはE＋。

6歳とは言え、この結果で魔導師を目指すのは余りにも無謀だ。

ボクは3歳の時点でCランクはあった。

そのランクだってお世辞にも才能があるとは言えない。

故に、クリフが目をつけたのは錬鉄の英雄の双剣。

防御魔法に頼るのではなく、隙を作り、攻撃を誘い、それをいなす。

しかし、通常の神経の持ち主がこんな事を出来る筈もない。

自ら死の可能性を作り、冷徹に自身の死を見極め、自身の死を紙一重で回避する…。

コレが出来る者は仙人か精神が破綻した者くらいだろう。

しかし、ボクはクリフならコレが出来ると感じた……いや、確信した。

クリフが仙人だと言うつもりはない。

クリフは……精神破綻者だ。

クリフにとって、自らの命は他人の命より軽い……いや、もしかすると秤に乗せる価値すら無いのかもしれない。

それは、あの男性教師の件で確認済みだ。

では、何故ボクはその事に気付いていながら、クリフを止めないのか。

ボクもまた、同じ穴の狢だからだ。

いや、ボクはまだ精神が破綻する一歩手前と言った所か？

ボクの精神が壊れる前にクリフが現れた。

そして、ボクの悲しみを嫌う思いと、クリフの他人の死を恐れる思いが似すぎていたために、その異常差に気付いたボクは止まる事が出来た。

悲しみを嫌う思いを棄てた訳ではない。

ただ、自身の身の事も考えられるだけだ。

だが、線の内側か外側かと言うだけで、ボク達の立ち位置はあまりにも近い。

だから、ボクの言葉は意味をなさないだろう。

だって、同じ事をしている人間にそれを止めろと言われても、説得

力がないのだから。

その日から年月は流れ、ボクが１３歳で執務官になり、クリフは１１歳でエイミィと共に執務官補佐となった。

「義兄さん！錬鉄の英雄が死刑だなんてなんでだよ！！」

クリフの声が響く。
それに眉を潜めながら周りに視線を向ける。
どうやら、近くに人はいないようだ。

「言葉道理さ。この決定をしたのは最高評議会だ。
どう頑張ってもこの決定は覆せない」

「今まで表に出て来なかった癖に！
俺だって管理局が真っ白な組織だとは思ってないさ……だけど！！」

最近のクリフはあらゆる悲劇に敏感になっていた。
頑張った奴が報われないのはおかしいと何度も呟いていた。

「酷すぎる。逮捕された理由が酷すぎる！！
何であの人は！
何で助けた筈のあの世界の住人に殺されかけて！
そして、鎖に繋がれなきゃいけないんだ！！」

確かにコレは余りにも悲劇的だ。
そう、まるで英雄の輝かしい功績の後に、今までのツケを払う様な強大な悲劇。

「クリフ、錬鉄の英雄は今この船……アースラの牢にいる。
話したい事があるなら……コレが最後だ」

クリフは顔を青ざめながらも頷く。
クリフが錬鉄の英雄を牢から出す可能性は先ずない。
クリフは管理局を裏切らない。
当然だろう。管理局は大きな組織だ。
別に、敵にするのが厄介だからとかではない。

管理局の崩壊とは即ち時空世界の崩壊を意味する。
時空世界には既にあらゆる面で管理局が関わっている。
それにより、救われている人々は多い。

もしも、管理局によって苦しんでいる人々がいるとしよう。

しかし、それは一体どれ位の規模だ？

救われている人に比べれば、取るに足りない数ではないか？

管理局員とは云わば軍人だ。
現に階級と言う物がある。
軍人は人にして人ではない。
軍人ならば、少数と多数……1と9の命どちらかを選べと言われたら迷わず9を選ばなくてはならない。

ボクにはまだ無理だが、クリフはそれが出来る。

恩人の命と多くの民間人の命。

もしかしたら苦しんでるかもしれない少数の命と今確かに守れている多数の命。

クリフは多数を選ぶ。

何故ならば、クリフの目指す先は“正義の味方”なのだから。

少年の誓いを知る兄は誓う。
少年を守り、味方でいると…。
少年は紅き弓兵の下で神話のはじまりの序章の幕を開け、兄はそっとその背中に着いて行く。

兄は弟を支える（後書き）

なのは「あの子とお話をしたいだけでした」

ユーノ「だけど、彼らが僕達の前に立ちはだかった」

なのは「絶対的な力に…」

ユーノ「なのはをも越える絶対的な魔力」

なのは・ユーノ「「そんなわたし［僕］達を救ってくれたのは…」」

ユーノ「次回、［白い魔導師］」

なのは「わたしはあの子と友達になりたいんだ」

白い魔導師（前書き）

偽道です。

最初に言っておく。
タイトルと内容が合わないと！！

いや、言い訳するとさ……今回の話、本当はユーノから見たなのはについてと、転生者の理不尽さを書くつもりだったんです…。

だけど、気づけばユーノくんに力を入れすぎてしまい、なのはがオマケ程度に…（汗）

少々、今後の展開の為にご都合主義あり。

白い魔導師

輸送中の事故で管理外世界に落ちてしまったジュエルシード。

スクライア一族の皆は僕のせいではないと言ってくれたけど……。

それでも、アレを発見してしまったのは僕だから……。

だけど、僕に力が足りなくて…。

異相体化したジュエルシードに敗れた僕を救ってくれたのは現地の少女……なのはだった。

最初は魔導の才能こそ高いけど、何処にでもいる優しい女の子だと思ってた。

だけど……違う。

なのははとても危うい存在だった。

自らの危険を顧みない在り方。

まるで、自分にはこれしかないとでも言うように、なのはは魔法にのめり込んだ。

僕は、なのはの危うさに気付かないように必死に目を背けていたのかも知れない。

「……貴方達は？」

僕達の前に立つ3人の魔導師。

「フェイト、早くジュエルシードを回収しろよ」

「ここは、俺たちが抑える」

赤毛の魔導師が、膨大な魔力を放つ剣で斬りかかってくる。

それを、ラウンドシールドで防ごうとした。

しかし…

「えっ？」

ラウンドシールドはまるで元よりなかったとでも言うように切り裂かれる。

「降参してくれ」

赤毛の魔導師の剣が僕に向けられる。

僕の魔力は確かに少ない。

攻撃魔法なんて、平均並みかそれより下だ。

でも、防御にはそれなりに自信があった。

その自信があっさりと崩れ去った。

「ジュエルシードをくれないか？
ユウが戦闘に加わる前に終わらせたいんだ」
「士郎はあまいよな。
そんな偽善者なんてやっつければいいのに」
銀髪の魔導師、ユウは大剣型のデバイスを向けてくる。
「ユウ、俺は無駄な争いは嫌いなんだ」
彼らが何者かは分からない。
（なのは、早く逃げて！
彼らが何者かは知らないけど……ジュエルシードは危険な物なんだ。
ジュエルシードを彼らに渡す訳にはいかない！）
（でっでも、それじゃあユーノくんが！）
分かっていた。
なのはの性格だと、僕を見捨てる事は出来ない……。
だけど、ジュエルシードは渡せない。
なら、少しでも可能性があるなら。
「なっ！？」
「うぉぉぉぉぉぉ！！」

変身魔法を解いて士郎と呼ばれた魔導師に飛びかかる。
不意をつけたようで、士郎の手から剣が放り出される。

「なのは！」

「えっ？あっ…うん！」

レイジングハートからピンクの魔力光が銀髪の魔導師に放たれる。
銀髪の魔導師はそれを鬱陶しそうに大剣でなぎ払う。

「なのははその魔導師をお願い！転送！！」

僕は、士郎に組み付きながら転送魔法でなのはからなるべく離れた場所に跳ぶ。

「……驚いた。お前、使い魔だったんだな」

「僕は人間だ！」

「そうか……投影　開始［トレース・オン］」

士郎の手には、さっき手放したはずの剣が握られていた。

「キミには悪いけど、あの白い子が心配だ。
すぐに決める」

「……あの銀髪の魔導師の魔力はなのはよりずっと低かった。
心配するべきは貴方の仲間でしょう？」

士郎と呼ばれた魔導師の剣を避けながら言う。

そうだ、ユウと呼ばれた魔導師の魔力はたぶん……Ａランク。
対して、なのはの魔力はＡＡＡ。
魔力の差だけが勝敗に関わるとは言わないけど……あの魔導師になのはが負ける姿は想像出来ない。

「魔力の大きさだけが戦いを決める訳じゃないだろ？」

彼の剣先をラウンドシールドで反らす。
真っ向から受ければ破壊されてしまうなら、受け流すしかない。

「それでも、なのはは強い。
ずっと魔法を学んできた僕なんかよりも……」

だから、こいつを足止めするのが僕の役目だ。

視点　なのは

「なのははその魔導師をお願い！転送！！」

ユーノくんと士郎くんが視界から消える。
ユーノくんが人間だった事には驚いたけど、今は目の前の子に集中しないと……。

「教えて、なんでジュエルシードを集めてるの？」
「お前みたいな温室育ちにゃ……関係ねぇよ！」
「えっ？」
ユウくんが一瞬の内に目の前に現れる。
レイジングハートがプロテクションで守ってくれたけど……。
「ありがとう、レイジングハート」
＞問題ありませんマスター＜
レイジングハートを持つ手に力を込める。
あの子は強い。
わたしなんかよりずっとずっと……。
「……手加減し過ぎたか？
なら、これならどうだ！！」
＞ブレイド・ショット＜
「レイジングハート！」
＞アクセル・シューター＜
ユウくんの大剣から5個の魔法弾が打ち出される。

それに対抗して、魔法弾を撃って迎撃しようとする。

「えっ？」

わたしの魔法弾はユウくんの魔法弾にあっさりと弾かれた。

「レイジングハート！」

＞プロテクション＜

四発の魔法弾を防ぐだけでプロテクションにヒビが入る。
そして、最後の１つはプロテクションを貫通する。

「かぁ……はぁ」

＞マスター！？＜

たった１つ当たっただけでバリアジャケットが破けた。
今まで、どんな攻撃でも防いでくれた……堅牢な鎧が…。

「悪いな、俺ってチートだからさ。
負ける気しないんだわ」

「あっ…」

レイジングハートはさっきの一撃で手放しちゃたし、身体は動かない。

「この力は、俺の魔眼の１つ、束縛の魔眼だ。
これは、俺が指定した者の動きを封じる事ができる」

あの子に大剣を突き付けられる。
ユーノくんに任せて貰ったのに、ユーノくんに信用して貰えたのに……っ！！

「もう戦場に出てくるな……」

剣が振り上げられる……。

わたしは、ここでおしまい？

こんな所で？

いやだよ……おとーさん、おかーさん、おねーちゃん、おにーちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん……。

「じゃあな、偽善者！」

ユーノくん！！

「なのはぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

視点　ユーノ

「チェーンバインド！」

「なっ！うわぁっ！？」

何とか士郎をバインドで拘束して息を付く。

士郎の剣は確かに強力で恐ろしい物だったけど、士郎個人にはそれがなかった。

「うわっ、なんだこれ！？
こっちの魔術ってこんな事も出来るのか！？」

なぜ、ジュエルシードを集めているのか聞き出したいけど……今はなのはの下に行かないと。

「なんでジュエルシードを集めるのか、後で教えて貰うからな！」

士郎をその場に放置してなのはの下に走る。

士郎とユウ

それ以外にいたもう1人の黒い魔導師。

彼女からはなのはと同じくらいの魔力を感じた。

彼女はジュエルシードの回収を終えるまでは戦いには加わらないとは思うけど……早くなのはに合流しないと。

「もう戦場に出てくるな……」

声が聞こえた方を見る。
そこには…
「なのはが……負けた？」
一瞬足が止まってしまう。
なのはが負けた？
あんなにも才能溢れて、強くて、いつも輝いて見える……なのはが？
「じゃあな、偽善者！」
「なのはぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
身体は勝手に動いていた。
なのはを突き飛ばし、全魔力を込めてシールドを張る。
「ちっ……中々硬いな…淫獣」
シールドにヒビが入る。
「なら、これならどうだ？」
突然、彼の魔力が跳ね上がる。
「俺には５つのリミッターが掛けてある。

その内、３つを外した」

「なっ！？」

通常、リミッター１つで１ランク分の魔力を封印する。

それが……５つ。

つまり、彼の魔力ランクは……。

「ＳＳＳランクの魔導師だって！？」

「そーゆー事。

そして、今の俺の魔力はＳランク」

ラウンドシールドがメキメキと音をたてながら崩れ始める。

「流石、一部の二次創作で防御だけは硬い事はある」

「何を言って……っ！」

パリン　と言う間抜けな音をたてながらシールドが砕け散り、刃は僕の身体に深く突き刺さる。

「……え？」

身体がゆっくりと崩れ落ちる。

力がどんどん抜けていく。

「ああ……」

死ぬんだな…　と他人事の様に感じた。

無力だな……僕は。

1人ではジュエルシードを回収出来ないし、敵の力量すら見抜けない。

これが、無力と言わずしてなんと呼ぶのか？

眠気が襲って来る。

もう、休んでもいいだろうか？

最後になのはを守れたんだ。

……僕にしては上出来ではないか？

「ユーノくん！いやだよ……ユーノくん！！

1人にしないで！！」

なのは……泣かないで……。

キミが泣いていたら、僕は眠れないじゃないか…。

「……二次創作じゃ、これくらいで死なねえのにな…」

なんだ？

あの男は誰だった？

「ユーノくんに近づかないで！！」
「大丈夫だよ、俺には死者を蘇らせる力がある。ジュエルシードの力さえ使えばこれくらい……」
死者を蘇らせる力がある？
だから、殺していいのか？
彼は命を何だと思っているんだ？
「ふざけないで！
死んだ人は蘇らない！！
ううん、たとえ蘇らせる事が出来ても……それが、誰かを傷付けていい理由にならないよ！！」
「うざっ！
なに、その綺麗事？」
綺麗事？
違う、なのはの言っている事は一般的な常識だ。
「殴られたら痛いって思わない！？
間違ってるって感じない！！」
「本当うぜぇ。
まるで、話し合えば誰でも分かり合えると思ってるみたいでムカつく」
こんな……こんな奴に僕は殺される？

今のままじゃ……なのはの命だって…。

「……るな」

僕はこの世界に来てから何が出来た？

「……けるな」

出来た事なんて何もない。

全部……今までの事全部がなのはの力のお陰じゃないか！！

「…ふざけるな！」

そうだ！

僕は……ユーノ・スクライアはなのはに助けられてばっかりで、何一つ恩を返せていない！！

僕は……僕はまだ、こんな所では死ねない！！

その時、視界に１つのジュエルシードが入り込む。

「えっ……ジュエルシード？」

「なっ！？原作の温泉ではここにあるジュエルシードは１つのはず！！」

ジュエルシード……願いを叶える石。

コレを使用してしまえば、僕は後に犯罪者として管理局に逮捕され

るだろう。

……構うものか。

それがどうした？

どうせ、今の僕は死に体だ。

運良く生き延びても、ここで何もせずにいてなのはが傷つけば……

きっと、ずっと後悔する。

「ジュエルシードよ……」

ジュエルシードを自らに取り込むのは危険だ。

ならどうする？

「僕の願いを…」

使い魔ならどうだろう？

素体は動物ではなく、このジュエルシード。

姿は……騎士がいい。

どんな状況でも諦めず、誇り高い……。

そう、最近この世界で呼んだ書物に出てきた赤枝の騎士のような…

……。

「叶えてくれ！！」

ジュエルシードを中心に大きな魔法陣が描かれる。

形状こそ、ミッド式に近いけど、まずそれは有り得ない。
だって、この魔法陣は僕の血によって描かれてる。
ジュエルシードがあった場所に少しずつ人影が浮かび上がってくる。
「まさか英霊！？」
彼が何か言っていたが……聞こえない。
血を大量に持っていかれた。
元々残り少なかった魔力も全て失った。
目の前の人影の姿がハッキリとしてくる。
「サーヴァント・ランサー。
召喚に応じ参上した」
青い鎧を纏った男。
獣の様な印象を与えながらも、どこか優しさを感じるその姿…。
「――問おう。お前が俺のマスターか？」
これが、僕とランサーの出会いだった。

白い魔導師（後書き）

～今日のアンチ～

偽道「やって来ました！
我が小説の名物、“今日のアンチ”！！」

クリフ「……まだ第一回目だろ？」

クロノ「それに、転生者がチートと呼ぶには弱くないか？」

偽道「しっ仕方ないだろ！
自分はチート嫌いだから今までそんなキャラを書いた事ないんだ！！
そもそも、なのは達がドラ○ンボールのキャラ達並に理不尽な強さがあるのに、それ以上なんて……」

クリフ「はいはい、私見はいいから、今回のアンチ内容」

偽道「分かったよ。今回のアンチは“死んだら蘇らせればいい”と言う、たまにいる転生者の考え」

クロノ「なのはも言っていたな。
“死者が蘇らない事”、“蘇らせる事が他者を傷付けていい”理由にはならないと」

偽道「はい、ぶっちゃけ、この考えの転生者は自分が最も嫌うタイプです。
と言うか、転生者の存在自体が“死者は蘇らない”と言う定義を無視しているんで嫌いです」

クリフ「ぶっちゃけ過ぎだよ。
それに、転生者の中にだっていい奴はいるんだ」

偽道「ごめん……存在自体に拒否反応が」

クリフ「最低だ！転生者より、質悪いよあんた！？」

クロノ「まぁ…気持ちの強さに差はあるが、ボクも“死者は蘇らない”と言う意見は賛成だ。
どんな魔法だって死者は蘇らせる事は出来ないんだから」

偽道「自分は、クロノと言うキャラが好きになった１つだな…。
過去の悲しみに囚われず、“今”を必至に生きる姿は格好いいですよね…」

クリフ「完全に振り切るのはもう少し先だけどね」

クロノ「こほんっ。それよりも、他のアンチは？」

偽道「ん～。今回は他にはないかな？
あっ、これは次いでだけど。
今回から出てきた転生者サイドにいる士郎はｆａｔｅルート後で、聖杯戦争からあまり時間は経っていません」

クロノ「確か、衛宮　士郎は偽道が最も好きなキャラではなかったか？」

偽道「正しくはＨＦ以外の士郎です。
ＨＦの士郎は嫌いですねええ…。

一番好きなのはＵＢＷかな」

クリフ「じゃあ、何でｆａｔｅルートにしたの？
どうせアンチの対象になるならＨＦの士郎でも…」

偽道「ＨＦの士郎は士郎じゃない！
アーチャーと士郎が別人のように、ＨＦ士郎も別人だ！！」

クリフ「そっ…そう（そこまで力いっぱい言わなくても）」

偽道「そもそも、どんな理由があろうと、士郎とエミヤが死者復活に賛同する訳がないんだ……だいたい…ブツブツ」

クロノ「不味い、偽道が自分の世界に旅立った」

クリフ「今日はここまでだね。
では、また次回！」

青き槍兵の敗走（前書き）

どうも、偽道です。

今回のを読んで、

こんなのランサーじゃねえ！

くたばれ偽道！！！

と思ってもどうか堪えてください。

マジすみませんｍ（＿＿）ｍ！！

青き槍兵の敗走

炎に包まれながら考える。

今回、自身が呼び出された聖杯戦争についてだ。

最初に自身を召喚した魔術師は良かった。

あれは、いい女だ。

アイツの下で戦えてれば、今回の戦争はどれ程楽しかったか。

しかし、自らの油断がアイツを死なせた。

次のマスターはいけすかねぇ野郎だった。

言峰に令呪まで使われて命令された役目。

それは……偵察。

全ての敵と戦い、しかし全ての敵を倒す事を許されず…。

屈辱だ

全力で戦えないサーヴァントに何の意味がある！！

そんな時に……あの小僧が現れた。

ああ、アレは良かった。

まさか、この時代に見所のある人間がいようとは思わなかった。
あの時、小僧を殺せなかった事には感謝する。
アレは、強くなる。
機会があれば、成長した小僧と死力を尽くした戦いをしたいものだ。
次に思い出したのは紅い弓兵。
いけすかねぇ野郎で、策を巡らす事ばかり上手い野郎だったが……
強かった。
そして、今回の戦争で唯一、全身全霊を持って行った戦い。
結局その戦いとて、半ば引き分けのように終えたが……まあいい。
アレは、小僧の獲物だ。
しかし…
「弱ってるとは言え……僅か数日でサーヴァントと戦う迄にいたるか」
心残りだ。
バゼットみたいな奴も良いが、小僧みたいなタイプも面白い。
ああ、コレでは生殺しだ。
目の前に面白い奴らがいたのに、結局どれも手付かず…。

「まぁ、最後にいい女を助けたんだ……良しとするか」
瞬間、足下に赤い魔法陣が現れる。
あまりの事態に驚き、逃れようとするが、最早この身は死に体だ。
そのまま、抗う事も許されず身体が少しずつ沈んで行く。
「たくよ……本当についてねぇ」
次に目に入ったのは満身創痍の少年。
血を流し過ぎたのか、顔の色は悪く、立っている事が最早、奇跡としか思えない。
だが、良い目をしている。
覚悟を決めた目、戦う者の目、抗う者の目、守る者の目。
そうだ、俺はこんなマスターの下で戦いたかった！！
破壊された心臓の部分に何らかの礼装があり、それが自身を生かし、目の前の少年をマスターだと告げている。
「サーヴァント・ランサー。
召喚に応じ参上した」
聖杯戦争とは違う。
魔術の体系も違う。

本当は、サーヴァントではなく使い魔らしい。
全くの別世界で全く違う存在になった。
「――問おう。お前が俺のマスターか？」
しかし、それに何の意味がある？
目の前の坊主は中々骨のありそうなガキだ。
戦う決意を持つ者だ。
それに、なんの不満がある？
「たぶん、僕はキミのマスターだ」
「承知した。
これより我が槍は汝と共にあり、汝の運命はオレと共にある。
ここに契約は完了した」
我が愛槍を構える。
「それで坊主。敵は……どっちだ？」
視界に入るのは、白いドレスの少女と銀髪の少年。
ドチラも人間とは思えないほどの魔力を放っている。

「なのはを……白い魔導師を助けてください」

「承知した、マスター」

銀髪の少年に向かって駆ける。

銀髪の少年はゲイボルグの切っ先を大剣で反らす。

サーヴァントの……最速のサーヴァントたるランサーの突きを反らしたのだ！

ああ、今回は当たりらしいな。

視点　ユーノ

目の前の光景に魅せられる。

自分がジュエルシードで生み出した……いや、呼び出したが正しいか？

兎に角、その騎士の紅い槍から繰り出される無数の突き。それが余りにも速く、それを目で追う事が出来ない。

しかし奴は、その突きを辛うじて避け、払い、ジリジリと少しずつ

騎士へ接近して行く。
何合が打ち合った後、騎士の浮かべていた笑みが曇り初め、奴から距離を離す。
「解せんな…。
確かにお前の技は一流だ。
だが、お前の剣には経験が感じられん」
「……だったらどうした？
そんなものになんの意味がある？
そんな物に拘る誇りなど……狗にでも喰わせてしまえ！！」
「狗……狗と言ったか貴様！」
騎士の顔が憤怒で歪む。
「ああ、だってそうだろう？
アイルランドの光の御子殿」
「俺が誰か分かっていての言葉か……っ！！」
騎士は奴に向かって走り出し、助走がついた後、高く跳躍する。
「この一撃、手向けと受け取れ！！」
「グラスパー！」
＞了解、我が王＜

騎士の槍に馬鹿みたいな魔力が集まり始める。
騎士は、全身をバネにして、必殺の投擲を放った。
「突き穿つ死棘の槍［ゲイ・ボルク］！！」
対する、奴のデバイスにも馬鹿みたいな魔力が集まり、プロテクションでもラウンドシールドとも違う不思議な盾を造り出した。
＞熾天覆う七つの円環［ローアイアス］＜
騎士の槍と奴の造り出した7枚の花弁がぶつかり、2つの魔力が拮抗する。
「なにっ！アイアスだと！？」
奴の花弁を槍は少しずつ侵食していく。
だが結局、槍は花弁を3枚破壊した所で落ちる。
騎士の顔が屈辱で歪む。
「テメェ……いったい何者だ？」
「さてね…。少なくとも、俺を殺したいならキミ程度じゃ無駄だな」
奴の足下には新たな魔法陣が輝き始める。
騎士は怒りで身体を奮わせながら、なのはと僕の前に立つ。
「すまねぇ……マスター」

聞こえたのは謝罪の言葉。

その声もまた、屈辱で奮えていた。

あの魔法を防ぐ事は出来ないだろう。

となれば、騎士が僕達の前に立ったのは最後の意地だと思……。

「逃げるぜ！」

「は？」

「ふぇ？」

予想外の言葉と共に体が何かに引っ張られる。

それがランサーの腕だと気付いたのは奴の姿が点の様に小さくなった時だった。

「てめぇーー！！

ホントにランサーかぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！

逃げんじゃねぇぇぇぇぇ！！！！！」

「わりぃが、俺はこれ以上、自身の判断ミスでマスターを死なせるような不様は出来ねぇんだよ！！！！！」

ランサーと奴の言い合いが暗い闇に木霊する。

なんだろう？

さっきまでのシリアスが全部無駄？

「にゃぁぁぁぁぁぁぁぁ！
ランサーさん、もっとスピードを落としてくださぁぁぁぁぁぁぁぁ

よく、クロノがK・Yと呼ばれたり、オリキャラに撃墜されるとこ（前書き）

偽道です。

いきなり話が温泉から飛びます。

理由は１つ。

１つ１つ順番に書いていたらユーノが主人公になってしまう気がしたからです！

あと、クリフですが、彼の片寄った正義は他の誰かに否定されます。

何もかも自分が正しい、自分以外は全て悪　なんてのは子供の我が儘みたいだし。

あと、自分の解釈は少しクロノ弁護側に片寄っています。

チョイと急展開もあり。

よく、クロノがK・Yと呼ばれたり、オリキャラに撃墜されるとこ

クロノ・ハラオウンは呆れていた。

それは、隣にいる義弟も同じだった。

「彼女達は……何を考えているんだ？」

画面に視線を戻す。

危険なロストロギア［ジュエルシード］

それを封印した2人の少女に2人の少年。

それはいい。

そこまでなら、彼女らの行った事はとても勇気ある素晴らしい行動だ。

しかし…

「なんで危険物の近くでドンパチを始めるのさ…」

クリフの呟きはまったく持ってその通りなのである。

確かにジュエルシードは沈静化した。

しかし、危険がなくなった訳ではない。

質量兵器で例えれば、アレは信管を抜いた爆弾だ。

それも、街１つ滅ぼす程の……。

たった少しの衝撃すら怖い。

だと言うのに、２人の少女……魔力ランクＡＡＡありそうな少女が今にも戦闘を始めようとしている。

Ｋ・Ｙとかそんな事は関係ない。

空気を読んで助けに行かず、結果、街が滅びましたなど話しにならない。

「行ける？
クロノ執務官、クリフ執務官補佐」

「準備は出来ています」

「その為に、ボクはここにいます」

転送ポートに立つ。

「艦長、２人の少女の戦闘を止める際に、２人の少年から攻撃を受ける可能性があります。
戦闘停止はクリフに任せて、ボクは少し離れた距離より援護の準備をするべきでは？」

本当なら、危険な役目はボクが行いたい。

しかし、ボクの魔法はミッド式でクリフの魔法はベルカ式。

ベルカ式のクリフには遠距離よりの高威力の精密射撃は難しい。
しかも、クリフの魔力ランクはＣ＋。
あのメンバーで有効打を与えられるのは赤毛の少年だけだろう。
母さんは少し思案顔になり、すぐに頷く。
「保険は必要ね。クロノ執務官の進言を受理します」
そして、ボク達は戦場へと向かう。

クリフ　視点

「ストップだ！」
白い魔導師と黒い魔導師の杖を両手の剣で防ぐ。
「自分は、時空管理局所属、執務官補佐、クリフ・ハラオウンだ。
ここでの戦闘は危険過ぎる！
直ちに武装を解除しろ！」
２人の少女の杖から力が抜ける。

後は話し合いを…。

「っ！！！？」

悪寒を感じ、白い魔導師を抱えてその場を離脱する。

先程まで自分達がいた場所に白い魔力光が輝く。

黒い魔導師は念話で打ち合わせしていたのか、ジュエルシードに向かって飛ぶ。

（クリフ、援護する）

クロノの念話と共に蒼い魔力光が黒い魔導師を貫く。

場の人間全てが黒い魔導師に気をとられている内にジュエルシードを確保し、魔法を撃った銀髪の少年を睨み付ける。

「キミは、いったい何をしたのか分かっているのか？」

俺の言葉に反応した銀髪の少年は肩を奮わせながら睨み付けてきた。

「お前こそ！！

人の決闘に水を指し、ジュエルシードと言う危険物の回収作業を邪魔して、尚且つ、ジュエルシード回収した女の子を撃ち落としやがって！！」

何も言わない。

“何も言えない”ではなく“何も言わない”

呆れていたのだ……銀髪の少年に。
まあ、言うなれば……なに言ってんのこいつ？　と言う言葉に尽きる。

（義兄さん、あのバカに説明必要かな？）

（……そんな時間はないさ）

義兄の声色にも呆れがある。
当然だ。少し冷静になれば銀髪の少年が言った言葉は間違いだらけだと気付く。

「はぁ…まあいい。
俺は時空管理局と名乗ったのに、キミは攻撃を仕掛けてきた。
キミを危険人物と判断し拘束する」

「時空管理局？
そんな組織は知ら…」

「知らないとは言わせない。
キミの攻撃は、俺が時空管理局と名乗った後に、明らかな敵意の下に放たれた。
いや、もし例えそうでなかったとしても、よく知りもしない相手にいきなり攻撃するのはナンセンスだ。
つまり、キミは時空管理局を知っていて、尚且つ、キミが行っている事が犯罪だと理解して行動しているのだろう？
そして、キミと連携するように動いた黒い魔導師はキミの仲間でこちらの世界の住人の可能性が高い」

銀髪の少年は苦虫を噛んだような表情を浮かべる。
この程度の言葉、まだ反論のしようがあるはずだが？

「こっここは管理外世界だ！
管理局は関係ない！！」

「いや、確かに“この世界の住人”を俺達の法では裁けない。だが、キミ達なら？」

銀髪の少年と黒い魔導師にその使い魔を睨む。
使い魔の肩がビクリと震えたと言う事は……そう言う事だろう。

「それに、ジュエルシードは、発見者、ユーノ・スクライアから管理局に渡された物だ。
別に、自分達の所有物を捜しにくる事が間違いだとは思えないが？」

瞬間、銀髪の少年から魔法弾が放たれる。
それを紙一重で避け、銀髪の少年に躍りかかる。

しかし、刃は今まで黙っていた赤毛の少年にふせがれた。

「ユウ、ここは退くべきだ」

赤毛の少年は、銀髪の少年……ユウにそれだけ言うと彼らを守るように立ち塞がる。

何故だろう？

赤毛の少年が気に食わない。
意味とか理由とかある訳じゃない……。

ただ、気に食わない。
向こうも同じなのか、こちらに敵意を隠す事なく向けてくる。
「キミは犯罪者に手を貸しているんだぞ……理解しているのか？」
「そんなのは知らない。
俺はただ、フェイトを助けたいだけだ」
フェイト？
ああ、あの黒い魔導師の子か。
「だから、ジュエルシードの回収を手伝う？
アレは、危険な物だ。
だから、民間人に被害が出ない内に回収しに来た」
「フェイトにはジュエルシードが必要なんだ！
ジュエルシードがなければフェイトは救われない！！」
赤毛の少年が必死に訴えてくる。
その真剣な様子は、それが真実である事を語っている。
だが…
「だからどうした？」
「……えっ？」
B2Uを持つ手に力を込める。
「どんな組織でも、どんな英雄でも、全ての人を救う事なんて出来

ない」

今まで何度も見た正義の味方達。

その、全員が一度は経験する絶望。

全てを救おうとして、結局全てを救えない結末。

そんな絶望を何度も何度も見せられた。

「そうだ、全てを救う事なんて出来やしない。
全てを救おうなんて考えでは……結局誰も…救えない。
ならば、必要な犠牲を速やかに排除し、より多くの人を救わなければならない…」

「何を言って……」

「理解出来ないか？
つまり、俺はフェイトという少女を“救わない”」

義兄なら助ける努力をするだろう。
義母さんとエイミィやグレアムさんだって助けようとするだろう。

「ふざけるな！
誰かを救う為に誰かを犠牲にするなんて間違ってる！！」

赤毛の少年は美しいロングソードを構える。

「戯れ言を！！」

赤毛の少年の剣を弾き、懐に蹴りを打ち込む。
少年はそれをモロにくらい吹き飛ぶ。
「そんな事も理解出来ない、戦う意義のない衛宮　士郎は……」
待て、何かおかしい？
この嫌悪感は本当に俺の物か？
「理想に溺れて……」
分からない…
これは俺なのか！？
違う！
こんなの知らない！
確かにアイツは気に食わないけど……。
こんな殺意は知らない！
「溺死しろ！！」
「ちょっと待ちな」
振り下ろされた剣は紅い槍に阻まれる。

そこには、今までいなかったはずの青い騎士が立っていた。
その騎士からは、膨大な……恐ろしい程の魔力がほとばしっている。
「確かに、この小僧はあの小僧に比べればつまらねぇ。
何処が……て言われりゃわかんねえがな」
「ならば、邪魔をするな……“ランサー”」
青い騎士が驚いた顔をする。
「てめえ……何者だ！？
何故、貴様がその呼び方を知っている！！」
その問い掛けに驚いたのはコチラも同じだった。
確かに……有り得ない。
何故、俺は青い騎士をランサーと呼んだ？
何故、俺は……
アイツをあの人の名前で呼んだ？

瞬間、目の前に紅い荒野が見えた。

剣しかない哀しい荒野。

その１つ１つが誰かの墓標である剣郡。

「あ……あアア嗚呼亜亞唖阿婀娃吾會會阿婀娃吾會阿婀娃吾會っ！！」

「なっ！？コイツは！！

気を確かに持て坊主！！」

ランサーが何かを体に書き込んだ様だが……今はそんなの関係ない。

この感覚はイヤだ。

まるで、まるで心が誰かに侵されているような感覚。

まるで、自分と言う存在を消しゴムで消して、その上から違う絵が書かれている様な感覚！

そして、俺の意識はゆっくりと失われた。

クロノ　視点

何が起こったのか分からない。

変化はクリフが赤毛の少年を見てからだった。

突然、念話はカットされ、母さんからクリフの暴走を止めるように告げられた。

意味が分からない。

あのクリフが暴走？

辿り着いた時には、奇声をあげて苦しむクリフの姿とそれを厳しそうに見詰める青い騎士。

白い魔導師とその使い魔はクリフを心配そうに見ていたが、黒い魔導師一向には逃げられたようだ。

「なってめえは！？」

青い騎士がボクにいち早く気付いた様だが、今はどうでもいい。

「そこの愚弟の兄だ！

それより、クリフになにが！！」

「詳しくは分からねえよ！

ただ、コイツの心が、何かに侵されてやがる！！」

心が侵される？

そんな魔法は聞いた事もない！

「このままだとどうなる！？」

「知らねえよ！

俺だってこんなのは初めてだ！！

だが、予測は出来る……このまま行けばこの小僧は…」

その言葉の続きは、あまりにも非現実的で、あまりにも残酷なものだった。

「小僧の姿形をしながら……小僧じゃなくなる」

錆びた剣（前書き）

偽道です。

だんだん、クリフにデッドエンドフラグが立っていきます。

では、どうぞ。

錆びた剣

気がつけば、自分は知らない筈の草原に立っていた。

右を見ても左を見ても……ただ、見えるのは無限に広がる様な青空と無限に広がる草花。

それは何て暖かい光景なのだろう。

静かにその草原をゆっくりと歩いてみる。

一歩一歩、歩む度に感じる土の感触が心地いい。

そんな風に歩いて行く内に大きな岩が見えた。

岩には一本の無骨な剣が突き刺さっている。

刀身は褐色に錆び付いている。

剣の柄には、今にも崩れ去りそうな紅い布が巻かれている。

今にも崩れ落ちそうな錆びた剣。

それが…

とても尊い物に見えた。

その剣に触れてみたい。
許されるならば、その剣を振るってみたい。
体がまるで魅了されたかの様に剣に向かう。
もう少しで手が届く。
あと、１メートル。
９０センチ。
５０……３０……１０……。
「その剣に触れる前に良く考えた方がいい」
そんな声を聞き、手を剣まで後少しの所で止める。
後ろを振り返ると黒い杖を持つ……義兄の姿があった。
「義兄さん？」
その呟きに義兄は首を横に振る。
「ボクは、クロノ・ハーヴェイ。
キミの兄とは同じ様で違う、平行世界の存在さ」

義兄に似た少年……ハーヴェイはそう言って微笑みながら言う。

「キミは、この世界が綺麗だと思わないか？」

その言葉に頷く。

この世界はとても綺麗だ。

まるで……自分の求める理想郷。

いくら、手を伸ばしても辿り着けない理想……。

「ここは、キミの心象風景……つまり、キミの心だ」

その言葉は、何故かすんなりと聞けた。

何となく……何となくだが分かっていたのかもしれない。

「だが、その剣に触れればキミはこの世界を失う。
キミはキミで在りながら、ボクになり、キミの夢に出てきた人々になり、キミの憧れたボク達の王になる」

ああ、つまり、ここは昔から夢にみた正義の味方達の終着点。

「キミがその剣を取った時、この世界は燃え尽き、荒野となり果て……キミは人ではなくなる」

理解できる。

正義の味方は人ではない。
正義の味方は“正義”の味方にしか為れない。
誰かの味方にも、誰かを大切に想う事も許されない。
「その覚悟があるのなら……剣を取るといい」
再び視線を剣に向ける。
一瞬、錆びた剣の後ろに紅い荒野が見えた。
「俺は……」
剣に近づく。
「俺は……」
剣に手を触れようとして……躊躇した。
怖いのだ……剣を手に取る事が。
恐ろしいのだ……この先の道を歩む事が。
「……それで良い。
いくら平行世界の存在だとしても、ボクの義弟がコチラに来るのは嫌だからね」
ハーヴェイの声は、ホッとした様に、安心した様に、何処までも優しかった。

「世界の修正力は、キミを守護者にしようとしている。
神と言う存在に産み落とされたあの男を、世界は気に入らないみたいだ。
世界は、キミと言う本来あり得ない存在とあの男を同時に消したいのだろう」

ハーヴェイの声が霞んで行くように聞こえ、急いで振り返る。

ハーヴェイの姿は透明に為っていた。

足元から、光の粒子になりハーヴェイの体が消えていく。

「それに、今回キミがボク達の王に出逢ったせいか、キミはボク達に近づき過ぎている」

身体が動かない。

ハーヴェイを助けたいのに、声すら出ない。

「キミに力が必要に為った時、キミはまたこの場所に来るだろう。
……その時に決めるんだ。
人として……死ぬか、世界に魂を売り渡し……奴隷になるか」

何時しか、身体を吹き飛ばしそうな風が俺を襲う。

そして……

そして、俺は目を覚ました。

「夢……か？」

それにしては、随分とリアルだった。

夢から醒めた今でも、あの土の感触が、あの草原の匂いが、あの風の柔らかさが思い出せる。

そして……

「綺麗な剣だった」

錆びた剣

未だに、目蓋に焼き付いて離れない。

あの剣は、まるであの人の様だと感じた。

遠き果てに見える憧れた背中。

「…と、そんな事をしている前に」

ベッドの横にある端末に触れる。

自分はどれ程寝ていたのか？
『クリフくん、おはようかな？
ちょっと、今はタイミングが悪いけど…』
「……事件に進展が？
詳しい話を聞かせてください」
『実は……』
エイミィさんの話は、嵐の中でジュエルシードを暴走させている黒い魔導師とその使い魔に銀の魔導師。
なのははこの魔導師達を助けたいと告げてきた所を義兄達が拒否したと言う事だった。
「当然の処置ですね。
それで、そのなのはと言う魔導師達は？」
『今にも飛び出しそう……かな』
……ここで、なのはと言う魔導師が飛び出したら、デメリットがあってもメリットはない。
今回の敵方の魔導師の無茶はコチラとしては有難い。
なんせ、魔力切れ或いは魔力の切れかけと言う弱った所を捕らえる事が出来るかもしれないし、犯人の確保は無理でもジュエルシードは確実にコチラが確保出来る。

確かに、見捨てると言う冷たい決断だが……それが組織だ。
組織が個人個人の感情のままに行動すれば、すぐに瓦解する。
情に流される様な人間は組織のトップにはいらない。
そんな奴は、人としては正しいが、人の上に立つものとしては三流以下。
そして、義兄さんにも母さんにも今は人間性を求められていない。
そう……考え、次になのはと言う魔導師達の行動を予測する。
まだ、話した事もないが……恐らく、命令無視をするだろう。
話を聞けば、彼女の目的は黒い魔導師と話をする事らしい。
皮肉だと感じた。
堂々と彼女を見捨てると言った自分と、黒い魔導師を助けたいなのはと言う少女。
助けると言った者と見捨てると言った者が同じ陣営にいるのだから。
「俺は今からそちらに向かいます」
『でも……』
「憎まれ役は必要です」

通信を切り、Ｂ２Ｕを手に取る。
俺がブリッジに着いた時に見たのは、転送ポートに走る少女……なのはと、それを守る様に立つ少年……ユーノ。
誰も、義兄ですら反応仕切れていない。
「Ｂ２Ｕ」
攻撃する必要はない。
少しの間だけ拘束すれば……。
「オラァッ！」
「なっ！？ぐはぁ！！」
突如現れたランサーに蹴り飛ばされた。
肺の中の酸素が一気に放出し、壁にぶつかる衝撃で気を喪いそうになり……何とか意識を保つ。
「確かにテメェー等は戦上手だ。
だがな、コレは王道じゃねえ！！」
ランサーの矛先は自分に向かっているのが理解出来る。
なのはも既に、転送ポートに辿り着いていた。
俺は、槍を無視しながら、なのはに睨み言葉を投げ掛ける。
「キミは……キミのやろうとしている事は人として正しい。

だが、キミの行動の結果、多くの人が傷つく可能性がある。
あの娘がジュエルシードを何に使うか？
あの銀の魔導師がジュエルシードを何に使うか？
或いは、あの魔導師達の後ろにいる人物がジュエルシードを何に使うか？
可能性は無限にある。
だが、少なくてもここで、あの娘が力尽きればその分の危険な可能性がなくなる。
キミは……」
コレは、卑怯な手段だ。
なのはにはまだ難しすぎる質問を。
なのはには重すぎる質問を。
言葉の暴力として投げ掛け、思いとどませようと言う。
「万が一が起き、多くの人が傷付いた時、この選択は正しかったと言えるのか？」
「それは……分かりません。
でも……」

返ってきたのは、自分の想像した結果ではなく……。

「私は、フェイトちゃんを見捨てたくないんです」

少女とは思えない強すぎる言葉だった。

「高町　なのは、命令を無視します！」

「あの子の元へ……転送！」

ああ、分かっていた事だ。

俺ではなく……ハーヴェイの記憶で。

なのはと言う少女を愛したハーヴェイの記憶を何度も見ていたのだから……。

彼女の想いの強さを…。

「なのはさんが行ってしまった以上、状況は変わりました。ユーノくん、なのはさんの援護に向かってください」

「はい！」

「クロノは近くで待機、ジュエルシードの回収タイミングを見誤らないで」

「了解」

義母さんの指示で義兄さんとユーノは忙しく動き出す。

「おい……小僧」
槍をいつの間にか消していたランサーは俺に小さな声で問うて来た。
「テメェは今は誰だ？」
その質問の意味を理解する。
前回、彼と出逢った時の俺は、半分俺でありながら俺ではなかったのだから。
「まだ、俺は俺だ」
だから、彼にだけ聞こえる様に言い返す。
ランサーが小声で問いかけて来たと言う事は、あまり俺の事を言いふらしていないと言う事だろう。
「……そうかい。気を付ける事だな」
それだけ言うとランサーは霊体に戻った。
どうやら、今回は手を出さないみたいだ。
「艦長、自分も転送を」
「いえ、病み上がりのクリフが行っても足手まといでしょう。貴方は少し休んでいなさい」

その言葉に少しばかり抵抗しようとして……止めた。

確かに、今の自分は弱っているかもしれない。

「分かりました。失礼します」

ブリッジから廊下に出て自室へと向かう。

考えるべき事なら山程ある。

今は、考えを纏めよう。

嵐の中（前書き）

どうも、偽道です。

今回は、アンチとか考えずに書きました。

最初に書いとくと……。

我が小説のなのはは、なんか姫やってます。

いや、男性キャラにスポットライトを当ててたら姫に為っちゃいました（汗）

今回の話を見ても、「あれ、ユーノ強すぎね？と言うかユーノ主人公？」とか言わないでください！

書いてて、自覚はあるんです！！

嵐の中

嵐の中に出た瞬間見えたのは、黒い魔導師とオレンジの使い魔に奴の姿。

「チッ、またテメェーか……淫獣！！」

「くっ！待ってくれ！！
今回は争いに来たわけじゃ……」

銀の魔導師から放たれる魔法弾をラウンドシールドで弾く。

「畜生！
本当に硬えなそれ！！
お前とあのオリキャラだけは気に食わねえ！
せっかく、クロノアンチを楽しみにしてたのに……邪魔しやがって！！」

「こんな事してる場合じゃないだろ！！
今はジュエルシードの封印を……」

「うるせえ！
ジュエルシードの封印なんざ、とっくに終わってんだよ！！」

ジュエルシードの封印が終わっている？

じゃあ、今までのは……？

「罠に決まってんだろ。

さてと……ジュエルシードを寄越しな！」
奴が大剣を振りかぶって突っ込んできた。
それを、ラウンドシールドで受け流す。
ランサーは言っていた。
確かに、奴の技は一流で、力もスピードもある。
でも、戦闘者としては三流以下。
戦いの経験が感じられないのは勿論、相手を見下しているのか、なかなか本気を出そうとしない。
つまり、彼は常に敵を格下と決めつけ、慢心しながら戦っている。
「たくよ……淫獣の癖に避けてんじゃねえよ。
なんですか？
たかがユーノが主人公の真似事ですか？
馬鹿馬鹿しい。
淫獣ごときが転生者に逆らうんじゃねえ！！」
「前から言ってるけど……僕には、ユーノ・スクライアと言う名前があるんだ！」

なのは　視点

フェイトちゃんとアルフさんの魔法弾を防ぐ。

1人の時でもフェイトちゃんに勝てないのに、そこにアルフさんが加わって……。

「レイジングハート！」

＞スフィアプロテクション＜

自分の周りに魔法壁が出来上がる。

「あーーもう！

あいつの防御は硬いね！！」

「うん、防御が上手いんだ……あの子」

フェイトちゃんの魔法弾が次々と魔法壁にぶつかる。

そして……

とうとう、堪えきれなくて……ヒビが入り始める。

「でも、これで終わり」

フェイトちゃんのバルディッシュが鎌の様な形になる。

「アークセイバー！」

回転する刃が魔法壁を切り裂く。
また、私は……負けちゃうの？
私は…

「ストップだ！」

突然、後ろから腕を引き寄せられる。
それと入れ替わる様に黒い背中が私を守る様に前に出る。
「時空管理局、執務官、クロノ・ハラオウンだ！
キミが何故、ジュエルシードを集めているか……詳しい話を聞かせて貰おうか？」
その背中が、強く、逞しく見えた。
「……あなた達に教える必要はありません」
「…だったら、キミ達を拘束した後に聞かせて貰うさ」
クロノくんは視線をフェイトちゃんに向けながら……。
「なのは、命令違反した分、働いて貰うからな」

とだけ告げてきた。

それが、自分が認めて貰えたようで……。

「うん、うん！

クロノくんの背中はちゃんと守るよ！！」

私は、それが嬉しく思えた。

ユーノ　視点

まるで暴風の様な剣激を、避け、反らし、そのどちらも出来ない時は防ぐ。

ランサーには、自分は戦う才能はないと言われた。

それは、そうだろう。

現に、僕には攻撃に使える魔法は皆無と言っても過言ではない。

僕は、戦いにはけして勝つことは出来ない。

だけど……

勝てないと言う事は負けと同意義ではない。

ランサーに唯一称賛されたのは“負けない”才能。
ユーノ・スクライアは、防御に関して言えばアースラにいる、どの魔導師にも負けない。
僕は、ユーノ・スクライアは、勝とうと考えなければ、絶対に負けない！！

「あーーくそっ！！
テメェは亀か！
それでも男か！！
ちまちまちまちま防御ばっかしやがって！！」

「それが僕だ！
地味かもしれない！
目立たないかもしれない！！
でも、これが僕なんだ！
これが、ユーノ・スクライアの戦い方だ！！
みんなが、空に羽ばたく鳥ならば、僕は……帰る場所を守る大樹になる！！」

いずれ、自分は彼女や彼に置いていかれるだろう。
なら、せめて…。
僕は僕に出来る戦いで彼等の居場所を守る。
それが、けして勝つことは出来ない魔導師の戦い方だ！！

「うぜえ！
うぜえんだよお前！！
なんだ、なんなんですかテメェは！！
思えば、テメェだよ！
テメェがこの世界で最も狂ってやがる！！
畜生、なのはには何故かニコポもナデポも効かねぇーし！！
テメェだ！テメェが元凶だ！！
テメェさえ消せば……テメェさえ！！」

奴がその言葉を言い終わるのとちょうど、タイミングを合わせたかの様に爆音が響く。

僕と奴は、一瞬、今の状況を忘れて、爆音のした方向に目を向けた。

そこには、空に広がる火炎と、爆風に弾き飛ばされ、海面に叩きつけられるクリフの姿があった。

クロノ　視点

目の前の魔導師と使い魔。

そのコンビネーションには称賛しか浮かばない。

魔導師も使い魔も、お互いの弱点をすべて把握しているのか、隙と言う隙をすべて埋めてくる。

その動きはまるでダンスでも踊る様に綺麗なもので、いきなり即席でコンビを組んだボクとなのはは何とか付いていくので精一杯だ。

「ごめんね、クロノくん。
足を引っ張っちゃって」

「気にする事はないさ。
それは、お互い様だよ」

ボク達に許された戦闘手段は、背中合わせに立ち、順応無人に駆ける2人の攻撃を迎撃する事のみ。

「それに、誰かに背中を任せると安心するんだ」

「えっ？」

「ボクとクリフは、誰かと組むより1人で戦おうとするからね。
誰かに背中を任せる事は殆どない」

だからこそ……だろう。

「だから、キミに背中を任せていると安心する。
何処までも行ける気がする」

「そっか……うん。
その気持ち……分かるかな。
だから、私はフェイトちゃんに……」

その先の言葉は告げられない。

だが、言いたい事は何となく分かる。
なのは、あの魔導師に教えたいのだろう。
人の繋がりの暖かさを。
突然、爆音が響く。
魔導師達もボク達も一度戦闘を中止し、爆音のあった方向に目を向ける。
そこには、海面に叩きつけられるクリフの姿があった。

クリフ　視点

自室に戻った後、エイミィさんに頼み、戦闘の映像を送って貰う。
そこに映った戦いでなのはと義兄さんが背中合わせに戦う姿を見て……嫉妬した。
それは、義兄さんに対してか？
或いは、なのはに対してか？

それとも、どちらに対してもか？

クリフとハーヴェイの感情が記憶が…。

ごちゃ混ぜになりながら、しかし、１つの結論が導き出される。

もう、義兄さんはハーヴェイには為らない。

つまり、俺のやるべき事なんて、とっくの昔に終えている。

「ああ、だったら簡単だ」

最早、クリフ・ハラオウンが誓った想いは１つだけ。

正義の味方になる

なら、自分がすべき事も理解出来る。

俺は、俺を捨て、俺の世界を捨て、正義の味方になる。

誓いは立てられた。

最早、やり残した事も恐怖もない。

画面を観ていると、義兄さんとなのはが戦闘をしているずっと後ろに蒼い６つの光が見えた。

その画面を拡大する。

それは……

「ジュエルシード」

成る程なと思う。

ジュエルシードは確かに封印されている様だ。

だが、回収までして仕舞えば、ジュエルシードの反応が無くなる。

つまり、俺達を引き寄せる罠は確実に失敗する。

だからこそ、わざわざ回収せずに放置しているのだろう。

回収していないなんて、誰も予測しないはずだから。

「だったら……」

転送魔法を構築する。

赤い魔力光に包まれ、次に見える光景は、嵐吹き荒れる戦場。

まだ、誰にも気付かれていない。

疾走

ジュエルシードに向かって真っ直ぐに飛ぶ。

ジュエルシードさえ確保すれば、この戦いは俺達の勝ちだ。

瞬間、妙な悪寒を感じる。

本能に逆らわずに目を遠く果てにある陸に向ける。

見える筈がない地平線の果てにあの男が……。

衛宮　士郎がいた。

手には黒塗りの長弓。

そして、あの矢は……。

「偽……［カラド］」

アレは不味い。

兎に角、アレは不味い。
中れば死ぬし、カスッても死ぬ。
模索しろ！
考えろ！！
どうすればアレを避けられる？
どうすればアレを防げる……！？

「……螺旋剣［ボルグ］！」

その矢は、直撃コースから逸れているのが理解出来た。
なら、自分のやるべき事はあの矢の衝撃を全力で防御する事。
ジュエルシードに一度背を向け、自分の持ちうる魔力を全て防御に回す。
爆発
ラウンドシールド等無かったかの様に、爆炎に包まれ、吹き飛ばされる。

防御の際に前に突き出した腕には最早感覚がない。

いや、そもそも、自分の右腕はまだあるのか？

視界がボヤける。

聴覚が機能していない。

落ちる。

落ちる墜ちる堕ちる。

衝撃

水切りの要領で何度か跳び……沈む。

一瞬、視力が戻り、沈み行く意識の中、真っ黒に焦げた右腕が視界に入る。

まあ……なんとも我ながら意地汚い事で…。

その、手のひらの中には……3つのジュエルシードが握られていた。

嵐の中（後書き）

クリフ、右腕切断フラグです。

……自分、思うんですよ。

いくら、士郎やアーチャーが手加減しても、リリカルの世界で宝具を使えば、クリフみたいな人が出るんじゃないかな……て。

いや、クリフの被害でも運が良い方かな？

さて、とうとう無印終盤に差し掛かってきたこの小説。

いきなりですが、オリキャラの募集をします！

時代は１０年後……つまり、なのはの第三期から！

募集するのは、一応この作品中で味方に引き込む予定の士郎率いるブレイド小隊の新人２人とその新人と敵対するスカルエッティ側１人。

第三期は、アンチする要素が余りないので、普通に趣味一直線で書くつもりです。

こんな駄作でも、出して構わないと言う方はお願いします。

ついでに、キャラの立ち位置はかなり変えるつもりです。

正義の味方の話（前書き）

偽道です。

今回は最初から最後まで士郎視点。

クリフが好きになってる人がいたら悪いと思いますが。

今回は、クリフだって他人から見れば悪い所がある！

と言う事を書こうと思いました。

そして、最後に出てくるクリフはとうとう……。

海に落ちた後からのクリフ視点は後日出します。

では、どうぞ……

正義の味方の話

「さようなら……シロウ」

黄金に輝く少女が消えていく。

結局、自分は彼女を救えなかった。

だって、自分は彼女を否定出来ない。

自分も、この聖杯が穢れてなければ……あの紅い荒野を無かった事にしただろう。

もしも、俺がそれを否定していたらどうだったのか？

もしも、自分が過去のやり直しなど望んでいなければ……？

『成る程な、貴様はどうやら間違った望みを抱いている様だ。
衛宮　士郎、お前では彼女は救えん。
少なくとも、今回のお前では彼女は救われない』

紅い弓兵が消える前に言った言葉が頭に響く。

あの時のアイツは、まるで殺気を隠そうともせずに、静かに、しかし、すべてを焼き尽くす様な敵意を秘めて言ってきた。

『……衛宮　士郎。
貴様の願いは間違いだ。
死者は蘇らない、過去は……変えられん。

例え、どの様な理由があろうと……それは…許されない』

まるで、その一言一言を語る事で、自らを傷つける様に弓兵は語る。

『貴様が、過去をやり直せば、その事件の後にあったあらゆる人の悲しみも、決意も、想いも、すべてが無かった事になる。

それは、その人達の人生否定だ』

だけど、俺は望んだ……やり直しを。

死者を蘇らせる術があるならば…

過去を変える術があるならば…

俺は、それを……望む。

遠坂の実験の失敗で平行世界に飛ばされた俺は、フェイトとアルフに助けられた。

取り敢えず、自分の身体は幼少の頃に縮んだりはしなかったし、魔術回路が増えていたり、魔力が増えていたりはしなかった事をここに記す。

あれ？

何で俺こんな事考えてんだ？

まあ、兎に角、俺はフェイトに助けられ、その助けてくれたフェイト達を助けたいと思ったんだ。

そして、フェイトの捜し物……ジュエルシードの探索が始まった。

ただ……あの猫は可哀想だったな…。

うん、あの猫を攻撃するのはかなり抵抗があった。

それから暫くして、俺と同じ様に時空……漂流者…だっけ？

兎に角、時空漂流者のユウが現れた。

今でも不思議なのは、ユウは一目見た瞬間、信用出来る奴だと思った事だな。

フェイトも、アルフもスグにユウを信頼したし…。

ユウは、俺達にジュエルシードの回収を協力してくれる事を約束してくれた後、フェイトの母親に会いたいと言ってきた。

最初は、フェイトとアルフは渋っていたが、ユウのある一言が2人の態度を変えた。

「フェイト、俺ならお前の母親を、昔の優しい母親に戻せる」

それを聞いたフェイトは、暫く悩んだ後、首を縦に振った。

フェイト実家（？）である時の庭園に来た後、ユウはフェイトだけを連れて、フェイトの母親に会いに行った。

しばらくすると、満面の笑顔のフェイトとユウが外に出てくる。

ああ、それは、きっと良い事だ。

良い事の筈なんだ。

だけど、この時……俺は…。

その笑顔が歪に見えた。

何故かは分からない。

だけど、俺の知ってるフェイトのたまに見せる笑顔とあの笑顔は違うと感じたんだ。

―ギシリ―

鉄と鉄が擦り合う様な音がする。

―ギシリ―

……俺の心が警報を鳴らしている。

何に？

何故？

分からない。

分からないけど……このままだと、取り返しがつかない事になる気がする。

「大丈夫か士郎？」

ゾクリと悪寒が身体を支配した。

しかし、その悪寒は……。

「ああ、何でもない。

大丈夫だよ……ユウ」

皆と話して行く内に薄れて行った……。

「自分は、時空管理局所属、執務官補佐、クリフ・ハラオウンだ。

ここでの戦闘は危険過ぎる！

直ちに武装を解除しろ！」

時空管理局の執務官補佐と名乗る少年が現れた時、俺は……そいつがアーチャーに見えたんだ。

気に食わない。

アーチャーを見た時に感じた感情が自分の中に生まれる事が理解出来た。

口調こそ違うけど、いちいち正論を言うアイツに腹がたった。

ユウの攻撃をアイツはアーチャーの様に避け、切りかかってくる。

ユウをやらせる訳には行かない！

「キミは犯罪者に手を貸しているんだぞ……理解しているのか？」

犯罪者……と言う単語に苛立ちを感じた。

俺は……いい。

それは……仕方がない。

でも、フェイトとユウがそんな扱いされるのは納得いかない。

「そんなのは知らない。

俺はただ、フェイトを助けたいだけだ」

「だから、ジュエルシードの回収を手伝う？

アレは、危険な物だ。

だから、民間人に被害が出ない内に回収しに来た」

被害が出ない内に？

違う、被害が出ていないのはフェイトとなのはって子のお陰だ！！

それに…

「フェイトにはジュエルシードが必要なんだ！

ジュエルシードがなければフェイトは救われない！！」

そうだ、ジュエルシードさえ有れば、ユウがアリシアを蘇らせる事が出来る！

フェイトにも、フェイトの家族にも笑顔が戻る！

「だからどうした？」

「……えっ？」

一瞬、何を言われたか分からなかった。

目の前の奴は、冷めた瞳で淡々と語る。

「どんな組織でも、どんな英雄でも、全ての人を救う事なんて出来ない」

その姿が……完全に…。

「そうだ、全てを救う事なんて出来やしない。

全てを救おうなんて考えでは……結局誰も…救えない。
ならば、必要な犠牲を速やかに排除し、より多くの人を救わなければならない…」

「何を言って……」

「理解出来ないか？
つまり、俺はフェイトという少女を“救わない”」

紅い弓兵に一致した。

「ふざけるな！
誰かを救う為に誰かを犠牲にするなんて間違ってる！！」

認めない！

衛宮　士郎は目の前の少年を認められない！
あの日、俺は切嗣に全てを救う正義の味方になると誓った！
あの、地獄で死んでいった人達を、いつか蘇らせると誓った！！
ユウには、それが出来る。
そうだ、フェイトだけじゃない。
俺にも、ジュエルシードは必要だ。

「戯れ言を！！」

アイツが二降りの剣を持ち、低い姿勢で向かってくる。

それを、カリバーンで切り払おうとすると、その一撃は、あっさりとアイツの剣に払われ、懐に蹴りを打ち込まれる。

コレは、本当にアイツの蹴りなのか？

あんな小さな体の何処にあんな力が……。

「そんな事も理解出来ない、戦う意義のない衛宮　士郎は……」

朦朧とした意識の中、視線を上げる。

「理想に溺れて……」

ああ、何でお前がこんな所にいるんだよ……。

「溺死しろ！！」

あ……チャー…。

次に目を覚ました時は、フェイトのマンションに戻っていた。

フェイトの泣きそうな顔をしているのを見て罪悪感が募る。

確りしないと。

俺は、フェイトの家族になるんだろ？
俺は、フェイトの兄貴なんだから……心配ばかりかけてらんない。
「士郎、話がある」
「どうしたんだよユウ？」
ユウの話は、俺の魔術についてだった。
「士郎、お前の魔術は俺と同じだ。
だがな、俺達の魔術は実は投影とは言い難い物なんだ」
意味が分からない。
アレが投影ではない？
じゃあ、アレは一体？
「俺達の魔術はな……固有結界」
「ばっ！そんな訳あるか！！
いくら俺でも、固有結界くらい知ってるぞ。
あんな、魔法に最も近い大禁呪が見習いの俺なんかに……」
「いや、確かに士郎の魔術は固有結界だ。
そして、士郎に関して言えば、士郎はそれだけに特化した魔術師なんだよ」

余りにも非現実染みた事実に驚愕する。

「あの～、シロウ、ユウ、それってそんなに凄いの？」

「ああ、俺ほどじゃね～けどな」

ユウは……色々と規格外なだけだろ。

サーヴァントを迎撃するわ、固有結界持ちだわ、魔眼持ちしかも複数だわ、魔術回路は２００を越えてるわ、魔力ランク……だっけ？兎に角、それがＳＳＳランクだわ、俺の唯一の取り柄である投影が使えるわ、家事すら俺より上。

……なに、この完璧具合は？

俺の魔力ランクなんてＣ＋だったのに。

「まっ、コレからは俺が士郎にとことん魔術を教えてやるよ♪」

なんか、いろんな理不尽を感じた。

畜生、平行世界の俺はもっと優遇されてるぞ！！

……あれ？

何で俺、平行世界の自分の事なんて分かるんだ？

……気にしないで置こう。

気にしすぎると、虎とブルマのいる道場に逝く気がする。

管理局が現れていらい、ジュエルシードの集まりが悪い。

ユウが言うには、死者を蘇らせるには少なくとも、あと3つは必要だ。

「仕方ねえ、海のジュエルシードを……いや、そうだ……あのお人好しの性格を利用すれば……」

ユウが何か、ぶつぶつと呟いた後、とんでもない事を言い出した。

「よし、フェイト、士郎、管理局を罠に掛けるぞ！！」

「「えっ……えぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」」

俺とフェイトの大声にユウは顔をしかめる。

「仕方ないだろ？
ジュエルシードが少ないと、死者蘇生に時間が掛かる。
だったら、あの白い奴のジュエルシードを奪ってやろう……て訳」

……ああ、切嗣。

俺、正義の味方としてあるまじき事をしようとしています。

『士郎、この程度は序の口さ。僕なら……』

切嗣の声を強制カットする。

何で切嗣の声が聞こえたか知らないけど、聞いたら切嗣のイメージが崩れそうだ。

『そんな事を言わずに聞いてくれないかな？』

無視！

きっと、コレは世界の意志の罠だ！

今まで、シリアスぶっ通しだったから、ここぞとばかりにギャグの練習をし始めた何かの罠なんだ！！

「ユ……ユウ、シロウどうしたの？」

「きっと、憧れの亡霊と戦ってるんだ。

俺は霊感も高いからな。

あの無精髭のおっさんが士郎の養父だ」

この声、切嗣のもの決定ぃぃぃぃぃ！？

兎に角、切嗣には悪いけど、ユウにお祓いして貰った。

切嗣、俺頑張るから……成仏してくれ！！

と、どうやらフェイト達はジュエルシードの封印を終えたみたいだ。

その後、すぐにフェイトが嵐を作り出す。

それから暫くすると、翡翠の魔導師と白い魔導師が現れる。

確か、ユーノとなのは。

ユーノは、前回、俺が戦った時より……強かった。

違う、それだけじゃない……。

「正義の……味方…」

ああ、あの姿はまるで正義の味方だ。

俺の憧れた正義の味方。

それは、もしかしたら彼のような存在なのではないだろうか？

攻撃［傷付ける］術を持たず、守る事に特化した魔導師。

その姿が……とても眩しく見えた。

そんな時、視界の端に、赤い光が灯る。

急いで視線を向けると……アイツがいた。

アイツは、真っ直ぐにジュエルシードに向かって行く。

「投影　開始［トレース　オン］」

させて堪るか！

それは、ユウとフェイトが頑張って封印した物だ！！

「――投影、重装［トレース　フラクタル］」

この矢ならアイツを止められる。

中てないようイメージする。

「Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ．
我が骨子は捻じれ狂う」

威力が大き過ぎる。

投影の骨子を劣化。

「偽・螺旋剣［カラドボルグ］！」

矢は放たれる。

……なっ！？

馬鹿っ！

何でそこで止まるんだ！！

早く逃げろ！！！

爆音

アイツは爆炎に包まれながら、落ちていく。

俺のせいだ……

何で、カラドボルグなんて物を選んだんだ？

幾ら劣化しても、アレは宝具だ。

あんなものを爆破したら……こうなる事は当然じゃないか！！

俺とフェイトの戦意は無くなっていた。

俺は、人を守ると言った手で、人を殺しかけた……。

「士郎、アレは仕方ねぇ～よ。

寧ろ、何の努力もせずに傍観してたアイツが横からかっ拐おうとしたのが悪い」

「んな訳あるか！！

アレは俺が……っ！」

ユウの顔が近くにあった。

「いいか、士郎。
アレは、お前は悪くない」

「俺は……悪く…ない」

そうだ、アレは俺は悪くないだろう。

悪いのは、傍観者を気取って、何の努力もせずにジュエルシードを奪ったアイツだ。

「そうだな、ユウ。
少し俺は疲れたみたいだ」

そうだ、ユウが言うなら間違いじゃないだろう。

今回のは、アイツの自業自得だ。

時の庭園に戻った俺達は、死者蘇生の準備に入っていた。

「士郎、どうやら……管理局にバレたみてえだ」

「分かった。ユウは儀式に集中しろよ。
俺は足留めに行く」

「士郎、貴方はフェイトのお兄さんなら、無事に帰って来なさい」

「士郎、無茶はしないでね」

「ああ、分かってるよフェイト。
プレシアさん、アリシアと再開出来るといいですね」

「ええ、絶対に再開するわ。
その時は、家族でピクニックでもしましょう」

勿論貴方もよ　と言われた。

ああ、俺はフェイトとアリシアの兄貴でプレシアさんの息子だからな。

兄貴は妹を守らないと！

息子は母親を守らないと！

「士郎」

扉に手を掛けた時、ユウに声を掛けられる。

「お前は……何も…間違ってない」

「ああ、俺は……何も間違ってない」

不思議だ。
ユウに間違ってないと言われると、何も間違ってない気がする。
そうだ、俺は間違ってない。

ホールで管理局の人間と……アルフに遭遇した。

「アルフ……何で？」

「シロウ、やっぱりおかしいよ！
何でアタシ達は会ってすぐにユウを信用出来たんだい！！」

「それは……アイツがいい奴…」

「アンタみたいなお人好しを具現化した様な奴でさえ、アタシは警戒したんだよ！！
それに、最近のシロウもフェイトもおかしいよ！
まるで、まるでアイツに洗脳されてるみたいじゃないか！！」

アルフ……何を言ってるんだ？

何でそんな事を？

（士郎、耳を傾けるな！

アイツは……アルフは俺達を…フェイトを裏切って管理局に逃げやがったんだ！！）

そんな筈がない。

アルフはあんなにフェイトを大切に思ってたんだ。

そんな訳……

（士郎、その気持ちは分かる。
だけど、コレが現実だ）

そ……うだな。

コレが……現実だ。

アルフは俺達を裏切った。

コレが……現実なんだ。

「もういい、アルフに何の事情があったか知らない。
だけど、俺は……お前達を先には行かせない！！」

「それがお前の答えか……衛宮　士郎」

今まで、アルフの陰に隠れて見えなかった存在が前に出てくる。

「ああ、コレが俺の答えだ……クリフ」

そこには、片腕の魔導師がいた。

「成る程、未熟者に相応しい末路だな。
操られた……か」
……おかしい？
クリフの口調までがあの弓兵の様になっている。
「まさか……アーチャー？」
「確かに、この身はそのクラスで召喚された事はある。
……未だに間違った理想を抱いているのか…衛宮　士郎」
「てめえ、その身体の持ち主はどうした！！」
怒りが込み上げる。
確かに気に食わない奴だったけど、殺され掛けたけど！！
アイツはクリフの身体を奪ったのか！？
「勘違いしている様なので訂正しよう。
私は、確かにクリフ・ハラオウンだよ。
だが、それと同時に、クロノ・ハーヴェイであり、衛宮　切嗣であり、名も忘れた存在でもあり……衛宮　士郎でもある」
「何……を」
意味が分からない。

アイツはまさか、アーチャーの真似をして、俺をからかっているのか？

「我が真名は“無銘”。
正義の味方を目指した者達の末路！！

さあ、構えろ衛宮　士郎！

今から、キミが挑むのは正義を目指した者全ての経験［人生］！！」

クリフだった存在はデバイスを構える。

「衛宮　士郎……武具の工程は充分か？」

正義の味方の話（後書き）

結局、クリフは片腕決定。

あと、何故世界と契約し、無銘に為りながらも投影を使わないか。

単純に、クリフには魔術回路がありません。

魔術回路がなければ、幾ら知識があろうが魔術行使が出来ません間桐のワカメみたいに。

てな感じのコンセプトです。

また次回！

それぞれの決意（前書き）

偽道です。

……恭也の口調に自信がないです。

少し大目に見てくれると助かります。

それではどうぞ……

それぞれの決意

あの時の草原に立っていた。

何処か、世界は脅えている様に強い風が吹く。

そんなのを無視して、剣が突き刺さる岩を目指す。

「キミは、決めてしまったのか？」

後ろから聞こえた声に足を止める。

振り向きはしない。

俺はもう、歩むべき道を決めたのだから。

「ああ、義兄さんは、もう、ハーヴェイにはならない。

なのはとユーノ

この2人が義兄さんを支えてくれるなら……きっと大丈夫だ」

「確かにそうかも知れない。

だが、キミの存在だって彼の支えになってるはず」

確かに、そうかも知れない。

だけど、それでも俺は……

「義兄さんなら……きっと分かってくれるさ。
ずっと一緒に居たんだ」

そう、義兄さんは知っていたはずだ。

俺が何処か壊れている事も、俺が何を目指していたのかも。

「キミは……ボク達の末路を知っているだろ！
世界と契約すれば、キミは永遠に抜け出せない地獄に墜ちる！！」

だから、契約など止めてくれとハーヴェイは言いたいのだろう。

ああ、確かにハーヴェイは義兄さんみたいだ。

何時もは、理性的に物事を見ている癖に、いざとなるとトンデもない程お人好し。

「それでも……みんなは笑顔だった」

ハーヴェイの言う様に、確かに正義の味方達の末路は悲劇としか言えない。

それでも！

「みんな、多くの人を救えたと笑っていた！」

他者にはきっと理解されない。

他者にはきっと分からない。

それでも、彼等は、彼女等は！！

「救えて良かったと笑っていたんだ！！」

ああ、だったら、それはきっと良いことだ。

助けた人から向けられるのは敵意かも知れない。

でも、助けた人達は自分以外の誰かに笑顔を向けているかも知れない。

そんな笑顔が守れるなら。

「いつか、きっと俺はこの決断を後悔する。

いつか、俺は過去の自分を殺したい程憎むかも知れない」

それでも……

「でも、やり直しだけは求めない！

俺は……この剣の様に！！」

剣の下に辿り着き、躊躇なく柄を握り締める。

「幾ら、記憶が錆びついても！

幾ら、この体が傷付いても！

幾ら、心が摩耗しても！！」

いつか、俺はこの叫びも忘れるかも知れない。
いつか、俺は自らの理想と現実に押し潰されるかも知れない。
でも、今は……
「俺は、この剣の様に……けして、折れてなんかやんない！！」
錆びた剣を引き抜く。
瞬間、草原は剣を中心に炎に飲まれ、空は蒼から紅に染まる。
見回す限り、剣しか見えない紅い荒野。
正義の味方が辿り着く終着駅。
色んな人がいる。
「……遂に、キミはボク達の座に来てしまったか。
ようこそ、新たな“無銘”」
新たな剣が世界に増える。

クロノ　視点

やるべき事は多くある。
クリフの穴はかなり致命的だ。
まさか、あの赤毛の魔導師が錬鉄の英雄と同じ力を持っているなんて…。
いや、今はそんな事を考えている暇はない。
クリフが命懸けで死守したジュエルシードは何とかコチラが確保したが、残りの３つはアチラが手にしてしまった。
しかも、あの日以来、アチラの動きはない。
つまり、彼等は、ボク達が確保したジュエルシードがなくとも、何等かの目的を遂行出来ると言う事だ。
「クロノくん……大丈夫？」
「ボクは平気だ。
エイミィ、彼等の行方は？」
「駄目、全く手掛かりはないよ。
つい最近まで潜伏してたみたいなマンションにも手掛かりなし」
既に引き払った後……か。
「捜査の幅を拡げてくれ。
ボクもそれに加わる」

「駄目だよ！
クロノくん、もう、３日近く寝ないで仕事してるでしょ。
このままじゃ、クロノくんの体が持たな……」
「クリフの抜けた穴を埋めるにはコレ位はしないといけない」
エイミィの制止を無視して、転送ポートへ向かう。
早く、彼等を見付けなければならない。
これ以上……被害が出る前に！

探査魔法を行使しながら彼等のセーフティーハウスだった場所やその周辺を捜す。
とは言え、アースラの探査でも発見出来なかった物だ。
なかなか、コレといった物が見付からない。
「何か困り事でも？」
後ろから声を掛けられたので、足を止めて振り返る。
そこには、何処と無く武術を足しなんでいる人間特有の動きをする

青年が立っていた。

「いえ、特にその様な事は……」

「しかし、貴方は何処か焦っている様に見えますが」

焦っている？

いや、当然だ。

今、ボク達は彼等の消息を完全に見失っている。

「……守りたい存在を守れなかったのですか？」

ビシリ　と心にヒビが入ったような気がした。

違う、ボクはあの時……目の前で、守ると誓った家族が傷付いたのに……！！

「少し話をしませんか？

俺でも、多少は役にたつかもしれません」

……不思議な人だ。

赤の他人であるボクを心配してくれている事が分かる。

少し、話をしてみても良いかもしれない。

「ええ、構いません」

「そうですか。
ああ、自己紹介を忘れていましたね。
俺の名は、高町　恭也と言います」
「ボクは、クロノ・ハラオウンです」

ユーノ　視点

突然の念話が彼女から届いた事に驚きながらも、指定された廃ビルに向かう。
廃ビルに着いた後に変身魔法を解き、辺りを見渡す。
「来てくれたみたいだね」
奥の暗がりから、女性の姿が現れる。
「ええ、貴女の言った条件通り、この事は誰にも伝えてないよ……アルフ」
そう、僕をここに呼び出したのはアルフだった。
黒い魔導師の使い魔である彼女。
その彼女から、彼等の本拠地……時の庭園の座標を教えたいと言っ

てきたのだ。
条件は誰にもアルフと接触する事を告げない事。
確かに、罠かもしれない。
だけど、もう僕達には彼女との接触以外に彼等の居場所を知る手段は無いだろう。
「その前に、質問なんだけど。
何で、キミは僕達に時の庭園の座標を？」
「……最近のフェイトとシロウが……いや、アイツが来てからのアタシも含めて……何かおかしいんだ」
アルフは、何かを恐れている様に喋り始める。
「アイツの言う事すべてが正しく聞こえるんだよ……。
でもさ、フェイトもシロウも優しいから……自分が誰かを傷付けた時に…“自分は悪くない”なんて言わない筈なんだよ！！」
アルフの話を聞く限り、アルフの言うアイツとは……奴の事なんだと思う。
そして、奴は何等かの手段で、フェイトと士郎を操っている？
「アタシは……もう！
フェイトとシロウが誰かを平然とした顔で傷付ける所なんて見たくないんだ！！

確かに、アイツのお陰で、フェイトに笑顔は戻ったよ。
でもさ……アタシの好きなフェイトの笑顔はあんなのじゃないんだ！！」
アルフの言葉に多分……嘘はない。
この涙が……嘘だと思いたくない。
「分かったよ。
でも……多分、僕達だけじゃ、フェイトと士郎は助けられない」
「じゃあ……どうすれば！！」
フェイトと士郎を救えるのは僕じゃない。
救えるのは……
「アルフ、管理局に行こう。
フェイトと士郎を救えるのは、きっとキミの想いだけだよ」
必死に……彼等を想う、家族だけだと思うから。

クロノ　視点

あの後、敬語は、自分は年下だからやめる様に頼んだ。

その後、公園に立ち寄り、恭也さんにカレーとチーズ味のたい焼きを貰い、ベンチに座っている。

この２つが思っていたより美味しく、素直に感想を言うと、何処か嬉しそうな雰囲気を出していた。

まるで、同志でも見付けたような。

「それで、クロノはどうして焦っていたんだ？」

「義弟が……目の前で…殺されかけたんです」

あの光景は、今でも頭から離れない。

爆炎に焼かれ、海に叩き付けられるクリフの姿。

「なのに……ボクは！！」

スグに助けに行くべきだった。

家族を守ると誓ったのなら、スグに駆け付けるべきだった。

なのに……ボクは！！

「あの時、死にかけた義弟より、近くにいた子を優先したんです！！」

何故かは分からない。
でも、あの時ボクは……クリフとなのはを天秤に掛け……なのはを選んだ。
クリフが生きていたのは、ユーノのお陰だ。
アイツがクリフを回収してくれたから……クリフは生きている。
「確かに、攻撃がそれだけで終わるとは限らなかった！
でも……ボクは！！」
家族より……なのはを取った。
その事実が……重い。
その事実が……自分を苦しめる。
「……キミの行いは責められるものじゃ無いだろう。
誰だって、すべてを守りきれるとは限らない」
恭也さんは、静かに語り始める。
それが……何処か…重く感じた。
「キミにとって、その場には守りたい存在が二人もいたのだろう。
そして、キミはそのドチラかを選ばなければならない状況までに陥った。
キミは片方を選び、片方を選べなかった。
確かにそれは……苦しいだろうな。

俺も、そんな事に為れば自分を責めるだろう。
だが……無茶をしては駄目だ」
恭也さんは自分の膝を撫でながら語り続ける。
「自責の念で無茶をし続けて……キミに何かがあれば、守れた筈の存在すら悲しませる。
それでは……心は守れないんだ」
おそらく、恭也さんはそれを経験している。
膝を撫でていたと言う事は……恭也さんの膝は…。
「それに、俺は……強くなる事ばかりに目が行き……妹が寂しがっているのに気付けなかった」
恭也さんは立ち上がり、背中を向けながら言った。
「クロノ、もっと周りに頼ってみるんだ。
1人では、いずれ限界があるし、無茶をすれば……いずれ、代償を払う事になるし、守りたい人達を悲しませる」
それだけ言って、恭也さんは去っていった。
恭也さんの言葉は、けして忘れてはいけない。
そう……感じた。

クリフ　視点

目が覚める。

頭の中には、あらゆる人の感情と、あらゆる人の記憶があった。

俺？　僕？　あたし？　私？

……一人称が決めずらい。

私……でいいだろう。

この一人称は男でも、女でも使える。

人格のメインは、クリフ・ハラオウン。

肉体は……契約する前に切断されたのか、右腕がない。

しかし、それ以外の負傷は無し。

問題無く戦闘行動は可能。

魔術……使用不可。

クリフ・ハラオウンにはそもそも魔術回路が存在しない。

身体能力は向上。

体の強度……変化無し。

リンカーコア……B＋まで向上。

「あまり、変化は感じないな」

だが……最早、私はクリフ・ハラオウンとは言い難いのかもしれない。

クリフ・ハラオウンの心は焼け落ち、荒野に成り果てた。

この身にやどる記憶は、クリフ・ハラオウンだけの物では無くなっている。

（後悔……しないのだろ？）

「当たり前だ。

私は……あの剣の様に……けして折れはしない」

それぞれの決意（後書き）

いかがでしたか？

今回は、少し自信ないんです……恭也が。

ついでに、クロノは恭也がなのはの兄である事を知らない事にしています。

では、また次回。

突入（前書き）

偽道です。

今回オリキャラが出ますが、物語にはあまり関わりません。

今後、ちょっとは活躍するかも知れませんが……。

では、どうぞ……

突入

ユーノがアルフを連れてきた時は驚いたが、お陰で彼等の居場所が発見出来た。

後は、武装隊の魔導師を選抜し、突入しなければならない。

「執務官、ストリート空曹長以下四名到着しました！」

ストリート空曹長の後ろには、四人の魔導師が並んでいた。

「ああ、今回の任務はかなり厳しい物になるだろう。現地の魔導師も協力してはくれるが……ハッキリ言ってかなり厳しい」

「大丈夫ですよ、ハラオウン執務官。私達は誰も死ぬ気はない。それに、私は息子に帰ったら遊園地に連れていくと約束しましたしね。

ほら、コレが息子です！！今年で七歳なんですけどね。ロウファと言うのですが……コレが、素直で賢い子で…」

「あっあぁ……。そっそうか……」

「いや、執務官は分かっていない！息子ってのは良いものでね！！特に野球を一緒にしている時なんか……」

……誰か止めてくれ。

何なんだ？

先程までいた厳格な男は何処に行った？

この、にへらぁ～　とした男は誰だ？

視線を後ろの四人に向けると……一斉に背けられる。

つまり……諦めろと？

「聞いてますか執務官！？」

「ああ！聞いている、聞いているから少し……」

「ムッ……そうですか。

つまり、私が言いたいのは……」

……誰か、誰か彼を止めてくれ！！

クリフ　視点

ランサーの突きを予測し、払い、隙を見付けては距離を取る。

「ハッ！そのイケスかねぇ喋り方……やはり、貴様かアーチャー！！」

「クッ、確かに私はアーチャーの資格を持っているがね……」

ランサーに模擬戦を挑んでより数十分。

未だに、彼の槍がこの身を貫かないのは運が良いの一言だろう。

「その身体の持ち主はどうした！」

「この身の持ち主かね？

それは、確かに私だよ。

ただ、最早、私はクリフ・ハラオウンとは言い難い存在だろうがね」

義母さんにこの事を伝えた時は罪悪感で苦しかった。

あんなにも、悲しそうな表情を作り出したのは私だ。

私は、どうやら……クリフと言う存在を軽視していた様だ。

「私達は、人々に正義の味方であれと望まれた存在。

今はまだ、私と縁のある存在や私自身の名を憶えてはいるが……座に行けば、その名は奪われる。

私と言う存在の証は、この身に宿る経験のみだけになるだろう。

それが……私達“無銘”だ」

ランサーの蹴りをデバイスで受け、勢いを利用し距離を取る。

「……テメェは、後悔してねぇーのか？」
後悔してないのか……か。
「それは愚問だぞランサー。
ならば、キミは破滅を予言されながらも旅に出た己に後悔するのかね？」
「違ぇーねえ。
そうだな、テメェの選んだ道だ。
それを後悔するようなら、俺は英雄なんざに為っちゃいねーよ」
ランサーが身を低く構える。
次で勝負は決まるだろう。
「戦っていて気付いた事だがな。
お前は、あの野郎じゃねぇーよ。
まだ、テメェは……クリフ・ハラオウンだ」
「……その言葉、有り難く頂いておこう」
そして、お互いの武具はぶつかり合い、私のてから剣は弾き飛ばされた。

なのは　視点

初めて出逢った時は悲しい瞳をしていた。

次に出逢った時は……何かが欠けた様に見えた。

そして、クロノくんと一緒に戦った時に気付いたんだ。

あの子の瞳に、今まで確かにあった強い意志の輝きや優しさがなくなっている事に……。

「それは、私の勘違いなのかもしれません。

でも、アルフさんの話を聞いて、もしも、フェイトちゃんが操られているのなら……助けたいって思ったんです」

「そう、それがなのはさんの戦う理由なのね」

リンディさんは深く頷いた後……その…物凄いお茶を飲み干しました。

「分かりました。

なのはさんが制圧チームに参加する事は止めません。

でも……本当に危険な事だけは憶えて置いて」

「えっと……大丈夫だと思うんです」

根拠なんてない。

でも、大丈夫な気がする。

「クロノくんも、ユーノくんも、ランサーさんも、アルフさんもいるから」

大切な人達が近くに居る。

「だから、フェイトちゃんも、士郎くんも、プレシアさんも助け出せる気がするんです」

みんな、優しい人だから、きっと……想いが届く気がする。

「なのはさんは、みんなを信頼しているのね。
ええ、きっとなんとかなるわ。
いえ、なんとかしてみせましょう」

きっと、なんとかなる。

なんとかしてみせる。

ユーノ　視点

転送ポートの前に、制圧チームが集まる。

なのは、クロノ、アルフ、名前を知らない武装隊の局員五人。

ランサーがまだここにいないのは気になるけど……。

「ボク達の目的は、フェイト・テスタロッサ、衛宮　士郎の保護、及び何等かの目的でジュエルシードを集めている、プレシア・テスタロッサとユウと言う魔導師の逮捕だ。
彼等の本拠地である時の庭園は、ジュエルシードの行使が原因か、虚数空間まで作り出されている。
けして、落ちない様に気を付けて欲しい」

……アルフに幾ら聞いても知らないの一点張りだったジュエルシードを集めている目的。

「何にせよ、ジュエルシードを悪用される可能性がある現状では、何としても彼等を捕らえなければならない。
特に……」

「人の心を操るなどといった外道を放置して置く訳には行くまい」

突然、聞こえる筈のない声に驚き振り返る。

そこには、ランサーと一緒に立つクリフの姿があった。

「クリフ……キミの怪我は一日二日で治る様なものではなかった筈だよ？」

「現に治っているのだ。
さして問題はあるまい？」

クリフの口調に皆が固まる。

彼は……本当にクリフなのか？

そりゃあ、少ししか話した事はないけど……コレは。

「……クリフなんだな？」

「……ああ、私は……まだ、クリフ・ハラオウンだ」

「……そうか」

クロノは、クリフの言葉に頷き、すぐに元の様に戻る。

「まずは、ボクとクリフが先行する。
安全地帯が確保出来たのちに、キミ達は来てくれ」

そして、クロノとクリフは先に時の庭園に突入した。

クリフ　視点

時の庭園に着くと、待っていたのは機械人形の軍勢。

それが、何故か自分達の突入ポイントをぐるりと囲む様に配置されていた。

「クリフ、キミの決意は知っていたよ。
艦長から、キミが何と契約し、どの様な存在になったのかも聞いた」

「……それで、キミは私に何を言いたいのかね、クロノ・ハラオウン」

「まずは謝罪だ。
どうやら、ボクの中での一番大切な人はキミと母さんとは違う人になってしまったみたいだ」

高町　なのは……か。

「それは、謝罪すべき事ではなかろう。
人の感情は理論ではあるまい」

「……そうか。
次に……キミがどう思うかは分からないが……それでも、ボクはキミの兄だ。
キミの選んだ道を……最後まで支えてみせるさ」

本当に……この人は。

人が良すぎるし、生真面目すぎる。

「そうか、では、まずは目の前のコレを排除しよう」

「ああ、ボクが雑魚をやる。
クリフはあのデカイのを！！」

その言葉に頷き、大きな機械人形に向かって駆ける。

＞スティンガースナイプ＜

青い魔法弾が自分の脇を通り過ぎ、機械人形を次々と破壊して回る。
自分に向かって来る機械人形もあるが、それらは無視。
だって……
「スナイプショット！」
義兄さんが、敵を射ち溢す事なんてあり得ないのだから！！
一番、大きな機械人形の足下に辿り着くと、そいつが、斧を振り下ろしてくる。
それを、最小限の動きで避け、Ｂ２Ｕを押し付ける。
＞ブレイクインパルス＜
赤い魔力光が輝き、機械人形は粉々に砕け散る。
さあ……何体でも来い。
この程度で私達を足留め出来ると思うのならば！
そして、物語はクリフ・ハラオウンと衛宮　士郎の戦いへと進む。

突入（後書き）

完全にクロなのフラグ立ててしまった。

……後悔はしていない！

一応、おもちゃ箱では彼等はヒーローとヒロインだったんだし！！

まあ、恋愛とか甘い文章を書ける様な作者ではないので、あまり上手くは書けないだろうけど……。

今回の反省は……なのは視点かな。

まあ、感情を表だたせて書こうとしたけど……失敗したかな？

……不安だ。

では、また次回！

戦闘開始（前書き）

偽道です。

今回は、募集したオリキャラの中で、この時点から出しても違和感為さそうなあるキャラを出させて頂きました。

今回は（今回も？）、少しばかり微妙な仕上がりかもしれません。

では、どうぞ…

戦闘開始

走る、走る、走る

弾き、反らし、ひたすら走る。

「憑依経験、共感終了［トレース　オフ］」

「チッ…」

回避しているそばから、衛宮　士郎の詠唱が終えたであろう声が聞こえる。

「工程完了。全投影、待機［ロールアウト　バレッドクリア］」

視線を衛宮　士郎に向けると、そこには、27本の剣が浮き上がり、射出されるのを今か今かと待ち構えている。

「――停止解凍、全投影連続層写［フリーズアウト　ソードバレル　フルオープン］！！」

走る。

今の私では、衛宮　士郎の放つ剣を全て叩き落とすなど不可能。

ならば、“私達”の経験を最大限に活用し、予測し、避け続け、活路を見出だすしかない。

幸い、衛宮　士郎は、我等の王の戦いの記憶にある英雄王程理不尽

なスペックはなさそうだ。

投影の利点は、幾ら武器が破壊されても魔力がある限り同じ物を幾らでも作り出す事が出来る事だ。

本来、衛宮　士郎の魔力量はけして多くない為、ガス欠になる迄逃げ続けるのが王道であろうが、今回はそう言う暇はあるまい。

それに、この考えはあくまで衛宮　士郎単体の魔力のみだったらの話である。

私達の大半は、それはあり得ないと判断した。

魔術師とは、足りない物は、他の何かで補う生き物だ。

おそらく、何等かの礼装、或はロストロギア。

いや、シンプルに誰かとパスを繋いだ可能性もあるだろう。

つまり、魔力切れを待つという策は使えない。

ならば、投影の弱点を突くしかないのだが……。

投影の弱点は、世界の修正力による宝具の1ランク低下。

だが、幾ら劣化しようが、神秘を含んだ宝具を相手に、私の武器であるデバイスが幾ら優秀であろうと足下にも及ぶ事はない。

つまり、宝具の劣化は弱点にもならない。

責めてもの救いは、衛宮　士郎が投影を使いこなせていない事と、

戦いの経験が浅い事だろう。
投影される宝具は工程があまいお陰でデバイスでも弾く事は出来る。
投影の速度が多少遅いお陰で、僅かだが接近出来る隙がある。
ドチラにしても、焦れば私の敗北は確実だろう。

クロノ　視点

衛宮　士郎はクリフに任せた。

このメンバーの中では、確かに最も合う人選だろう。
ランサーは、ユウと言う魔導師と唯一渡り合える存在だし、他のメンバーでは、彼の剣を回避する事も、防ぐ事も叶わない。
だから、回避だけに専念すれば何とかなるクリフしかあの場には残れなかった。
「クロノくん、やっぱり、クリフくんと一緒に戦った方が……」
「それは駄目だ。
士郎と言う魔導師の目的はおそらく時間稼ぎだろう。
今のボク達にはどれ程の時間が残されているか分からない」

「で、でも……」

「アイツ、シロウに落とされた子だろ……本当に大丈夫なのかい？」

本当は、大丈夫などとは言えない。

それでも…

「クリフは、大丈夫だと言った。

彼を倒すのは自分でなければならないとも言っていた。

だったら……きっと大丈夫だ」

クリフが大丈夫と言ったからには、何か策があるのだと思う。

「執務官！」

ストリート空曹長が、杖を取り出しボクの背中に回り込みプロテクションを張る。

その先には、プロテクションに拳を打ち込む少年の姿があった。

「へぇ～。僕ちゃんの奇襲に気づくなんて……凄いね」

少年はヘラヘラと笑いながら、足下に薄い青色の魔方陣を展開する。

すると、そこから、ぞろぞろとタランチュラよりも少し大きめな蜘蛛が溢れる様に召喚され始めた。

「こんにちは、管理局のみなさん。僕ちゃんはカンダタと言います。

よろしくねー♪」

カンダタと名乗った魔導師の魔方陣から際限なく蜘蛛が溢れ続ける。

一匹一匹はあまり小さな魔力しか感じられないが……あの量は厄介としか言えない。

「キミは……目的はなんだ？」

「ん～、強いて言うならお仕事だからかなぁ～。ついでに、僕ちゃんの雇い主は佐藤じゃないよ♪」

佐藤？

……話の流れからプレシアの事か？

「執務官、ここは私達に任せて先に」

ストリート空曹長と彼の部下達がデバイスを構えてカンダタとボク達を遮る様に立つ。

……ここは彼等に任せるべきか？

彼等は、全員Aランクの魔導師だ。

カンダタと言う魔導師に遅れをとる事はないだろう…。

「分かった。キミ達は彼を頼む」

「了解」

彼等に背を向けて走る。
ボク達にどれ程の時間が残されているかは分からない……。
だからこそ、早く奴等を逮捕しなければならない。

「参ったな。僕ちゃんの依頼は彼の暗殺だったのになぁ～」
「坊主、お前はその仕事が正しいと思っているのか？」
「仕事に正しいも正しいもないだろ？
僕ちゃんもプロだからね、依頼されたら、それを果たすさ！」
ストリートは自分の杖を握る手に力を込めた。
ストリートは一児の父である。
だからこそ、目の前の少年が何故ここまで壊れてしまっているのか？
何故、誰も彼を叱ってやらないのか？
本当に、本当に頭にきていた。
そして、考える。

目の前の少年を叱ってあげる大人が居ないなら、自分が叱ってやれば良い。

「坊主……少しばかり痛い目にあって貰うぞ！！」

だが……そんな思いが必ず相手に伝わるとは限らず…。

「やっぱり、大人は自分の思い道理にならなきゃ……力ずくか」

少年は暗い暗い炎を胸に……。

「キミに出来るのかなぁ～？
さっ、始めようかー！」

想いはすれ違いながら戦いは始まる。

クリフ　視点

驚きのあまり足を止めていた。

――Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｓｗｏｒｄ――

こんな事は……私は…いや、私達の何れもこんな事態を予測して等いなかった。

――Steel is my body, and fire is my blood.――

我等無銘は、衛宮　士郎と言う存在を……侮っていたのだろうか？

――I have created over a thousand blades――

いや、しかし……この世界の衛宮　士郎は、最近まで、カリバーンしか投影出来なかった未熟者だった。

――Unware of loss, Nor aware of gain――

我等の王が衛宮　士郎に敗れた世界では、確かにコレを発動させてはいたが……アレは、我等の王の経験が……衛宮　士郎に流れ込んでいた為だ。

――Withstood pain to create weapons――

ならば、この衛宮　士郎はどうやってコレを知った？

――waiting for ones arrival――

「何を驚く？
ここにあるのは全てが贋作、取るに足りない偽物だ」

――I have no regrets, this is th

ｅ ｏｎｌｙ ｐａｔｈ――

まさか、投影の工程があまかったのも、僅かばかり投影の速度が遅かったのもコレを展開する為の布石だったとは……。

――Ｍｙ ｗｈｏｌｅ ｌｉｆｅ ｗａｓ ”Ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ ｂｌａｄｅ ｗｏｒｋｓ”――

「まさか……ここにきて、固有結界とは…な」

私達の世界が私達に牙を向いて来た。

戦闘開始（後書き）

と言う訳で、黒い人さんから頂いたカンダタを登場させました！

……黒い人さんが想い描いた様なキャラになったか心配ですが。

で、相も変わらずクリフはピンチに陥りましたね。

詠唱の英語は、ＵＢＷの士郎の物です。

この詠唱、ゲームだと日本語て言い出すし、映画だと、そもそも詠唱すらしなかったんだよな……。

アーチャーの詠唱より好きな内容だったので、是非聞きたかったんだよな……。

知らない人の為にコレを日本語にした時の文章を下に書いときます。

では、次回！

体は剣で出来ている

血潮は鉄で　心は硝子

幾たびの戦場を越えて不敗

ただの一度の敗走もなく、ただの一度の勝利もなし
担い手はここに独り剣の丘で鉄を鍛つ
ならば、我が生涯に意味は不要ず
その体は、無限の剣で出来ていた

道［ストリート］（前書き）

偽道です。

今回は……暗い話になります。

と言うか、滅茶苦茶暗いです。

まあ、基本自分の作品はシリアスだから仕方ないと言い訳しますが、兎に角暗い。

しかし……第三者視点の方が文章書きやすいな……。

第三期の内容書くときは、メインを第三者視点にして、サブを誰々視点にしよう。

では、どうぞ。

道［ストリート］

アースラの魔導師はけして弱くはない。

一人一人が一応、魔導師ランクＡ以上と言うスペシャルチームである。

特に、今回の時の庭園の制圧チームに選抜された五人に至ってはチームで連携すれば、ある程度格上の魔導師相手でも戦えるだろう。

だからこそ、彼らはクロノに信用されこの場に任された。

「お仕事っお仕事っ楽しいな～と♪」

「がぁっ！？」

しかし、そんな彼等は今一人の魔導師に追い詰められていた。

連携を取ろうとすれば召喚蟲に邪魔をされ、元来召喚魔法の使い手はフルバックのポジションであると言う常識を軽く無視した様な格闘技能を持つ少年に。

「まったく。田中が僕ちゃんの襲撃に反応出来たから、どんな強敵かな～～て思ったんだけど……大した事なかったね♪」

悔しそうに顔を歪めている魔導師達。

既に、この場で立っている者はカンダタとストリートだけだった。

そのストリートとて立つ事がやっとと言った感じで息が荒い。

「大人をなめるなよ……坊主」

それでも、ストリートは諦めぬとばかり杖を構える。
ストリートと言う魔導師が最も得意とする魔法は拘束魔法である。
それも魔力を籠めた力任せの物ではなく、あらゆる情報を複雑に繊細に作り上げられたバインド。

クロノのバインドにも見劣りしない物を彼は作り出せる。

故に、ストリートが狙うのはカンダタを其処らに仕掛けたバインドに誘導する事。

「レインショット！」

「おっと！
うん、田中以外は面白くなかったけど……。
田中事態は別格だねえ～」

雨の様に降り注ぐ魔力弾をカンダタは避ける。
一方、ストリートも魔力弾を撃ちながらも蜘蛛に注意しながら戦う。
この蜘蛛は何故か魔法が効きにくい。
打撃にも強いのか幾ら蹴り飛ばしても死がないし、牙に麻痺性の毒があるのか体も少し重い。

「あはは～。この魔法は命中精度と威力を度外視した連射のみに特化した物かな～♪
と言う事は、もしかして僕ちゃんを罠にでも嵌めようとしてる？」

「さあな……だがな坊主！」

カンダタがとうとうストリートの狙いに嵌まる。
カンダタの体に深緑のバインドが絡み付き、体の自由を奪う。

「成る程ねー、バインドか。
しかも、相当複雑だね」

「そうだぜ……坊主。
俺みたいな凡人でも、なんとか辿り着いた極致だ。
執務官じゃねえけどな……必要な時に、必要な量の、必要な魔力を。
これが出来れば少ない魔力でもこんなバインドが作れるんだぜ」

ストリートは杖に魔力を籠める。

「さて……次元犯罪者としてお前を逮捕する」

戦いはストリートの勝利宣言で終えた。

ハズだった。

「くっくっく、懐かしい声が聞こえると思えば……まさか、またキミに出逢えるとはな…」

ズブリ　と音がなる。

ストリートには、何がおきたのかは分からない。
「遅いじゃないか～壊れた剣士さん。
もう少しで僕ちゃんやられる所だったよ♪」
「なに、流石にここに来るまでに骨が折れてな。
…ああ、クロノ・ハラオウンは殺せたかね？」
「残念だけど失敗したよ。
どうする？もっかいチャレンジする？
僕ちゃんはそれでも構わないよ～♪」
ストリートは必死に自分の腹に刺さっている物を見る。
それは、赤黒い細身の片刃の刀身。
明らかに、質量兵器だと思われる物。
「くっくっく、構わないだろう。
やはり、クロノ・ハラオウンを殺すのは、この天夢　龍二でなければならない。
それに目的の半分は終えた。
母を喪い、父も喪えば……この世界のロウファも絶望するだろう」
息子の名前が出た瞬間、ストリートの手に力が戻る。
（テ……メエ…殺…らせ……るかよ！）
「ほう…まだ動くのか？
くっくっく、流石はロウファの父親だな」

ストリートの杖から、深緑の砲撃が放たれる。
ゼロ距離で、しかも殺傷設定の砲撃が。
総合Aランク魔導師の命をとした最後の砲撃。
本来なら、そう簡単には防ぎようのない程の魔力の暴力。
だが…
「くっくっく、やはりその程度か。
やはり、数ある世界で私を倒しうる可能性を持つ者は……彼等だけのようだな」
龍二は傷1つ負ってはいなかった。
「では……私の為に消えてくれないか？」
龍二の手に握られていたのは黒くて丸い宝石のような物。
「命短いキミに良いことを教えよう。
これは……メテオのマテリア。
私が、今まで世界を破壊するさいに扱ってきた魔法だよ。
クロノ・ハラオウンを殺し、ユーノ・スクライアを殺し、ロウファ・ストリート……いや、ロウファ・ハラオウンの生かしたまま、世界の終焉を見せ付けるのに最高の物！！
キミに……その力の一端を見せてやろう」
ストリートには最早何も出来ない。
出来る事は……自分のデバイスに目の前の男の言葉を出来るだけ記録する事だけ。

「ねえ、田中はなかなか強かったから、僕ちゃんフルネームしりたいんだけど……教えてくれない♪」

龍二の後ろでヘラヘラと笑みを浮かべた少年を見る。

（結局……叱っ…て……やれな…かったな）

だが、自分の名に興味を持ったと言うのなら、それはそれなりに良いことかも知れない。

少なくとも、それは、他人とコミュニケーションを取ろうとしている事だ。

だから…

「ライ……ザス…スト……リート」

「ライザス・ストリートね。

一応、記録しておくよ♪」

そうか……と頷く。

目の前には、まるで隕石の様な物がゆっくりと近づいて来ている。

ストリートは最後の力を振り絞り、自身のデバイスを力の限り遠くに投げ飛ばす。

後はアレが原形が残る事を願い執務官が回収してくれる事を願うだけだ。

（……父さん、約束……破っちまったな）

ライザス・ストリート　享年３５歳

道［ストリート］（後書き）

皆さん予測はしていたと思いますが……ストリートはここで役目を終えました。

生きて欲しいと望んでいた皆さんごめんなさい。

では、また次回。

遠い背中［エミヤ］（前書き）

偽道です。

今回の話は自分らしくない展開だな……。

ついでに、今回クリフが言う言葉は自分のエゴです。

これが正しいなんて言うつもりはありません。

それと……士郎っぽくないな……台詞が。

第三期を書くときは、士郎をちゃんと士郎っぽく書くので許してください m（__）m

では、どうぞ…

遠い背中［エミヤ］

憧れたのは……あの笑顔。

失ったのは……かつての自分［記憶］

今思えば、俺は……誰かを救いたいのではなく、自分もあんな笑顔が出来たらと思ったのかもしれない。

でも……

憧れた背中はまだまだ遠く、世界と契約した今も手が届かない。

それでも……俺は…

紅い荒野を駆け抜ける。
私達の敵は私達の世界。
古今東西あらゆる武具の贋作。
それが、雨のように降り注いで来るのだから堪ったものではない。

「B2U！」

中りそうになった剣をラウンドシールドで反らす。
アレが、受けきれる物ではない事は百も承知している。

だが、そのアクションにより、Ｂ２Ｕの片割れが砕ける。
いや、ここまで持ってくれた事を労うべきだろう。
中身が空っぽとは言え宝具を何度も弾き、その後は中身すら完璧な宝具を弾き続けた。
その数は、既に５０を越える。
ただの機械であるＢ２Ｕには本来重すぎる役目だった。
壊れた剣を待機モードにし、もう片方の剣を起動させる。
この剣が砕けた瞬間、私達は敗北する。
走る、走る、走る
もう、何れ程走った事か？
幾らなんでも、この衛宮　士郎の魔力量は有り得ない。
何時まで固有結界を維持し続けるつもりだ？
いったい、何れ程の魔力があると言うのだ？
突然、剣の雨が止む。
世界が消えていない事から、魔力がなくなった訳では無さそうだ。
では……いったい…
「クリフ、これは逃れられるか？」
衛宮　士郎の不敵な言葉と共にこの世界にあるすべての剣が浮かぶ。
不味い。
妨害するにも距離がありすぎる。
剣があれば、回避する事は出来るだろう…。

だが、Ｂ２Ｕではアレを弾いている内に砕けるのは必須。
最早……諦めるしかないのかという考えが頭を支配する。
だから、その剣が目に入ったのは偶然だった。
本来、衛宮　士郎の心象風景にある筈のない剣。
私達から、俺が前に出る。
当然だ。
あの剣は、俺にとって……

「行け！！」

剣が迫る中、唯一この世界で自分に敵対せずにその場に鎮座する剣に走り寄る。
多分、これは自分の心象風景から零れ落ちた物。
この世界で唯一、俺に味方する剣。

「さあ……行こう」

自分の心象風景で創られた剣。
宝具と呼ぶには役不足。
だが、礼装の領域からは逸脱している。
魔術回路がなければこの剣を扱えきれはしまい。
それに、おそらく……俺は、この剣の制作者であって担い手にはなれない。
それでも……

「この剣は……」

一閃

無数に迫る宝具を叩き落とす。
弾くのではなく叩き落とす。

「折れはしない！！」

弾き、防ぎ、叩き落とす。

それでも剣は折れない。
いや、この剣が折れる事など有り得ない。
この剣は俺の心象風景で俺が描き続けた理想が形になった物。

今なら分かる。

これは、俺が俺を失った時に生まれた物だ。
正義の味方に憧れて、あの人の様になると定めた。
その時に……この剣が生まれた。
ならば、この剣には相応しい銘がある。

それは…

「辿り着けぬ憧れ［エミヤ］」

一閃

宝具を叩き落とし衛宮　士郎に走り寄る。

衛宮　士郎も足下にある剣を引き抜いた。

……彼女の剣。

「だがっ！」

鉄の音が響く。

黄金の剣と錆びた剣がぶつかる。

でも……剣は折れない！

「貴様は！

何をしようとしている……衛宮　士郎！！」

「俺は！ただ、フェイトを、フェイトの家族を守りたいんだ！！」

「それが……何故こんな事になる！！

キミは……ここが今、どの様な事になっているか分かっているのか！？

このままでは、この周辺にある世界は次元の狭間に引き摺られてしまう！！」

衛宮　士郎の顔に困惑の色が写る。

「そんな事……ユウは…」

「口を開けばユウ、ユウ、ユウ！！

私達の王はその様な存在ではない筈だ！！

考えろ！

あんたの頭でだ！
私の……俺が憧れた衛宮　士郎はこんな奴じゃない！！」
俺は……ああ…そうだ…俺が衛宮　士郎を気に食わなかったのは…。
「なんで……なんであんたが操られてるんだよ！！」
「なっ……にを？」
憧れたんだ。
「あんたの笑顔に憧れた！」
助けてくれた時の笑顔が……あまりにも眩しかったから…。
「あんたの在り方に憧れた！！」
それが……すべてだった。
「俺は……きっと、正義の味方に憧れたんじゃない！
俺が……本当に憧れたのは……あんたなのに！！」
敗けられない……何かの為ではなく…俺の為に。
「だけど……それでも、アリシアが蘇らないとフェイトもプレシアさんも！！」
「……あんたは、死者を蘇らせるのに……賛同してるのか？」

止めてくれ……あんたがそんな事を望むなんて…。
「そうだ、俺はアリシアを蘇らせたい！
そして……あの大火災で亡くなった人達も…」
「ふざけるな！」
剣がぶつかる。
まるで、己の信念を競い合う様に。
「死者は蘇らない！
過去は変えられない！！
どんなに辛い過去だとしても……それは…許されない！！」
「だったら……あの人達はどうなるんだ！！」
鉄の音が響く。
「助けてくれって言ってるんだ……。
救ってくれって言ってたんだ！！
だから、俺はあの日をなかった事に…」
「それじゃあ、あの大火災があったから出来た決意はどうなる！
あの大火災があったから出逢えた人との縁は何処に行く！！
俺は……俺は後悔なんかしないぞ！！」
義母さんに引き取って貰えた時の嬉しさも、義兄さんに家族と認めて貰えなかった時の悲しみも、受け入れて貰えたあの時も……。
「すべてをなかった事にするなんて……間違ってる！！」

また、剣がぶつかる。
衛宮　士郎の剣が……軽い。
まるで、重さが感じられない。

「じゃあ、死んでしまった人には諦めろと言うのか！
助けられないと言えばいいのか！！」

「理不尽な死は何時だって側にある！
確かに、あの大火災は……俺の巻き込まれた災害は悪夢だ……。
でも、俺達だけじゃない！

例えば、交通事故。
例えば、自然災害。
例えば、殺人。

命が宿ったのに、望まれない子供だからだと卸される人もいる！
誰もが、誰かを失い、悲しみ……そして、その人達を忘れずに前に歩んでいく！！
誰も……人の死に特別なんかはない！！」

「それはお前のエゴだ！
誰もがお前みたいに強くはなれない！！
死者を蘇らせる力があるなら……それに手を伸ばす！！」

「そうやって、簡単に命を蘇らせるのは……歪なんだよ！！
生き物の命は重い！
どんな命でもだ！！
簡単に……殺したり、蘇らせたり……命を軽くするような事は許されない！！

ああ、そうだ。
認めてやるよ衛宮　士郎！！
これは、俺の……私達のエゴだ！！
それでも……私は、俺が正義の味方を貫き通すには……今のあんたは認められない！！」

剣激が響く。
彼女の剣に歪な形に歪む中、俺の剣は傷を負いながら尚も折れない。

「それでも……それでも！！」

「俺は……あんたの願いを…壊す！！」

最後とばかり剣を打ち付ける。

彼女の剣は崩れ、彼は倒れる。

「……クリフ、俺は……間違ってるのか？」

「知るか。そんなの……自分で決めてくれ」

そして、戦いは終え世界は元に戻る。
不思議な事に錆びた剣だけは手の中に残っていた。

ならば、自分にはまだ役目があるのだろう。

「クリフくん！」

声が聞こえた方に視線を向ける。
そこには、なのはとアルフ……そして、アルフに背負われているフ

エイト・テスタロッサの姿があった。

「……高町　なのは、衛宮　士郎も連れて行け。
私には、まだやるべき事がある」

「やるべき事って……あんた、ぼろぼろじゃないかい！！
一旦、アースラに…」

「くっ、心配は要らんよ。
まだ、私は戦える。
……それよりも、このデバイスをこの未熟者が目を覚ましたら渡してはくれないか？」

B2Uをアルフに手渡す。
アルフは困惑した表情を浮かべているが……構っている暇はない。

「クリフ、あんた一体なにを！！」

「衛宮　士郎の魔術はこの世界では危険すぎる。
フェイト・テスタロッサを真に守りたいのなら、そのデバイスを使えと言っておけ。
……高町　なのは！」

「えっ……はっはい！」

「……義兄さんを……頼む」

「えっ？」

さあ、仕上げを始めよう。

あの強大な力を持つ転生者を倒す為の……最後の仕上げを…。

遠い背中［エミヤ］（後書き）

クリフ、主人公っぽい事する……と言うか初めてな気がする。

今回、クリフは自分のデバイス……Ｂ２Ｕを士郎に渡した為、今後は錆びた剣［エミヤ］のみで戦います。

……戦闘に参加すればの話ですが。

次は、なのは＆アルフＶＳフェイトを書こうと思います。

では、また次回！

少女達の戦い（前書き）

偽道です。

物凄い短いです。

後、久々にアンチのアンチを書きました。

……お話と言いながら肉体言語と言われるなのはさんですが…いや、これは認めますけどね。

まあ、読んで頂ければ分かる……と思いたい。

では、どうぞ。

少女達の戦い

天井が見えぬ螺旋階段のあるフロアで、二人の少女が戦っていた。

「アクセルシューター！」

「プラズマランサー！」

桜と金の魔力光が輝く。

何も知らない人間がコレを見たら、その美しさに息する事すら忘れる事だろう。

だが……ここで起きている戦いは、そんな生易しい物ではない。

金の魔力光を放つ黒い少女、フェイト・テスタロッサのデバイスは今、殺傷設定になっている。

「フェイト！今あんたが使った魔法……殺傷設定じゃないか！！そんなのが当たったらなのはは……」

「当然だよ……アルフ。私は……母さんやユウを守る為なら…私は…殺す覚悟だってあるよ！！」

「フェイトちゃん、そんなの……違うよ。誰かを殺すなんて……簡単に言っちゃダメだよ！！」

飛翔

なのははフェイトから距離を取ろうと飛ぶ。
なのはにとって、このフィールドはかなり不利な物である。
狭い為、砲撃魔導師がこんな場所で自由な戦いが出来る筈がない。
それでも、尚も少女は戦う。
理由は多くある訳ではない。
ただ……強いて言えば…なのはは、フェイトと友達に為りたいだけなのである。
言葉を伝えたい。
誰かと縁を結ぶ優しさと暖かさを伝えたい。
……ただ、それだけの想い。
だけど、とても強い想い。
その為だけに戦える不屈の心を持つ少女。
それが、高町　なのはなのだろう。
ある人は、この姿を愚かと笑う。
ある人は、他人を殺す覚悟もない存在と笑う。
果たして……本当にこの姿は愚かなのだろうか？

誰かと話そうとする姿が何故愚かなのか？

命を重い物として、全ての人間に手を伸ばすのが何故、愚かなのか？

ならば、愚かと笑う人間は何れ程高尚な覚悟があるのか？

殺す覚悟と言う存在がいる。

確かに、殺す覚悟は重い覚悟かもしれない。

しかし、生かす覚悟は殺す覚悟より難しく重い。

ましてや、よく転生者が殺す覚悟と言うが……あんな物は殺す覚悟などではない。

自分は不死身と言う完全な安全領域にいて、他人を圧倒的な力で捩じ伏せる。

しかも、お前達は悪で自分が正義と言い切り、他人の言い分も、想いも背負おうとすらしない。

それは……ただの虐殺だ。

ただの虐殺者に過ぎない。

そんな存在が、何故彼女を笑えよう？

「アークセイバー！」

「うっ！」

金色の刃がなのはに迫る。

しかし、その刃はなのはには届かない。

「アルフ……何で？」

「目を覚ましてよ……フェイト。
今のフェイトは……あたしの好きだった優しいフェイトなんかじゃないよ！！」

アルフがフェイトの攻撃を抑えた事によって、なのはには魔法を使う時間が出来る。

「アルフさん、すみません。
もう少しだけ……時間を稼いでください」

「……何をしようとしているのか分からないけど……分かったよ！」

なのはは、周辺に散らばった魔力をかき集める。

魔力の収束。

その発想は最早天才の領域。

「アルフさん！」

「フェイト……ゴメンね…バインド！！」

フェイトはアルフのバインドで手足を固定される。
「イヤだ……私は…母さんとユウを……守るんだ！！」
「…受けてみて、私の全力全開！！」
それは、まるで星々の輝き。
その名は……
「スターライト……ブレイカー！！」
フェイトはシールドを多重に張る。
しかし、それはスターライトブレイカーの前には無意味だった。
フェイトは、その魔力に呑み込まれ……気を失い…墜落する。
それを、アルフは優しく抱き止める。
ここに、高町　なのはの戦いは終結した。

クリフ視点

なのはと別れた後、あるフロアに向かっていた。

それは、時の庭園の駆動炉。

私達には、ユウを倒す秘策はある……いや、これ以外に策が思い浮かばなかったと言うのが正しい。

洗脳などが出来る人間を、ここで逮捕できてもいずれは、誰かを操やつり脱走するのは目に見えている。

しかも、アルフの話を聞くと、ユウと言う魔導師は、どんなカラクリかは知らぬが、不死身の肉体を持っているらしい。

つまり、殺すという手段すら選べない。

だが、それ以外なら……。

「ユウ、私と共に永遠の旅路について貰うぞ」

正義の味方に為れたかな？（前書き）

偽道です。

ごめんなさい！

いや……先に謝っときます。

この展開と言うか結末は、最初から決めていた事です。

……ｆａｔｅのＨＦを知ってますか？

知っていて、ＨＦのノーマルエンドが気に食わなかった人は読まない方が懸命です。

読まないで、次に投稿するエピローグも飛ばして、第三期入った頃から読む事を勧めます！！

では……

正義の味方に為れたかな？

最後の扉は開かれた。

そこに立つ者は、神に産み落とされた少年。

確かに、神は人など足下にも及ばない程の力があるだろう……。

しかし

どんな物語でも、化け物と神を殺すのは、何時だって人である。

「次元犯罪者、プレシア・テスタロッサ、ユウ。

キミ達を逮捕する」

大きなフロアに、クロノの声が響く。

ここにいる人は5人。

クロノ、ユーノ、ランサー、プレシア……そして、ユウ。

それぞれがそれぞれの武器を構えて対峙する。

「テメェー等、よくもフェイトと士郎をやりやがったな！」

「よく言うぜ、人の心を操った奴の言う事だとは思えねぇーな！！」
「キミに、彼等を心配する資格なんてないよ。
人を操ったキミに、そんな資格がある筈がない！！」
それぞれが、ユウに対して敵意を剥き出しにする。
「ウルセェ！管理局なんて腐った組織の人間につべこべ言われたくねぇーんだよ！！
テメェ等は、いつも管理外世界にまで口出ししやがって！！
押し付けがましいんだよ、テメェ等の正義は！！」
「……キミに言っても理解出来るか分からないが……。
何も、管理局は無闇に管理外世界には手を出さないさ。
ボク達が管理外世界に来る時は、余りにも危険すぎるロストロギアが存在する時と、危険な次元犯罪者が逃げ込んだ時だ。
それとも、キミは管理外世界だから、世界の滅亡に繋がる様な危険な物を発見しても、危険な犯罪者が、その世界で暴れまわっていても無視しろと、見逃せと言うのかい？」
クロノの少し考えれば、別に知識が無くとも誰でも分かる常識的な言葉にユウは口を閉ざす。
「確かに、その世界がボク達の常識では測れない力を持つ存在が居て、その存在がいれば事件はボク達が介入せずとも終える事が出来るケースもあるだろう。
だが、それは極めて珍しい物だ。
そんな、低確率の可能性に委ねる様な賭けなんかの為に、誰かが悲しむのは……ボクには容認できない！！」

「それにさ、キミは管理局を腐った組織とか、信用出来ないと何時も言うけど……何で、どう言う理由で信用出来ないんだ？」

ユーノの質問にユウは言葉を詰まらせる。

「……管理外世界に我が物顔で来て自分達の法律を振り回したり、警告なしでいきなり攻撃……」

「小僧、その言い訳には無理があるぜ。
管理局については、クロ助が言った通りだろうさ。
それに、先に手を出したのはテメェだろ？
その事を忘れんじゃねえよ」

「たっ他にも、管理局は裏で犯罪者と繋がってたり、違法な実験を！！」

「だったら、その裏で犯罪者と繋がっている局員の名と、違法な実験を行っている座標を教えてくれないか？
ボクが、例えそれがボクの上司や提督だったとしても逮捕してみせる」

それで終わりだった。
だが、別にこれ等の事は少し考えれば分かる事。
確かに、管理局は表面上だけ見れば管理外世界に無遠慮に踏み込む存在に見えるかも知れない。
しかし、彼等はちゃんと管理外世界に踏み込む時には危険物はその世界の住人に手が負えるか、その危険物は何れ程危険なものか等を

観察し、介入の必要性有りと判断する迄は動かない。
そのせいで、ジュエルシードの回収への介入に遅れてしまった訳だが……。
だが、けして無遠慮に、自分勝手に介入している訳ではない。
「キミと話していても無意味だな。
プレシア・テスタロッサ。
キミは何故彼に協力している？
目的はなんだ！？」
「少し違うわね。
私が彼に協力しているのでは無くて、私が彼に協力して貰っているのよ……アリシアを蘇らせる為に！！」
死者の蘇生。
それが、プレシアの望みは死んで……いや、殺してしまった娘との再開だった。
その願いは、誰も否定は出来ない。
だが…
「プレシア、キミは今、ここがどんな状況か理解しているのか？
ジュエルシードの特性のせいだと思われるが、このまま行けば、周りの世界は次元震に呑み込まれてしまうんだぞ！！」
「アリシアの居ない世界がどうなろうと私には関係ないわ。

私は、どんな犠牲を出そうと、アリシアを蘇らせる！
こんな筈じゃなかった世界から解放される！！」
その言葉は、この世界に守りたい存在がいるクロノ達と対立させるには充分な言葉だった。
「世界は、何時だってこんな筈じゃなかった事ばっかりだよ！」
「んな事分かりきってんだよＫＹ野郎！！」
クロノの言葉にユウが叫ぶ。
「……クロノの言ってる意味を理解しているなら、死者の蘇生なんてしないと思うよ……僕は」
「つーかよ、ＫＹてのは、空気読めねぇを略した言葉だったか？
そりゃ、テメェの事だろ！」
ランサーは、ユウの言葉に辛辣な言葉を浴びせながら踏み込む。
ランサーの狙いは、ユウの心臓。
しかし、その一撃は避けられる。
ユウは、無防備になったランサーに一撃を入れようとするが…。
「スナイプショット！」
いつの間にか撃たれていた、クロノの魔法弾に阻まれる。

ランサーは、この事を知っていた様で口許をニヤリと吊り上げる。
ランサーには、あらゆる戦いの経験がある。
当然だ、クーフーリンの生涯は、戦いに生き、戦いに散ったのだから。
クロノにしても、人生の半分以上も訓練に捧げてきた。
確かに、ランサー程経験豊かではないが、その努力は計り知れない。
そんなランサーとクロノ組んだら、たかが魔力が高いだけ、たかが、サーヴァント並に動けるだけで驕っているユウが勝てる筈がない。
プレシアは、その光景に焦り、紫電をクロノに向かって放つ。
クロノは、その魔法を視界に一瞬納めると、すぐにユウに向き直る。
回避行動すらせずに。
紫電は、少しずつクロノに迫り……何かに防がれる。
「やらせや……しない！」
プレシアの魔法を防いだのは、ユーノだった。
プレシアはそのシールドを破壊しようと、何度も魔法を放つが、ユーノは苦しい表情はするものの、プレシアの魔法を1つたりともクロノの元には届かせなかった。
クロノも、一切、プレシアの方には警戒していない。

彼は、ユーノを信用し、背中を完全にユーノに預けていた。
故に、クロノが集中すべき事は、ランサーの援護。
ランサー1人では、ユウには勝てない。
だからこそ、クロノはランサーの援護に専念する。
「何でだよ！
俺はチートの筈だろ！！
何でこんな奴等に手間取ってんだよ！！」
「……なんかよ、テメェ勘違いしてねえか？
どんなに強大な力でも、使いこなせなきゃ意味がねえーんだよ！！」
ランサーの槍がユウの腕を貫く。
痛みに馴れていないユウは、それにより一瞬の隙を作り出してしまった。
確かにそれはコンマ数秒にしか満たない隙。
しかし、クロノにとってはその隙は充分なものだった。
「なっ！？バインド！
でも、こんなバインドくらい！！」
「無駄だよ。そのバインドは、かなり気合いを込めて作った物だ。
いくらキミのバカ魔力でも、そのバインドの構築プログラムを読み取るのには時間が掛かるだろう」

クロノがユーノの方に視線を向けると、ユーノもプレシアとの戦いを終えていたらしく、血を吐いているプレシアに回復魔法を掛けている最中だった。

「認めねぇ……ざけんな…。
何で俺がお前等程度に負けなきゃなんねぇーんだよ！！」

「……キミは、何でそこまでボク達を見下すんだ？
前から疑問には思ってたんだが……」

「うるせえ！！
もういい！もうハーレムとかアンチとかどうでもいい！！
ぶっ壊してやる！
全部、何もかも！！
こんな作り物の世界、俺が本気を出せば……負けるはずねぇーーんだぁぁぁぁぁ！！」

瞬間、ユウの魔力が増幅される。

ユウは、今までクロノ達をあまく見ていた。

故に、本気を出さずとも余裕で倒せると言う盛大な勘違いをしていた。

だが、その勘違いもここで終わる。

ユウの魔力にユーノも、クロノも、ランサーも、味方であるプレシアでさえ後ずさる。

勝てない……と、彼等の本能が告げる。

目の前の化け物にはけして勝てないと……。

「そうだ……さっさと本気を出しときゃ良かったんだ……コレで…俺の勝ちだぁぁぁぁぁぁぁあぁぁあ」

ユウの言葉は正しくそうだろう。

ただ……

「ああ、だが後少しばかり早ければな」

言葉が響くと同時に、ユウの下半身と上半身が2つに分かれる。

そして、上半身を錆びた剣が逃さぬとばかり地面に縫い付け、錆びた剣が抜けぬ様に片腕の魔導師が、体重を掛けた。

クリフ　視点

「……フム、どうやら美味しい所を持っていってしまったようだな」

皆の状態を見ると、さほどダメージは負っている様には見えないが、私の登場に少しばかり呆然としている様で、ランサーに到っては不機嫌まる出しの表情をしていた。

「チッ、どうせ助けに来るなら、もちっと早く来やがれ」

「無茶を言うなランサー。
キミには伝えたはずだぞ。
この男を倒す最後の手段を」

手の中には数個のジュエルシード。
これから、自分が行う事には、絶対に必要な物だ。

「テメェ……オリキャラ野郎！
不意討ちなんて男のやる事じゃねえぞ！！」

奴が喚きながら剣を折ろうと拳を叩き付けているが……無駄だ。
この剣は、折れない事だけに特化された物。デュランダルやアロンダイトには劣るやもしれんが、簡単には折れしない。

「さて、最後の仕上げをするかね」

ジュエルシードに魔力を叩き付ける。
ランサー以外は、突然の私の暴挙に驚きの表情を浮かべた。

「クリフ！
キミは何をやっているのか分かっているのか！！」

「分かっているさ。

私は、ジュエルシードを暴走させ、次元震を作り出そうとしている」
「なっ、クリフ、キミは何をしようとしているんだ！！
そんな事をすれば周辺の世界は…」
「問題はない。
時の庭園の駆動炉で、ディストーションフィールドを発動させてきた。
被害は、この時の庭園のみだろう」
淡々と述べる事実に、義兄さんとユーノの顔が青く為っていく。
「……まさか、お前」
「そうだよ……私は、この男を道連れに虚数空間に落ちよう」
それが、私達が思い付いた最善の手段だった。
「ふざけるなよ……クリフ！
キミは何を言っているのか分かっているのか！！
キミがいなくなれば、何れ程の人が悲しむと思っているだ！！」
「では、これ以外に手段があるのかね？
この男を捕らえても、誰かを操り、牢から脱走するのは目に見えている。
殺そうとしても……見ての通り、不死身の肉体があるようでな。
殺す事すら出来ん。
なら、魔力行使を一切受け付けぬ虚数空間にこの男をを突き落とすのが、最も有効な手段だと思わないかね？」

「お前まで、ついて行く必要はないだろう！！」
義兄さんが必死に叫んでいる。
自分を思いとどませる為に。

「いや、実際この男がどの様な力を持つかは分からない。
虚数空間ですら何かをし出すやもしれん。
故に、虚数空間の穴が閉じる迄、この男を監視する存在が必要なのでね。
それに、私はもう……長くない」
英霊達との記憶の共有。
それは、本来、人の身では堪えられない物。
故に、どちらにしても私はそう長くは生きる事は出来ない。

「だが…！」

「ランサー」

ランサーに視線を向けると、アイツは舌打ちをしながら義兄さんとユーノの首筋に手刀を打ち込み気絶させ、二人を肩に担ぎ、プレシアとアリシアの死体を両脇に抱た。

「俺は今回のお前の決断は気に食わねぇ。
だがな、テメェの決意を汚すような真似もしねぇーよ」

「……そうか。
義兄さんを頼む。

その人は、強い様で弱い所があるからな…」

「……じゃあな。結構楽しかったぜ」

ランサーの背中を見送る。

アイツの脚なら、この崩れ行く庭園から逃げ延びる事は可能だろう。

「離しやがれ！

何でだよ！前世では、産まれながらに病気持ちで、親父もお袋も事故で死んで！！

俺は……俺はただ、幸せに為りたかったダケなのに！！」

「……他人を操り、自分の我が儘や考えだけを相手に押し付ける事がキミの言う幸せか？

自分の思い通りにならなければ、他人を切り捨てるのがキミの幸せか？

だったら悪いが、俺はキミをこの先誰とも会えぬ永遠の孤独に落とす事に罪悪感など持てない」

「うるせえ！！

たかが、偽物の命の癖に！！」

「……殺しはいけない事だと思ってるし、殺した人間の想いは背負って行こうとも思っている……でも、キミの想いなど背負いたくもないな」

溜め息が出た。

まあ……でも…

「士郎さん……俺、正義の味方に為れたかな？」

クリフ・ハラオウン　享年　１３歳

正義の味方に為れたかな？（後書き）

ハッピーエンドとは程遠いですね。

ごめんなさい。

次回はクリフ編エピローグです。

……では

エピローグ　クリフ編（前書き）

偽道です。

クリフを少しだけだけど救済しました。

あと、今回は瞬さんと池上さんのオリキャラが少しだけ出てきます。

では、どうぞ…

エピローグ　クリフ編

少年は錆びた剣を引き抜いた。

そして、少年は自らを捧げる変わりに１つの奇跡を与えられる。

少年の願った奇跡。

それは……

ある料理店のあるテーブル。

そのテーブルに置かれている空の皿。

その数は、最早尋常ではない程に積み上げられている。

「なぁ……レオン…。
まだ食うのか？」

「ふぉうへぇんはぁふぉふぉふぅふぁ［役・当然だよロウファ］。
ふぁふぁ、ふぁらぁはぁふぃふぅんふぇふぁはぁふぃふぉ［役・まだ、腹八分ん目じゃないよ］」

「……お前とは、腐れ縁だけど、未だにその腹の仕組みがわかんな

いな…」

ロウファは財布を逆さにしながら溜め息を着く。

「……なあ、エリオ。
お前はもう……お代わり…」

「えっと……はい、大丈夫です！」

エリオの顔にはまだ食べ足りないと確り書かれていた。

「……ＡＴＭ探して来る。
クルタナ、検索」

深い深い溜め息をつきながらロウファは立ち上がった。

何故こうなった？

と言えば、自分のせいだと答えはスグにでる。

彼の名は、ロウファ・Ｓ・ハラオウン。

そして、明日より、高町　ロウファとなる。

不器用な義父の結婚に喜び浮かれ、よりにもよって飯を奢れば破綻が必須の親友２人に奢る発言した少年である。

クルタナのナビを頼りにロウファは街を歩く。
彼のいる場所は、第９７管理外世界、地球。
そして、その地球の日本と言う国の海鳴市。
ロウファの父と母が命を賭けて救った世界だ。
この世界にいるのは、ロウファにとっては少し複雑な気分である。
ここは、明日より母となる人と父さんの出逢った世界。
色々な苦難があり、悲しみがあり、喜びや笑顔があったらしい。
確かに、ロウファから見ても、ここの人達は優しくて、命を賭けて守る価値はあると思う。
それでも……
「遊園地……楽しみにしてたんだ…」
帰ってきて欲しかった。
無事に帰ってきて欲しかった。
そして、何時もの様に父の武勇伝に目を輝かせ、話が行き過ぎると困った顔をした母さんがフライパンで父の頭を殴る。
……7年前に失われた生活。

クロノさんに対して不満がある訳じゃない。
過去を変えるすべがあっても、ロウファはそれを扱わないだろう。
父と母を失った。
でも、その歴史の先に義父との生活があり、レオンとエリオとの出逢いがあった。
なら、きっとやり直しを望むのは贅沢で、自分勝手なのだろう。
それが、ロウファの考えだった。

奇妙な男が公園で溜め息を付きながら立っていた。
髪はショートカットで、片眼鏡をつけている。
何より、目立つのは猫背である事。
「まったく……彼はまた何処かに行ったのかな……。
はぁ…監視役の私の身にもなって欲しいな……」
男の名は……既に忘却の彼方なのだろう。

強いて言えば、彼の名は監視者［サーチャー］。
彼の役目は、世界に害をなすであろう存在の監視と、今回は、ある男の行動の監視。
……とは言え、見失っている様だが。
「でも、霊長の守護者になる契約が……こんな物とはね…。いや、彼にとっては最高の奇跡［我が儘］なのかもな…」
サーチャーは歩き出す。
監視対象の現在の居場所を探しに。

「はぁ……」
青年は溜め息をする。
いや、彼は明日結婚する2人の事を祝福している。
彼の想い人、高町　なのはにも告白して、フラれ、ちゃんと泣いてさっぱり気持ちには整理をつけている。
彼が溜め息をついている理由は……。

「ユーノ、お前は何時になったらフェイトに告白するんだ？」
「そうだぞ、俺もユーノにならフェイトを任せても大丈夫だと安心してるんだ」
この、シスコン2人の精神攻撃のせいである。
うるさい、黙れ、僕達には僕達のペースがあるんだ！！
と怒鳴れないのはユーノの優しい性格ゆえである。
「あのさ……確かこの世界に、人の恋路を～　て言葉があったよね？」
「それなら大丈夫さ。
ボク達はキミの遅すぎる恋を後押ししようとしているだけだ」
クロノの言葉にユーノはまた溜め息をつく。
余計なお世話だ！
と言えないのは、やはり温厚なユーノの性格ゆえだ。
「それとも、ユーノ。
他に好きな人がいるのか？」
士郎がそう言い切ると、突然何故か風景のすべてが青く染まったように3人は錯覚する。
3人は、コレがどの様な時に展開されるか知っている。

ゆっくり、ゆっくりとユーノ達は頭を後ろに向けると、涙をダバダハと流すフェイトの姿があった。

「私は私は……」

「フェ……フェイト…落ち着くんだ。
アレは……ほら、例えだから。
もしかしたらと言う可能性だから！！」

士郎は必死に言葉を探すが、最早遅い。

「私は、ユーノにとっていらない存在なんだぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「待って、フェイト……僕はキミが大好きだぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

ドタバタと騒がしく2人は何処かに消えていく。

ついでに、この状態の時の好き発言はノーカンらしい。

このやり取りは、無限書庫とクラナガンでは名物である。

……海鳴でも名物にならない事を祈りながら、クロノは残っていたお茶に手を伸ばした。

「……甘いわね。
コレは、恋人居ない歴＝年齢のアタシに対する当て付けかしら？」
「アリサちゃん、落ち着いて……」
「なのはちゃん、明日結婚する人生の幸せまっしぐらななのはちゃんが言っても火に油やで」
フェイトとユーノが走り去るのを偶然見掛けた仲良し６人組の内４人は苦笑いしながら話していた。
「でも、なのはちゃんはクロノさんと結婚するだろうな……て思ってたけど、こんなに早いとは思わなかったよ」
「そうやね。
でも、何でクロノくんが婿養子に為ることになったんや？」
「……お母さんに嵌められた…てクロノくんが言ってたよ」
はやては納得した様に頷く。
はやては、桃子に自分と同じ匂いがあると感ずいていた。
ゆえに、あまり驚かない。
「でも、ここまで来るのに大変だったんだよ。
お兄ちゃんがクロノくんに　妹と結婚したければ俺を倒せ　と言い出して、お兄ちゃん、魔導師が相手なのに対等以上に戦って…」

「……嘘やろ」
はやては驚愕した表情を浮かべる。
魔導師と……しかも、クロノと渡り合える剣士…。
「まっ、恭也さんならそうなるかもね」
「義兄さんならそうなると思うな」
しかし、他の2人は寧ろ納得していた。
そんな2人を見て、なのはは頭を抱えた。

ランサーは、妙な気配を感じて海鳴の公園ある高台に来ていた。
風が吹く中、ランサーは自分の勘に感謝する。
「久し振りじゃねえか。
いったい、どんな要件で帰って来たんだ？」
ランサーに声をかけられた人影は、小さく笑みを浮かべる。
「やはり……キミなら気付くと思ったよ…ランサー。
ちょっと酒の相手でもしてくれないか？

サーチャーのヤツとはぐれてしまってね……随分と寂しいとこだったんだ」

ランサーは、永年会えなかった友に再開する様に肩を叩き、地面に座る。

男は、それに苦笑いしながら袋から酒とツマミを取り出し、月を眺める。

「で、今のお前はなんて呼べばいいんだ？」

「明日には消え行く身だったからな……考えてなかった。取り敢えず、アーチャーとでも呼んでくれ」

ランサーはそれに頷く。

この男は生前に、自分が英霊の座に行けば名を失うと言っていた。ならば、彼をその名で呼ぶのは不粋なのだろう。

「みんなはどんな感じだ？」

「テメェが死んだ後は、えらく落ち込んでたな。特に、クロ助がな」

「……そうか」

「だがな、アイツ等は強かったぜ。お前が思ってるよりもだ。確かに、テメェの死をみんな悲しんだ。忘れてもいねぇーよ。

でもな、誰もお前の死に引き摺られなかった。
確りと、前を向いて歩いてたぜ」

「そうか」

アーチャーは嬉しそうに酒を呑む。

「ああ……そうか。なら……良かった」

「……明日は顔を出すのかい？」

「……いや、遠くで眺めるだけさ。
死者は蘇らない。過去は変えられない。
どんな理由があろうと……ね。
だから、本来なら死者である俺は表に出るつもりはないよ」

それだけ言い、アーチャーは夜の闇に消えていった。

「まったくよ、これだから頭の硬い奴は」

頭をガシガシと掻きながらランサーは呟く。

……が、その表情は言葉とは裏腹に何処か嬉しそうにしていた。

祝福の鐘が鳴る…

クロノ・ハラオウンはその鐘が鳴る度に緊張する。
そして、純白のドレスを着たなのはが高町　士郎と共に表れる。
なのはの手は、父からクロノへと移る。
そして、２人は神父の前で永遠を誓い合った。

その風景を、２キロ先のビルでアーチャーは眺めていた。
アーチャーの身体は、魔力が分解されて行き、少しづつ透け初めていた。
「義兄さん……御幸せに」
アーチャーがそう言い終わると、身体は完全に消える。
「俺は……コレからも頑張って行けるから」
何もなくなったビルにはそんな声が響いた。
少年が望んだ奇跡。
それは、少年にとって大切な兄が、この世で一番幸せだと思ってい

る瞬間に立ち合いたい…。

そんな、小さくも大切な奇跡［我が儘］だった。

エピローグ　クリフ編（後書き）

クリフ編終了です。

次は、第三期の内容で書いて行く訳ですが……アンチをアンチする……でなくなるから小説のタイトル変えようかと迷っています。

変える場合は、次に投稿する小説の前書きに変えようと思う名前のタイトルを書きます。

それでは次回

新しい風（前書き）

偽道です。

今回は、ロウファと士郎……そして、第二部の主人公が登場するいわばプロローグです。

……と言っても、第二部は主人公とは言わば形式上みたいな感じで、主人公などいやしない…感じで書いて行くつもりですが。

後、小説のタイトルが未だに思い浮かばないので、また後日と言う事で。

では、どうぞ……

新しい風

新暦００７２年４月

ミッド臨海空港は大規模な火災に見舞われていた。

そんな中、薄い青の長い髪を後ろで一つにまとめている青年は紅い宝石の様な物を手に立っていた。

「博士、レリックってコレでいいの？」

『ああ、ご苦労だったねカンダタ。
後は早く帰っておいで』

青年…カンダタは、炎に包まれて行く空港を平然とした表情で歩く。

まるで、この惨状など関係ないとでも言うように。

「そこの不審者止まれ！」

そんなカンダタに杖を向ける少年がいた。

少年の服装は、一般局員の物であり、教本通りの動きから、基本に忠実で、それなりの実力はありそうだが、実戦経験の少なさが伺える。

「自分は、時空管理局、陸士４５５部隊所属、ロウファ・Ｓ・ハラオウン三等陸士だ！
その危険物を手放してはくれないか？」

「あのさ……今、僕ちゃん、ただでさえ炎に囲まれてテンション下がってるのに……邪魔しないでくれないかな～」

カンダタはヤル気が為さそうに構える。

ロウファも、警告は通らなかったと判断し、警戒しながら杖を構える。

「さてと……めんどくさいから、スグに終わらせるよ…田川」

「なっ！？速い！！」

ロウファは、カンダタの拳をなんとか避ける。

カンダタは、まさか避けられるとは思っていなかった様で、ほんの少しだけだが表情に驚きの色が伺える。

だが…

「でも、まだまだだね♪」

「えっなぁ……バインド！？」

カンダタは、六年前の戦い以来、拘束魔法を自分の格闘技に組み込んでいた。

そして、相手が幾ら格下でも油断はしない。

それが、カンダタの戦闘スタイルになっていた。

「それじゃあね田川♪
僕ちゃんは依頼にない殺しはしない主義だから♪」
カンダタはそれだけ言い、転移魔法を発動させる。
カンダタの消えた先をロウファは睨み付けながらバインドの解析をしていた。
（……このバインド。構築のされかたが複雑だ。
今の僕ではこんな物作り出せない）
運が悪いな……と彼は思う。
訓練校を卒業して、一年ぶりに長い休暇を貰え、なら親友達の下に遊びに行こうと空港に来たら火災発生。
管理局員として見過ごせないと息巻いている時に、ロストロギアを持っている不審者を発見。
逮捕しようと立ち向かえば、ショッ○ーがラ○ダーに殺られる時の様に瞬殺。
まるで良いとこなし、寧ろ格好悪い。
（……衛宮隊長、衛宮隊長、聞こえますか？）
（……ん、ロウファか。
どうしたんだ？
コチラはあらかた救助し終えたけど、人手が足りないのか？）

（先程、不審者を発見しました。その不審者はロストロギアらしき物を所持しており、捕縛しようとしたのですが……逃げられました）

（……はぁ、何をやってるんだよ。
また、一人でどうにかしようとしたんだろ？）

（うっ……すみません）

（始末書、覚悟しとけよ）

六年前に亡くなった父と母の様に、誰かを守れる様に為りたくて入局した管理局。

しかし、道は本当に果てが見えず、父と義父の背中を見る事すらまだ叶わない。

それでも……いつかその背中と肩を並べる事が出来る様に、今はがむしゃらに走るしかないのだろう。

赤い色素が少し抜け落ちた様な髪を持つ成年が炎に包まれた空港を駆ける。

肌の色は褐色で、かなりの長身。

彼は、衛宮　士郎二等陸尉。

彼は、六年前に起きたＰＴ事件の重要参考人の一人で、一時的に牢に入る事には為ったが、管理局に入局する事を条件に仮釈放され、民間に奉仕する事で罪を許された。

ただ、彼の魔術。

投影魔術はあまりにも危険過ぎると判断され、彼の監視者、リンディ・ハラオウン、レティ・ロウラン、レジアス・ゲイツの容認がなければ殆ど使う事は許されない。

その為、彼は六年前に託されたデバイス……Ｂ２Ｕを扱っている。

彼にとって、Ｂ２Ｕは罪の証であり、誓いの証でもある。

自分が殺したと言っても過言ではない自分よりずっと強かった少年。

士郎は、彼に言われた通りこの剣を手に取った。

フェイトの幸せを守る為に。

そして、彼が救う筈だった人々の笑顔を守る為に。

一人の青年が誰もいない高原に倒れていた。

彼の服装は管理局の物であるだろう事は理解できる。
しかし、その制服は何処の物か？
それが、全く分からない。
「成功……したんだ」
青年は、剣ともライフルとも見える武器を片手に立ち上がる。
「……エネルギーはまだあるな。
こっちも……うん、大丈夫だ。
……さて、次はここが過去の世界なのか、それとも……あの男の言う別の世界なのか調べないと」
青年は強い決意を秘めた瞳で世界を見据える。
「どちらにしても……。
僕はもう、僕の目の前で誰も死なせない。
この世界では……アイツの好きにはさせない！」
そして、青年は自らの武器、ＣＷ－ＡＥＣ０２Ｘ「ストライクカノン」を肩に掲げ歩き出す。
青年の名は、エリオ・モンディアル。
ある世界で、天夢　龍二を倒す為に作られた部隊、特務六課、ライオットチームのメンバーにして、その世界の唯一の生き残りだった。

青年と少女（前書き）

偽道です。

試験も終わり、でも交通規制で家に帰れず寮でゴロゴロしてます。

……ぶっちゃけ暇人やってます。

明後日には帰れる予定ですがね…。

タイトルですが、当分このままにする事にしました。

全く題名が思い付かないので。

では、どうぞ。

青年と少女

アラートが鳴り響く。

仲間が次々と倒れ行く中、青年は戦い続けていた。

目の前の光景が現実の物だとはとても思えない。

こんなのは夢に違いない。

そんなささやかな希望は頬を撫でる熱い焔が否定する。

目の前で行われる殺戮。

銀色の長い髪を風に靡かせ、優雅に長刀を振るう男。

死神とは、きっと彼が名乗るのが相応しい。

青年は、そんな男に立ち向かっていた。

彼の傍らには、守りたかった女の子がピンクの髪と白い服を赤く赤く染めて倒れている。

殺せ

青年の頭には、最早この言葉しか残ってはいない。

今の自分が管理局員として間違っている事は青年は理解している。

……でも、止められない。

「くっくっく、この時代に来た時は失敗したかと思ったが……なかなか面白いではないか…エリオ・モンディアル」

「……黙れ」

「ここまで変わるとは、ここまで絶望するとは思わなかった！！エリオ・モンディアル……キミにも、更なる絶望を贈らせてはくれないか？」

エリオは駆け出す。

自らの愛機を手に。

「……ああ、懐かしい夢を見たな」

青年、エリオは顔をしかめながら起き上がる。

エリオが今いる場所は、何の因果かミッドのエルセア地方。

彼の姉的存在のスバルとティアナの出身地である。

勿論、エリオはそんな事など知らず、今後の対策を考えていた。

昨日、空港の火災が大々的に新聞に書かれていた事から、この世界は、少なくとも自分のいた世界に似通ってる事は理解した。

ただ、エリオは自分の世界で無いこともまた衝撃的事実と共に理解する。

それは、エリオが偶然視界に入ったゴシップ記事の内容。

それは…　高町　なのは一等空尉、クロノ・ハラオウン提督遂にゴールイン！！

……である。

世界が違えばこんな事まで変わるんだ……などと思いながら食事を続ける。

次に仕事の問題だ。

管理局との接触はまだ避けたい。

あの男に自分の存在を悟らせたくないし、エリオの武装を管理局が容認してくれるとは思えない。

今、エリオが持つ武装は、未来に於いて、フッケバインやあの男と戦うと言う特殊な条件下の下で許された武装が多い。

ＡＥＣ－００Ｘ「フォートレス」

ＣＷ－ＡＥＣ０２Ｘ「ストライクカノン」

ＣＷ－ＡＥＣ０７Ｘ改「ソードブレイカー」

一歩間違えれば、質量兵器と認定される物ばかりである。

唯一、管理局に堂々と見せる事が出来るアームドデバイス「ストラーダ」に至っては、この世界のエリオのストラーダと全く同じ機構だろうし、余り表に出したくない。

「ハァ、ここまでは成功したけど……ここからが本番かな？」

今のエリオには、フォートレスは使いこなせない。

だからと言って、威力やバッテリーの問題上そう簡単に練習出来る物でもない。

後、手持ちの金はそれ程多くないのも上手くない。

兎に角、仕事だ。

先立つものがなければ、何かを果たす事など出来ない。

エリオがぶつかった最初の壁。

それは、余りにも庶民的なものだった。

ポートフォール・メモリアルガーデン

エルセア地方にある墓地の名前なのだが……エリオはここに来た事を後悔していた。

狙った訳ではない。

道に迷い、偶々、彼はこの墓地に迷い込んでしまい、来た道戻ろうと思った矢先、何だか見に覚えのある少女を発見。

その少女が転びそうになった為、ベルカの騎士として見過ごせず、何時か、守りたかった彼女にしたようにソニックムーブで近寄り、抱き上げた。

彼女の時とは違い、失敗しなかったが。

「あっあの……有り難う…ございます…」

「いえ、当然の事をしただけですから気にしな……いで」

そこで、やっとエリオは気付いた。

助けた少女が……

「あのっ、わたし、スバル・ナカジマです」

かつて、機動六課にいた時にお世話になった同僚である事に。

管理局やかつての仲間には接触しないと決めて約数十分。

神様なんか嫌いだと心の中で叫んだ瞬間だった。

「……」

名乗られた後から、ジッと見られている事にエリオは気付く。

騎士として、名乗られたからには名乗返さなくてはならない。

しかし、モンディアルと言う名を使う訳にも行かない。

エリオと言う名前だけなら、さほど問題ではないが、モンディアルの名は別だ。

モンディアル家はかなり裕福な家で調べようと思えば、すぐにそこに行き着いてしまう。

「……エリオ・ハーヴェイです」

取り敢えず、エリオは昔どっかで聞いたような苗字を使う事にした。

この日を境に、エリオはスバルに魔法を教える事になるのだが、この時の彼はそれを知るよしもない。

それぞれの日々（前書き）

偽道です。

サブタイトルが思い付かず、どんどん苦しいものに為っていってるな…。

ついでに、家のエリオ（少年）のストラーダはランスではなくスピアです。

では、どうぞ…

それぞれの日々

2人の少年が対峙するように立っていた。

1人は、槍型のデバイス、ストラーダを構えたエリオ・スクライア。

もう1人は、大剣型デバイス、ツヴァイハンダーを構えた、レオン・ハーヴェスト。

両者の間合いは、僅かながらエリオに利があり、レオンはその事を承知していた。

初手を打ったのはエリオ。

彼は“細身の槍”であるストラーダの特性を生かし、素早い突きを四連続で放つ。

レオンは、その一撃目を避け、二撃目を払い、三撃目と四撃目をラウンドシールドで防ぐ。

レオンは、ラウンドシールドを維持しながら、左手を首に掛けているペンダントに持っていく。

「グリーヴァ」

＞心得ました、坊っちゃん＜

ペンダントは拳銃の形に変わる。

拳銃型のインテリジェントデバイス「グリーヴァ」

レオンは、それをなんの躊躇もなく自らの後方に向け、魔法弾を連射する。

エリオは、それを見ると、直ぐ様レオンから距離を離す。

すると、今までエリオが居た場所にレオンが後方に撃った筈の魔法弾が炸裂する。

「やっぱり、レオンさんのリフレクトショットは怖いですね」

「ぼくとしては、魔法も使わないで、あんなに鋭い突きを放てるエリオの方が怖いけどな…」

軽口を言い合ってはいるが、尚も攻防は続いている。

エリオは、最速の突撃を放ち直ぐ様離脱すると言うヒット&アウェイほ基本に、レオンは、魔法弾を四方八方に撃ち、魔法弾を空中で跳弾させて攻める。

これはレオンが編み出したオリジナルの魔法「リフレクト」、空中に魔法を跳ね返す鏡の様なシールドを使った物のお陰である。

レオンは何故か、直射型の射撃魔法しか使えない。

誘導制御型を撃とうとしても、何故か全て直射型になってしまう。

その弱点をどうにかする為に、編み出したのがリフレクトだった。

リフレクトはかなり薄いシールドで、視認し難いと言う特性と、威力がCランク以下なら弾き返す事が出来る特性がある。

その為、レオンの射撃の攻撃力は一発一発事態は脅威ではない。

ただ、予測せぬ所からの攻撃と言うのは、戦いに於いてかなり有利な物がある。

しかし、エリオはそれを避け続ける。

エリオにとっては、この攻撃では恐怖など感じられない。

寧ろ、エリオにとって恐ろしいのは師匠と過したあの一年間。

今、思い出せば確かにあの一年間は異常である。

「ああ……もう、エリオ相手に接近戦は無謀だし……じゃあ、これならどう！」

「つぅ……やっぱり、レオンさん相手にミドルレンジはキツいな…。何とかクロスレンジに持ち込まないと」

2人は、それぞれの武器を手に戦闘を続行した。

「成る程……な。

確かにフェイトの言う様にあの2人は鍛えれば強くなると思うぞ」
「うん、エリオもレオンも基礎は出来てるからね。
エリオは魔法にもう少し頼る事を覚えるべきだし、レオンも近接戦闘を鍛えてあげれば、今よりもっと強くなれるよ」
レオンとエリオの模擬戦を見ながら士郎とフェイトは話していた。
「それにしても、本当にエリオは魔法をあまり使わないな…」
「うん、それも全部ランサーのせいだ…」
士郎は、フェイトから立ち上る黒い怒りのオーラを見なかった事にしながら資料を見つめる。
「遺失物管理部対策部隊……機動六課。
あの2人は、そのフォワード陣決定かな」
「うん、そう言えば士郎、ロウファはどうだった？」
「ロウファか……断られたよ。
自分には、荷が重い部隊ですし、正直気に食わないのでお断りさせて頂きます……だってさ」
「気に食わない……か。
やっぱり、ロウファの事だから、魔導師ランクの保有の事？」
士郎は頷く。
確かに、途中まではロウファも六課に対して好感的な態度だった。

「ロウファは、レジアス中将の考えに共感する事が多いからな。
実直で真面目なんだよ」

リミッターを掛けてランクを下げ、その上で三人のエースを集める
六課。

それを見たロウファは静かに怒っていた事を士郎は気付いていた。
それでも、最後まで怒りを表に出さなかったのは、六課の言い分も
含めて堪えた……と言う所か。

「ロウファは明日を持って、俺の部隊から地上本部に異動。
階級も陸曹に上がるから栄転だな」

「レジアス中将はロウファを気に入ってるみたいだからね」

「ああ、アイツの才能なら、空にも海にも行けるのに、地上を守れ
なければ空と海を守っても意味がない……て言葉を偶然レジアス中
将が聞いてたみたいでさ…」

その後、レジアス中将とロウファの間に階級と年齢を越えた友情が
出来る様を士郎は見ていた訳だが……。

何故か、その後ろ姿を見ながら巨人の星を思い出していた。

その、熱すぎる熱血漢に少し引いたのは士郎だけの内緒である。

エリオ・モンディアルは、自分の持つ雑誌の内容に目の錯覚かと疑問を抱いていた。

しかし、いくら目を擦っても、いくら深呼吸し直しても雑誌の内容は変わらない。

その、内容は…

無限書庫、ユーノ・スクライア司書長、エースの一人、フェイト・T・ハラオウン熱愛発覚！

……である。

もう、色々と驚き過ぎて最早なにに驚けばいいのか分からない。

「せんせーい。何を読んでるんですか？」

「……気にしないでナカジマさん。僕も気にしない」

エリオは、気を取り直して雑誌をしまい目の前の少女……スバルに視線を向ける。

スバルと奇跡と言うか、何かの思惑が働いているような再開［スバルからしたら初見なのだが］をしてから、何故か魔法の先生をする事になった。

とは言え、エリオとスバルは同じ近接戦闘が得意な魔導師とは言え、

まったく戦い方のベクトルが違う為、本当に基礎的な事と、多少ストライクアーツを噛んでいるエリオがスバルの秘密の特訓相手になっている程度だが。

「今日こそ、ハーヴェイ先生から一本取ってギン姉に近づくんだ！！」

「うん、お手柔らかにね……ナカジマさん」

エリオ・モンディアルことエリオ・ハーヴェイ。

何とか職を見つけてはいるが、未だ何の対策も取れていない今日この頃であった。

それぞれの日々（後書き）

さて、今回まで書いて、未だフェイトとプレシアの身柄の事を書けていないので、ここで池上さんの質問に答えます。

プレシアは、あの事件の後、無期懲役で無人世界に拘留されました。とは言え、厳しい環境ではなく、ルーテシアが拘留された様な自然豊かな場所です。

病気持ちだった彼女ですから、この時代では既に亡くなっています。

フェイトとは、不器用ながら何とか上手くいっていた事にします。

フェイトは、基本原作と同じ。

ハラオウン家に養子縁組として世話にもなってます。

士郎は、クリフを殺害したのは自分だと意見を変えず、一度、牢屋に入りましたが、A' sの時の防衛プログラム攻撃の時に仮釈放で参加。

その際に使用した矢はクリフを死に追いやった［と士郎は思い込んでいる］カラドボルグ。

その一撃を持って、自分の罪はクリフの意志を引き継ぐ事で償う事を決めました。

てな感じの設定です。

士郎の苦難については、その内、外伝で書こうと思います。

では、次回！

馬鹿な弟の兄が馬鹿だとは限らない（前書き）

お久しぶり、偽道です。

最近、スランプで中々更新出来ませんでした。

文章の書き方も多少違い、このキャラの時だけ、こんな書き方にしようかなと思います。

ついでに、今回出る転生者は自分の友人が考えてくれたものです。

馬鹿な弟の兄が馬鹿だとは限らない

皆さんは、転生と言う物を知っているだろうか？

世間では、良く神の手違いで死んだからその礼に……とか言う理由でアニメの世界にチートっぽい力を手にしてトリップするアレだ。

ついでに、俺の死因は弟の自殺を止めようとした結果一緒に落ちた転落死。

自己紹介がまだだったな。

俺の名前は天夢　龍一。

ちょっと病弱の弟を持つ一般人で、名前が中二病みたいなせいで良く学校でイジメを受けていたごく普通の高校生だ。

今でも思う。

どうせ死んだのだから、天に住まう祖父に聞きたい……何でこんな名前を着けたのだ…と。

俺の事情は置いといて話を進めよう。

先程から、弟の龍二が「テンプレキターー？」と叫んでいて煩い。

と言うか、恥ずかしいったらありゃしない。

龍二が何か色々と神様に要求し、何か容姿をＦＦ７のセフィロスっぽくすると、「待ってろよなのは、フェイト、はやて～～？」とか

言いながら消えていった。
あいつは、現世に残してきた父や母の事が気にならんのか？
容姿だって、家族の繋がりの１つだと言うのに初々と変えやがって。
ああ、何か腹立ってきた。
何で俺、あんな奴の為に死んだんだろ？
「あの、さっき程から言葉が口から出ていますよ」
ああ、気にしないでください。
わざとですから。
「はぁ…それで、突然ですが、貴方はどんな力が欲しいのですか？
私も仕事なのでちゃっちゃと決めてください」
力ですか？
……要りませんね。
「要らない？
投影魔術とかライダーベルトとか王の財宝とか直死の魔眼とか魔力ランクＳＳＳＳとか不死身とかエターナルブリザードとか魅了魔法とか死者の蘇生とか何でもございますよ？」
要らないですよ。
と言うか、力を手にして何をしろと？
正義の味方の真似事ならお断りです。

不思議世界にも関わりたくはない。
俺は、ハル〇の世界で言う谷□のポジションを希望します。
古〇やキ〇ンのポジションは願い下げです。
と言うか、出来れば天国なり地獄なり早く案内してください。
死者が蘇るなんて不秩序は俺には無用です。
「それこそ無理ですよ、私も仕事で来ているんです。
力の件は了承しました。貴方には何も与えません」
ちょっと待ってください。
その言い方では力なしで不思議世界に放り込むみたいじゃないですか？
「みたいじゃなくてそうなんですよ。言うなれば、貴方はコロッセオの奴隷闘士。エインフェリアの卵。元より拒否権はありません」
マジですか？
「本気と書いてマジです。
だから、さっさと行きたい世界を選んでください。
一番人気は弟さんの選んだリリカルなのはの世界ですよ」
リリカルなのはですか……興味ないですね。
と言うか、出来ればあんな弟とはもう会いたくもないです。

じゃあ、これなんてどうです？

「はいはいどれどれ……サザ〇さん？」

はい、これなら普通の高校生として生活出来そうですし…。

「言いましたよね？

貴方は、コロッセオの奴隷闘士であり、エインフェリアの卵。

神様が何の変哲もないほのぼの空間を観て楽しめると思いますか？

ほのぼの空間で英雄が産まれると言うのですか貴方は！」

いや、英雄とか興味ないですし……。

そもそも、俺、アニメとか詳しくありませんし…。

知っているのは国民的アニメや弟に聞いたのばかりで……。

あっじゃあ、ドラ〇もんとかクレヨ〇しんちゃんとか……。

「シャラップ？

もう貴方は黙ってなさい！

私のノルマの達成の為、適当な世界を見繕います？」

いやいや、ノルマって何ですか？

それに、俺は実は凄腕の剣士とか伝説の勇者の末裔とか最強の暗殺者とかそんな設定ないですよ！

「大丈夫ですよ。きっと何とかなります！」

なりませんよ！

畜生、いったい俺が何をしたっていうんですか！

「異教徒です。
ある神父は言っていました。殴っていいのは異教徒と化け物だけだと？」
それ、宗教違……
「では、行ってらっしゃーい♪」
嘘だぁ～～～～？

と言う訳で、不思議世界に放り込まれた訳だが……。

「あっ、目を覚ましたみたいだね。
身体の調子はどうだい？」
ええ、全然大丈夫ですよ。
「それは良かった。自己紹介がまだだったね。
僕はユーノ・スクライアだよ」
これはどうも親切に。
俺は、天夢　龍一と言います。
あっ、リュウイチ・テンムと言った方がいいのでしょうか？
「いや、天夢　龍一で大丈夫だよ。名前の雰囲気から、日本の出身

かな？」

あっはい。
日本をご存知で？

「うん、一年間位住んでいた事があってね。海鳴市って所だけど」

海鳴？
聞いたことのない地名ですね。

「そうなのかい？
結構有名だと思ったけど」

すみません、世間に疎いもので…。

そう言うと、ユーノさんは仕方がないと人の良さそうな笑みで仰ってくれた。
本当、人の出来た方だ。

しかし、ユーノ・スクライアと言う名前には聞き覚えがあるが……
はて？

「さて、キミには今から信じられない様な話をしなくてはならない。
ここは、キミの住む世界とは違う世界なんだ」

いきなり異世界発言ですか。
いや、まあ神様が異世界に転生させると言っていたから予測はついていたが…。
ユーノさんの表情からそれが真剣である事が分かる。

ですが、いきなりキミは勇者だとか言わない事を希望しますよ。

「あはは、そんな事は言わないよ。
古代ベルカの時代じゃないんだし、英雄の時代は遺跡に変わってるよ」

それは良かった。
突然魔王を倒せとか王様に言われたらはっ倒して逃げ出しますよ。

「魔王……か」

……まさか、魔王がいるとか言いませんよね？

「魔王はいないけど、友達がね……白い悪魔って呼ばれてるんだ」

白い悪魔、ユーノ・スクライア、海鳴…。
ここに来て、やっとここが何処か気付いた。

「まあ、なのはの戦いをみたら仕方ない評価だと思うけど」

どうやら、俺はリリカルなのはの世界に来たらしい。

馬鹿な弟の兄が馬鹿だとは限らない（後書き）

と言う訳で、第二部の敵役転生者の兄、天夢　龍一の登場でした。

彼は戦闘が出来る様な能力はなく、思考も極めて一般人に近いもので、司書としての才能（ユーノに比べれば月とスッポンだが）高い以外は魔法の才能は皆無だそうです。

友人の希望により、龍一をメインに書く時は今回の様な感じになります。

それではまた次回！

サヨナラノヒ？（前書き）

お久しぶり、偽道です。

趣味に走りアンチのアンチから外れた今も尚、タイトルがアンチをアンチする妙な小説……。

そらそろタイトル変えないとなぁ……。

それではどうぞ！

サヨナラノヒ？

スバルと言う少女には憧れがある。

高町　なのは

正義の味方の様に颯爽と現れ、スバルのピンチを救ってくれた女性である。

大好きな家族もいる。

自慢の父とカッコいい姉が。

そして、最近助けたい人を見付けた。

エリオ・ハーヴェイ

スバルには、エリオが何処となく寂しそうに見えていた。

自分が転びそうになった時、絵本の王子様の様に颯爽と現れた。

でも、絵本の王子様と違って、何故か泣きそうな顔をしていた。

何で泣きそうなのか分からない。

なのはさんなら、どうするだろうと考える。

きっと、独りぼっちにはさせないと考えた。

だから、スバルはエリオと友達になろうと思った。
……気が付けば先生と生徒の間柄になっていたが。
そして、今日も何時も通りエリオに会う為に走っていた。
何時も通り、エリオに魔法を教わる筈だった。
「くっくっく、少し眠っていて貰おうか……スバル・ナカジマ」
銀髪の悪魔に掴まらなければ……。

エリオは悩み続けていた。
自分は、あの男を倒す為にこの世界に来た筈だ。
だが、スバルと会っている内にその意志が少しづつ薄れて行く。
今では、守りたかった彼女の顔すら思い出せなく為った。
「キャロ……僕は…」
こんな生活も良いかもしれないと思っている。
普通に仕事をして、先生と慕ってくれる生徒と笑い合う。

この世界にあの男がいるとも限らないのだ。

だったら、僕は……

だが、そんなエリオの思いを裏切る物が公園のベンチに落ちていた。

「黒い……羽根」

自分はそれを知っている。

自分はそれが何か知っている！

エリオは、その羽根を掴む。

それは、かつて自分が守りたかった彼女を奪われた時に使われたメッセージと同じ内容。

『エリオ・モンディアル。
キミの強さを失わせるのは惜しいのでね……再び、キミに私への憎しみを思い出させたい。
今から七時間後……この場で彼女の命を奪わせてくれないか？』

憎たらしい声を聴いた後、エリオはその羽根をへし折る。

やはり、自分は甘かった。

大切な存在をつくればあの男に狙われるのは自分だけではないのに……だ。

「ストラーダ、僕は今度こそ自分の甘さを捨てるよ。
あの男からスバルさんを助け出したら……今度こそ、誰とも関わらない……あの男を殺すまでは？」

＜……＞

ストラーダは語れない。
アームドデバイスである彼には何と答えればいいのか分からないから。

だから、自分の出来る意思表示だけをする。

自分は、騎士エリオの槍なのだ。

騎士の槍は、騎士が望んだ物を貫くのみ。

ロウファは何時も通り業務を終えた後、くたびれながら自宅へと向かっていた。

今の彼は1人暮らしである。

父は海の仕事で船上の人、母は血の繋がりも無く年齢も自分とは2つしか違わない。

……つまり、自分の精神の安定の為に逃げ出したのである。

と言うか、妻の年齢が夫より息子に近いなど何処のラブコメだ！と声高く叫んでもいい筈だ。

でもしない。

したら、息子に嫌われたと母は嘆き、新婚ラブラブである父の真っ赤に燃え尽きそうな熱愛の炎とは真逆の永遠凍土の氷結魔法と言う矛盾した力で死んだ方がマシな地獄を見そうだから。

「はぁ、何処の誰だ？
高町母と父さんの結婚を後先考えず喜んだのは……」

自分だろ！　とツッコミを入れる者はいず、虚しさだけがロウファを襲う。

そんな事を考えていたロウファは突然、言い表せない悪寒を感じた。

懐かしい？

いや、そんな生易しい物ではない……。

この魔力は気に入らない。

この、ざわざわとした感じが気に入らない。

「ｓｅｔ　ｕｐ」

誰かが無断で魔法を使っているのなら逮捕しなければならない。

そして、この魔力の持ち主も自分は知らなければならない気がするから……。

サヨナラノヒ？（後書き）

……僕の尊敬する作者はニトロプラスです！

嘘です、好きだけど。

本当は山田　悠介さんで……すんません冗談です、読んでるけど。

自分の作品はつくづくオリキャラや半オリキャラの扱いが悪い気がします。

何か、自分は自己犠牲精神に美しさでも感じているのだろうか？

好きなキャラが、Ｌ、切嗣、士郎、クロノ、アーチャー、スザク、ジューダス、ターミネーター２のＴ－６００（で良いんだっけ？）だし、最近ではまどかが加わった。

全員、世界の為に命投げ出すキャラだな……。

第二部はハッピーエンドになります！

なると思います！

なる…かな？

為ったらいいな……。

それでは次回！

サヨナラノヒ？（前書き）

久々に二日連続投稿出来た偽道です。

やっぱり、自分の作風は暗いな……。

アンチのアンチが無くなった今すら暗い話になります。

死者こそ出ませんが……。

それでは、どうぞ。

サヨナラノヒ？

ロウファと言う少年には、１つの誓いがある。

例え、どんな状況やどんな場合でどんな苦難が待ち受けようとも、自分の目の届く範囲の命をただ１つとして取り零さないと言う誓いが。

魔法とはその為の力であり、自分はただその為だけに生きている。

魔法は、力の無い人を守る為の神様からの贈り物なのだろう。

誰も傷付けずに戦う力があるのだから。

だから、ロウファは父クロノの杖、デュランダルのデータを元に作られた自らの杖に“クルタナ”と名付けた。

クルタナの別名は“慈悲の剣”。

切っ先の無いこの剣は人を傷付ける事は出来ない。

故に、この杖の名はロウファの覚悟その物だ。

さて、そんな少年が……。

お腹に風穴を開けた少女の前で返り血を浴び、真っ赤に染まる槍を持つ殺気だった魔導師を見たらどう思うだろう？

どう考えるだろう？

「自分は時空管理局、地上本部所属、高町　ロウファ陸曹だ」
答えは単純。
「キミを……殺人の容疑で逮捕する」

少し時間を遡る。
エリオは、公園でただひたすらあの男……龍二を待ち続けていた。
手に持つのは、愛槍ストラーダ。
天夢　龍二が言った時間まで、後１０分前。
その時間になり、龍二はスバルを抱えてエリオの前に現れた。
「くっくっく、よく来てくれた……エリオ・モンディアル」
「スバルさんを離せ」
「くっはははははは！スバルさんを離せ……か。
エリオ・モンディアル、あの時の復讐心に染まったお前は何処に行った？
絶望し、憎しみに身を委ねていたエリオ・モンディアルは！？」

＜スピーアングリフ＞

ストラーダの槍の穂から、魔力をロケットのように噴射し龍二に突貫する。

龍二はそれを落胆した表情で刀で受け流し、槍の柄を掴む。

「何のつもりかね……エリオ・モンディアル」

「っ？……紫電一閃！」

右拳に魔力付与を行い、龍二に撃ち込む。

しかし、龍二はそれをさも詰らなそうに避け、ガラ空きに為ったエリオの脇腹目掛けて蹴りを打ち込む。

「カハッ」

吹き飛ぶ

宙に舞ったエリオは何とか体制を整え、ストラーダの尖端部に電撃を発生させる。

「サンダァァァァレイジィィィィ？」

尖端部の電撃をが地面に突き刺さった場所を中心に周辺に電撃を走らせる。

「いつ迄遊んでいると聞いているのだがね……エリオ・モンディアル！」

龍二は地面を刀で斬り裂き、電撃を払い除ける。
「キミは理解している筈だ。
私をキミ程度の魔法では倒せない事を。
だからこそ、キミ達管理局は苦しい言い訳をつきながら魔力を衝撃波や鋼体破壊砲に変換する兵器を作り上げたのだろう？」
「くっ……」
龍二はエリオを冷めた視線で見詰めた後、マテリアを取り出す。
「エリオ・モンディアル……今のお前はつまらない。
昔の……私にだけ感情［憎しみ］を向けていた頃の貴様ならば、人質など無視してそれらの兵器を使っていただろうに」
龍二は片手で今迄抱えていたスバルを放り投げる。
「時間だ、エリオ・モンディアル。
再びキミの大切な存在を奪う喜びをくれないか？」
龍二の手には炎が現れる。
エリオはスバルの前に躍り出て、全魔力をプロテクションにつぎ込む。
「さあ、私のファイガはキミの盾で防げるか……最初の世界ではキミの兄だった私が見定めよう」
「つっあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ？」

プロテクションは炎を防ぎ切れなかった。
故に彼はスバルに覆い被さる様に抱きしめ、炎に背を向けた。
「えっ……あっ……先生？」
そんな状況の中、スバルは意識を取り戻す。
最初は何が起きているか理解出来ていない表情をしていたし、エリオに抱きかかえられていた為、状況が理解出来ずにいた。
焦げた肉の匂いがする迄は。
「せん……せい…背中が……焼けて…」
「……」
エリオはスバルに何も告げず、辺りを警戒する。
何時の間にか龍二の気配や殺気がなくなっている。
体力も魔力も厳しい今、スバルに意識を向けている余裕は無かった。
「せん……せい……何…で？」
突然弱々しくなったスバルの声に流石に気になったエリオは視線を下に向ける。
「……え？」

何故だ？
ストラーダは何故赤く染まっているのだろう？
自分は龍二に傷１つ付けられなかった筈だ。
「なん……で？」
槍の先には、さっき命懸けで助けた守りたい大切な存在が赤く赤く染まって倒れている。
「何で……僕が？」
解らない
何時の間にかストラーダは殺傷設定になっていた。
「くっくっくっ。どう言う気分かねエリオ・モンディアル。守ろうとした存在を自ら斬り捨てる気分は？」
龍二の手には、新たなマテリアが輝いていた。
「あやつる」のマテリアが。
「中々の趣向だろう？
これで、スバル・ナカジマが生き延びたとしても、キミに懐く事はもうあるまい。
くっくっくっ。キミはまた私に大切な物を奪われた訳だ」

「……天夢　龍二いいいいいい？」

満身創痍のエリオの槍は龍二には届かない。

龍二はそのエリオの増悪に染まる表情をさも楽しそうに見た後、その場からさった。

そして、それと入れ替わる様に若き局員は公園に現れる。

「自分は時空管理局、地上本部所属、高町　ロウファ陸曹だ」

エリオはそのロウファと名乗る局員に視線を向ける。

その姿は、肩の震えを必死に抑え、怒りを抑え何とか冷静であろうとしている様に見えた。

「キミを……殺人の容疑で逮捕する」

「僕を捕える前にやるべきことがありますよね？」

ストラーダをスバルに向ける。

息をしている所を見る限り、まだ助かるかもしれない。

「キミは！

まだ、罪を重ねるつもりか！？」

「……ええ、僕は今後も罪を重ねるでしょう」

あの男の所為で絆が断たれるのなら、いっそ全てここで投げ捨てよ

う。

「僕が犯罪者を見逃すと思うか？」

「では、キミはこの子の命は要らないんですね？」

ロウファは苦虫を噛んだ様な表情をする。

悔しいが、今は目の前の少女を助け、更にあの危険人物を捕える。

その2つを同時に行う手段が無いからだ。

「分かった。

……今はキミを見逃すしかない。

でも……何れは！」

「物分かりの良い方で安心しました」

エリオはその場を去る。

心の中でスバルにお礼を言い、巻き込んだ事への謝罪をしながら。

ロウファは少女を抱え、飛行許可も取らずに病院へと飛ぶ。

腕の中に収まる小さな命を失わせない為に。

「さよなら……スバルさん」

「頼む……生きてくれ」

これが、後に敵対する事になる2人のファーストコンタクトだった。

サヨナラノヒ？（後書き）

エリオとロウファの敵対フラグ……完全にロウファの勘違いですが。

もう、誰も巻き込まない為に全てを突き放したエリオ（なんか完全にオリキャラ化した気がする）と、エリオが犯人だと思い込み今後追いかける事になるロウファ。

ついでに、今の彼らの実力はエリオは陸戦Ｓ－に対して、ロウファは陸戦Ａ。

……結構、絶望的な差ですね。

それでは次回。

黒衣の英雄が墜ちた日（前書き）

偽道です。

また暗い話で龍二が調子に乗ってます。

どうしでも、龍二のキャラ設定的に必要な話だったのですが……正直、悪が勝つ的な話はあんま好きでないな……。

……嘘つけ！　と言うツッコミは無しの方向で。

ではどうぞ…。

黒衣の英雄が墜ちた日

スバルが目を覚ました時に見たのは清潔感のある白い天井だった。

「スバル！」

「ちょっ、ギン姉！痛いよ…」

いきなり強く抱きしめられた為、ちょっと痛いのを我慢しながらどうして此処にいるのか考える。

自分は今日、確かいつも通り学校を終えた後、先生に会いに行く途中気を失って……気付いた時には…。

「……先生」

全てを思い出した。

自分は先生に殺され掛けたのだと。

でも……

「ゲンヤ・ナカジマ三等陸佐、高町　ロウファ陸曹ですが、御息女にお話を伺いたいのですが」

「……スバル、大丈夫か？」

スバルはゲンヤの質問に頷く。

それを確認し、ゲンヤはロウファに室内に入る様に促した。
「はじめまして、スバルちゃん。
自分は高町　ロウファといいます」
ロウファはコクリと頷いたスバルを見た後、ゲンヤに視線を向ける。
ゲンヤはその視線に頷くと、ロウファはデバイスを録音モードにして、スバルに話しかけた。
「じゃあ、3日前にキミが巻き込まれた事件について、詳しい話を聞かせてくれないかな？」

エイミィは敏感にクロノの機嫌の良さを感じ取っていた。
久々に奥さんと再会するのだから当然かと頷く。
「久しぶりになのはちゃんと会えるの……やっぱり嬉しい？」
「ああ、一ヶ月も離れ離れだったからな」
弟の幸せを喜ぶ一方、何処か寂しいものがあるな……と姉の様な心境で考える。
「じゃあ、後の処理は私に任せてなのはちゃんの所に行ってあげな

よ」

「いや……しかし、コレは…」

「良いから良いから、艦長殿にやって頂く書類は既に終わってるよ」

おちゃらけて言うエイミィに苦笑しながらクロノは礼を言い帰り支度を始める。

「それじゃあエイミィ、後はまかせる」

クロノはゆっくりとした足取りで自宅に向かう。

久しぶりに連休が取れたのだ。

ロウファは気になる事件を追っているらしく休みが合わなかったが、なのはは休めると言っていた。

久しぶりに2人きりの時間も良いだろう。

……と、気を抜いていたのも束の間。

クロノは冷たい殺気に気が付き、デュランダルを構えて辺りを警戒する。

（念話が？がらない……何らかの方法でジャマーを掛けられたか）

「自分は時空管理局、アースラ艦長、高町　クロノ提督だ」

「高町……か。

そう名乗るキミは中々珍しいな……クロノ・ハラオウン」

クロノはその男を見た瞬間、強い嫌悪感を覚えた。

まるで、どうやっても相容れる事はない……両者共に敵である事を宿命付られた様な妙な感覚。

「やはり、お前も嫌悪感を感じるのかね？

まったく、何処の世界に行ってもキミとあのフェレット程厄介な存在はいない」

「キミが何を言っているか分からないが……キミが危険だと言う事は理解出来た」

「くっくっくっ、私が危険……か。

そもそも、私が危険人物になったのはキミの作り出した部隊のせいだろう？」

クロノには、男の言う言葉が理解出来なかった。

まるで、自分を通して別の誰かを見ている様な視線。

それが、とても気色悪い。

「お前は、私の天敵でね……。

厄介な芽は早々に摘み取る事にしているのだよ」

クロノは、直ぐ様男から距離を取る。

今迄、クロノのいた地面には八刀の傷が刻まれていた。

「ふむ……とうとう避けられたか。
世界を越える度に技を見切られて行く……無意識下の記憶の共有？
いやはや、随分と世界に嫌われたものだ」
男は不気味な笑みを浮かべる。
まるで、クロノのそれを憎たらしくも愛おしそうに……。
「さて、クロノ・ハラオウン。
キミはこの、天夢　龍二が全力全開で殺し尽くそう？」

ロウファは、スバルの言葉に頭を傾げる。
彼女は、先程から彼女を殺そうとした男……エリオ・ハーヴェイの事を庇おうとしているのだ。
……空回りして、庇うには不利な発言もしているが。
「何でキミは彼をそこ迄、彼を庇おうとするんだい？」
「泣いてたんです。
私に槍が刺さっているのを見て……泣いていたんです」
（……この庇いよう、何かこの件には裏があるのか、ただ単純にこ

の子が騙されているのか？）

調べる価値はある。

どんなに探っても過去に存在した形跡を見せない騎士。

それに、あの気に食わない魔力の正体。

「質問に答えてくれて有難う、スバルちゃん」

「あのっ！」

ロウファが席を立とうとした時、スバルは彼の手を掴む。

「きっと、ハーヴェイ先生には何か事情があったんです！

ハーヴェイ先生を助けるのに協力してください？」

協力？

助けてくれでは無く、救ってくれでも無く……協力してくれ？

ロウファは、その少女の強さに感服する。

「……キミは、確か管理局に入局するんだよね？」

「えっと……はい！」

「なら、未来の同僚の手伝いはしてあげないとな」

ロウファは、スバルに笑顔で感謝を受けながら廊下に出る。

「さて……まずは捜査官の資格を取らないと」

スタート地点に立ってさえいなかったが。

しとしとと雨が降る。

仕事で疲れ果てた様な表情の中年サラリーマンは急ぎ足で自宅に向かっていた。

「……何だこれは？」

サラリーマンは何時もの帰り道の途中、何時もと違う光景を目にした。

「しっ死体？」

紅く染まった黒いバリアジャケット。

高町　クロノは虫の息でそこに打ち捨てられていた。

黒衣の英雄が墜ちた日（後書き）

クロノくんは死んでません。

もっ回言います。

クロノくんは死んでいません！

と言うか、たぶん自分の作品は原作キャラが死亡はありえません。

未来が多少変わる事があっても。

それでは次回！

出会いに悩みに再会に…（前書き）

こんにちは偽道です。
久しぶりの本編ですが……なんか最近迷走している気がします。
では、どうぞ……。

出会いに悩みに再会に…

ロウファは、厳しい表情をしたまま無限書庫へと向かっていた。
そんな、ロウファと通りすがった局員は決まってコソコソと話始める。

曰く、「身内の不幸があったのに何も感じない非情の魔導師」

曰く、「家族よりも出世を選ぶ最低な魔導師」

ロウファは、その自分への評価を耳にする度に苦笑しながら「そうかもしれない」と相槌を打つ。
実際にロウファはクロノが何者かに襲われて以来、一度もクロノに会いに行こうとしていない。

でも、それでいい。

義父の性格を考えると、今追っている事件を一時的にでも投げ出せばきっと怒る。
自分の憧れている義父ならば、「今、キミのやるべき事はボクの見舞いじゃ無いだろ！」と怒鳴るに違いない。

僕は義父に何と言って休日が取れないと言ったのか？

それを、忘れてはいけない。

「すみません、スクライア司書長はいらっしゃいませんか？」

「ああ……ユーノさんなら今出掛けているんですが。俺が要件を伺

いましょうか？」

対応してくれた司書は初めて見る顔だった。
無限書庫に追加要員とは珍しいなと頭を傾げながら欲しい資料を告げて行くと、その司書は意外な言葉を言って来た。

「この位なら俺でもどうにか出来そうですし、１時間程待っていて頂けますか？」

「１時間！？
記憶が正しければ、この量はスクライア司書長で３０分、司書が５人係でやっと１時間の筈だが！！」

司書達から資料の請求量が二代目無限書庫の黒い悪魔として恐れられているロウファは自分の要求する資料がどれ程の時間が掛かるか大体把握している。
司書はと言うと、ああ、こいつが無限書庫の黒い悪魔か……と理解していた。

「はっははは、だっ大丈夫ですよ。
ええ、大丈夫です。たぶん、きっと、恐らく……」

司書は思った。
俺の平穏オワタ。

司書の名は天夢　龍一。
彼は後にこう語る。

「ええ、思えばアレが運命の別れ道でした。
ユーノさんと高町提督の友好関係は聞いてはいましたが、まさかそ

れまで二代目になるとは……。
あのブラック野郎、資料請求に容赦と言う言葉を知りませんよ。
ほら、噂をすればまた、資料の請求がこんなに……」

エリオ・スクライアはユーノと共にクロノのお見舞いに来ていた。
クロノが襲われてから数週間、今だに目覚める気配はない。
そして、この事件がエリオにある疑問を与えていた。

力を奮うのは正しい事だろうか？

力を得る事には何の疑問も無い。
強くなるのは、強くなれるのは達成感を感じて嬉しい。

守る為には戦わないといけない時がある事は知っている。

『あはははは、もっとだ！もっと戦おう！！』

思い出したのは、チャリティーコンサートで戦った大剣を持つテロリスト。
自分は彼と何処が違うのだろう？

彼もある意味力を求めていただけだ。
ただ、純粋に強者と戦いたがっていた。

でも、僕は彼を否定した。
彼を否定したのは、彼が誰かを傷付けるからだ。

では……僕は？
僕は誰かを傷付けていないか？
僕はクロノさんの様な人を作っていないか？
クロノさんの周りの人の様な悲しみを作り出しては？

「どうしたのエリオ？」

「……何でもありません、父さん」

エリオは少しずつ力への恐怖に蝕まれ初めていた。

黒いタロットカードの様な物を弄りながら士郎は自嘲気味に笑っていた。

「すまない……クリフ」

クロノを守れなかった事は士郎にとって重い事実である。
クリフを死なせたと思い込んでいる彼にとって、クリフが死の間際まで気にしていたであろう青年の撃墜は重過ぎる。

「士郎？おい、士郎！」

「どうしたんっすか武蔵の旦那」

クリフならば、自惚れるな　と言い出すだろう。
自らの未熟さを知れとも言いそうだ。

「オーイ、士郎？
無視か？無視ですかゴラァ？」

「ああ……と、旦那、人違いじゃないっすか？」

だけど、俺が唯一アイツと違うのは全てを救う正義の味方への道を
諦めていない事。

アイツはアーチャーの様な全てを諦めた様な目をしていた。
だから、アイツに、俺が死なせたアイツに証明したかった。

全て救う正義の味方。
それを目指すこの思いは……きっと間違いなんかじゃ……。

「無視すんじゃねぇぇぇぇ！」

「ぐはぁっ！？」

士郎はモロに食らった蹴りにより、数メートル吹っ飛ぶ。

「だっ旦那……ちょっとやり過ぎじゃ…」

「大丈夫だから。俺達この程度でくたばる程柔くないから。
この程度で死んでたらとっくの昔にくたばってるから！」

少しトラウマを思い出したのか心無しか震える武蔵。

ここで1つ補足しよう。
この武蔵の考えには大きな間違いが幾つかある。
第一に、この衛宮　士郎は武蔵の知る士郎とは別人である事。
第二に、この衛宮　士郎は蒼崎姉妹にはなんの縁も無い。
つまり、バリアジャケットや礼装を着ていない彼の防御力は紙である事。
第三に、武蔵に出会っていない彼はツッコミ属性もギャグ体質も持ち合わせていない事。
そして、最後に……本小説の作者はシリアスをギャグにいきなり変える柔軟性は無い事！
つまり……
「でも……武蔵の旦那、さっきから…士郎の旦那が動かないっすよ」
「ちょっ待っ、士郎！？
オイ、士郎戻って来い！
ギャグで殺人とかシャレにならないから！」
士郎は揺さぶられながら名セリフを呟く。
「なんでさ……」
理不尽な目にあった時に呟くその台詞は辺りに虚しく響いた。

再会……では無いもよう（前書き）

偽道です。
武蔵のキャラが自信ないな……。
好きなキャラではあると同時に書くのが苦手なタイプなので…。
書かせて貰えて光栄ではあるのですが。

では、どうぞ！

再会……では無いもよう

衛宮　士郎は目の前にいる自分を蹴り跳ばした男に警戒する様な視線を向けていた。
……と言うかバリバリ警戒している。

士郎の本能が告げているのだ。
こいつは虎だ。絶対虎だ。警戒を解けばバターに溺れて溺死する。
知り合いと間違ったとは言え、いきなり蹴り飛ばす様な激しいスキンシップを行う様な人間なのだ。
絶対虎と同種の人間だ。

「で、士郎。マジで俺の事知らない訳？」

「ふむ、私の親友にはいきなり友人を蹴り飛ばす様な輩はいなかった筈だがね」

取り敢えず、嘘は言ってない。
友人にはそんな奴はいない。
……身内にいたけど。

「衛宮の旦那、先程の事は謝るんで許して頂けないっすか？」

「キミが謝る事はあるまい。
キミは寧ろこの自体は止めようとした善良な人間だ」

「はっはははは……はぁ」

確かに士郎の怒りはヴァイスには向いていない。

しかし、居心地の悪い空間は思いっ切りヴァイスを巻き込んでいる。

「あー、その悪かった。
昔の知り合いに瓜二つだったからな……間違えた」

「む……いや、俺の方こそ大人げなかった」

またもや気まずい空間が作り出される。
ヴァイスの胃もキリキリと痛み始める。
こっそりと胃薬の小瓶を取り出し飲み干す姿は何処か手馴れていた。

「だぁぁぁぁぁ！
なに？この気まずい空間！？
無理だから、俺こう言う空気は無理だから！！」

ヴァイスは頭痛薬まで取り出し、暫し胃薬と合わせて飲んでいい物か悩む。

「無理も何も作り出したのはお前だろ！？」

「いやいや、絶対士郎だから。
素直に謝罪を受けっとっておけばいいのに謝り返しちゃった士郎の所為だから！」

多分大丈夫だろう。
現に今まで大丈夫だったのだ。
胃薬と頭痛薬は友達なのだ。

武蔵と生活し始めてから楽しく明るくなった気もするが、胃薬と頭痛薬も常備装備になったな……。

「その理屈はおかしいぞ！
悪い事をしたと思ったから謝ったんだ。
その思いは……けして…間違いなんかじゃないんだから！！」

「うぉぉぉぉぉい！
そこで名台詞を使ってどうすんだよ！！
作者が自分の技量の無さを隠そうとしてわざとか！？」

「その手のネタをつかうなぁぁぁぁ！！
やっと最近復帰した作者がまた逃げ出すだろぉぉぉ！！
……あれ？何で俺こんなにテンション高いんだ？」

はぁ…。
騒ぐのは良いんだ騒ぐのは。
でもよ、子供じゃないんだから……時と場所と相手を考えて欲しい。

「それはアレだ。
きっと平行世界の何処かで俺と合った事があんだよ」

俺って……お調子者だよな？
どっちかと言うと面白い人タイプだよな？
最近じゃ、シグナムの姐さんや高町教導官にお父さんみたいな……
ヘリのパイロット…て。

「てっ、ヴァイス！？
なにいきなり泣き出してんだよ！！」

「武蔵の旦那……若いって何なんっすかね？」

「なに！？
何でいきなりそんな重い悩み口走っちゃってんの！？」
士郎はヴァイスのポケットを見て合掌する。
「……最近じゃラグナは旦那にベッタリで、扱いにくいんだか扱い易いんだか。
泣き出した時にあやす姿を見られたら……若いお父さんで羨ましいわね…すよ。
そんなに老けてるんっすか……俺」
良い感じに壊れ始めるヴァイスに若干引きながら士郎は思う。
ああ、なんか……他人事に思えないな…と。
何となく……本当に懐かしむ様に、羨ましそうに士郎は武蔵とヴァイスのやりとりを眺めていた。

目の前にあるダンボールを前にレオンとエリオは憐れむ様な視線を向けながら立っていた。
レオンが今いる場所は第二陸士訓練校の女子寮前。
下着泥棒が最近現れたと言う事で見張りを頼まれた訳だが……。
「……エリオ、どう思う？」
「どう……て、普通こんな所にダンボールがある筈ないじゃないで

すか」

カタンッ　と揺れるダンボールに2人の視線は可哀想な人を見る目にクラスアップする。

「大佐！ダンボールを被っているのに敵に発見された！」

『落ち着けスネーク。
まだ、今は警戒フェーズな様だ！
目の前の2人がダンボールを持ち上げた瞬間に後ろに回り込み気絶させろ！』

「了解！」

「……らしいですよレオン」

「憐れみを通り越して苛立ちを感じてきたな……ぼく」

人が入っている事確定のそのダンボールに2人はデバイスを向ける。

「しまった！
だが、俺はスニーキングミッションではチートすぎるスネークだ！」

バッとダンボールを脱ぎ捨てたバンダナの変わりにブラジャーを着けた上半身裸の変態、自称スネークは走り抜ける。
レオンとエリオはその余りにも変態すぎる姿に一瞬惚けてしまったらしく、それを見過ごしてしまった。

「……はっ！
まっまて変態！？」

「フハハハハ！
待てと呼ばれて待つ奴がいるか！」
何気に素早い変態は訓練校の校内に逃げ込む。
「エリオ、先に行って！」
「はい！」
今ここに、変態対レオン＆エリオの闘いが始まった。

再会……では無いもよう（後書き）

ヴァイスを苦労人キャラにしてみました。
今の友達は頭痛薬と胃薬。
後に育毛剤まで友達になるかもしれません。
しかし……ギャグは難しいですね。
でも、武蔵を出すならギャグを書きたかったんですよ。
次回はレオンとエリオ・スクライアの方です。

しかし……自分は何時になったらタイトルを変えるのだろう？

作者の心の声です……もう、本編でギャグなんか書く物か！（前書き）

今晩は、偽道です。
タイトルに書いてある通りもう本編でギャグは書かない。
日常パートで多少書くかもしれないけど、ギャグとバトルは自分にとって混ぜるな危険です！！

後、オタコンっぽい何かはオタクコンと名乗ってます。

……では、どうぞ。

作者の心の声です……もう、本編でギャグなんか書く物か！

エリオが校舎に入った時に見たのは気絶したり眠っている女子寮を警備していた訓練生だった。
あの変態、見た目は兎に角……強いのかもしれない。

パンッと乾いた音に反応して、エリオは僅かに上体を逸らすと、麻酔銃の弾が壁に突き刺さる。

「くっ、避けられた！？
……いや、確かエリオはスピードで戦うタイプ…当然か」

そこには机の下に隠れた変態がいた。
変態は机から這い出ると、拳銃とスタンロッドを構える。
見た目はともかく、その歴戦の勇者らしき雰囲気が緊張する。

「……シッ！」

「チィッ！？」

自分の放てる最速の突きは変態のスタンロッドに防がれる。
やはり、この変態……見た目はともかく強い。
再び、銃口を向けてくる変態に気付き槍を向けようとして……。

「っう！？」

思い出した。
力によって不幸に堕ちた人の顔を……。
それが、エリオの槍を鈍らせる。

「エリオ、下がって！！」

そんなエリオを守る様にやっと追いついたレオンは前に出る。

「見た事の無い敵だな……まさか、俺と同じ！？」

「あんたと同じ扱いだけはされたくないいいいい！！」

レオンは魂を込めた叫びと共に剣を振るう。

その威力は通常の三倍！

「やはり、俺と同じ転せ……「何を言おうとしてるか知らないけど、絶対に違う！」」

レオンは思う。

こいつと同じ［変態］だとだけは思われたくない！

「何を言う！

これ程の力を持つのなら俺と同じ［転生者］存在だろう！？」

「何で、貴方と同じ［変態］になるんですか！？」

レオンは限界を突破しながら剣を振るう。

目の前の奴と同じ［変態］だと思われたく無いが為に。

スネーク？　はスタンロッドでその剣を受け流す。

目の前の同じ［転生者］と思われる存在を見極める為に。

「やはり、お前は俺と同じ［転生者］としか思えん！」

「だから、ぼくは貴方と同じ［変態］なんかじゃない！！」
徐々に2人の戦いは熾烈に為って行く。
その戦いを見ながらエリオは迷い続けていた。
「ストラーダ……僕はどうすれば良いのかな？
僕は……キミを振るうのが…怖いんだ」
〈戦いを辞めるなら、私を捨てて下さい〉
エリオはストラーダの言葉に驚きながら目を向ける。
〈私は槍だ。
貴方が私を振るうのが怖いのなら、私は必要の無い存在だ〉
「そんなこ…」
〈私は、貴方の槍である事に誇りを持っている。
彼のゲイ・ボルグ程の槍ではないこの身なれど、貴方にだけはその誇りを汚されたくない〉
エリオはストラーダの言葉に口を閉ざした。
〈決断を騎士エリオ。
貴方は私を捨てるのか？私を振るうのか？〉
「その二択は卑怯だよ……ストラーダ」
このやり取りは何処か中世の騎士を思わせる美しさがあった。

そりゃ～もう、壊れた天井から零れる月光がいい感じにエリオとストラーダを照らし雰囲気も抜群である。

「くっ……大佐！敵の直射型魔法弾が何故か死角から飛んでくる！！」

『スネーク、敵はどうや『スネーク、僕だ。オタクコンだ！敵はどうやら独自の防御魔法を展開してそれで魔法弾を跳弾させているらしい！！敵の射撃は正確だ……気をつけて』……私の台詞が…』

「……たかが下着泥棒が三人チームを組んでるなんて…」

このバックのやり取りで色々台無しである。

まあ、人生なんてそんなもんかもしれないが台無しである。

「ふっ！やはりこの世界の常識を無視した様なこの発想！

キミはやはり我々と同じ［転生者］だ！！」

「だから！ぼくは！お前と同じ［変態］じゃ無いって言ってるだろオオオオオオオオ！！」

〈坊ちゃん、落ち着いて下さいいいいいいい！！〉

「いくよ……ストラーダ！この迷いを断つ為に！！」

〈了解、相棒！〉

ギャグ［レオン］とギャグ［スネークと名乗る何か］とシリアス［エリオ］がそれぞれの武器を構える。

と言うか、スネークと名乗る変態は何か馬鹿でかい砲台らしき物を

肩に掲げていた。

「一意戦心！」

「一閃必中！」

「超孤独兵器！」

何やら虚しい響きの言葉を一人叫んでいるが、案外彼等はマジである。

だが…

「何であいつ等校内であんな魔法をブッ放そうとしてんだぁぁぁぁぁぁ！！」

と言う訳でここは校内である。

ちゃんと天井もあって扉……まあ、扉はとっくにブッ壊れているが校内である。

「やばい！あいつ等周り見えてねえ！！

結界魔導師！なにやってんのォォォォォォォォォォ！！」

「あのなあ！アニメ見てる奴は結界魔法なんてフェレットでも出来る簡単魔法と思いがちだがな！！

そんな単純なもんじゃねえんだよォォォォォォォォォ！！

てめえ等みたいに単純じゃねえんだよ脳筋野郎！！」

「魔法は脳筋じゃ使えねぇよ！！

前戦でストレジだぞ！！確かにストレジは人工知能を搭載していな

い分、処理速度は速いよ！
でもな！魔法飛び交う中、自分が登録した魔法の発動を自己で決定しなければならないだぞ！！
人によっちゃあインテリより強いかもしれねぇーけどな……訓練生がそんなデバイスで前戦戦えるかぁぁぁぁぁぁぁ！！
いっそ俺はデバイスを鈍器にして突貫してやるうううううう！！」

「お前、それ脳筋の否定してないから！
脳筋を証明してるからぁぁぁぁぁぁぁ！！」

もうパニックである。
当然、ここは陸士の訓練校である為、上空にいるレオンと変態には近付けないし、エリオの魔方陣周辺にはその槍から噴き出すジェットの風圧で近付けない。

「フッ……所詮モブの扱いはどの作者も同じか……」

「一応結界張ったから外はだいじょうぶだけど……俺達は？」

「メアリー……僕は君を愛して…」

訓練生達が覚悟を決めた瞬間、計った様にそれが放たれた。

〈ウィップ・バレット〉

レオンは無数の魔法弾を放ち…

〈スピーアアングリフ〉

エリオは特攻を仕掛け…

「非殺傷レールガン！！」

変態と言う名の紳士、スネークは極太ビームをブッ放した。

『馬鹿だろ？』

エリオとレオン、懲罰室より一週間ぶりに外に出て親友ロウファに連絡を入れて事情を説明した際に頂いた最初の言葉である。

『訓練生でありながら器物破損で借金生活なんて聞いた事も……ない』

一瞬、顔を顰めた物の……ないと断言するロウファの表情は完全に呆れていた。

「でも……下着泥棒は捕まえたんだよ…」

『校舎の一部を破壊して……何人かの訓練生にトラウマを作ってな』

『にゃはは……ロウファ、そんなにキツく言わなくて……『アースラ、訓練室』うぅ……息子が反抗期だよクロノくん』

エリオとレオンの救いの女神なのはは、一瞬で説教魔人ロウファに敗北して画面の奥に引っ込んで行く。

エリオとレオンはアースラの訓練室で何があったか非常に気になったがロウファの額の青筋が凄い事になっていたので質問を断念した。

『さて……画面越しだが…久々にやるか…』

（レオン、何かロウファの表情が活き活きしている気がするんだけど…）

（ロウファは生真面目人間だから説教が好きなんだよ）

それから六時間、地獄の説教タイムが行われたらしい。

作者の心の声です……もう、本編でギャグなんか書く物か！（後書き）

もうヤダ……。
ギャグは好きだけど……今後はギャグとバトルは別個にします。

ついでに、ロウファがなのはに言った「アースラ、訓練室」はリリカルなのはA' sのコミックを読むと何を指して居るか分かると思います。

あと、レールガンがビーム兵器で無い事は自分も承知してます。
アレはただのレールガンと言う名の魔法兵器です！

では、また次回！

目覚めと争いと…（前書き）

おはようございます…偽道です。
やっとシリアスに戻れた……久々の二日連続投稿です。
まあ、今回の話はかなり短いですけど……エリオを主人公に据えた時からやりたかった戦闘シーンがやっと書けそうです！

では、どうぞ……。

目覚めと争いと…

ロストロギア「レリック」

それが暴走した周辺地域は臨海第８空港周辺は廃棄都市として復興される事なく放棄されていた。
その、ロストロギアの恐ろしさを改めて確認できるような災害の爪痕を残した地区に金髪の美女と栗色の髪の毛の少年が歩いていた。

「すみません、ハラオウン執務官。スカリエッティを追っている貴女に……」

「ううん、いいんだよ。捜査官の資格じゃ個人で出来る事にも限界があるし……私も、この事件は少し気になるから」

そう言うと、金髪の美女……フェイトはデバイスから画像を出す。

「殺人未遂の罪で追ってるこの子……」

「エリオ・ハーヴェイ。
これが彼の本名かは謎。過去の経歴は一切無く……突然現れたとしか言いようの無いベルカ式の魔導師」

「魔力の残滓から、被害者はナカジマさんと高町提督」

栗色の髪の少年……ロウファはフェイトの言葉に少しだけ表情を歪めた。

「……そうとは限りません。

魔力の残滓はナカジマさんが被害にあった場所では二つ有りました」
「うん、でも……何方にしてもエリオ・ハーヴェイは何か知ってる…それに」
フェイトは、エリオ・ハーヴェイの持つデバイスをアップする。
「気になるんだ……。
なんで、この子は……エリオと似ているのか、昔のストラーダと同じフィルムのデバイスを持ってるのか…」
二人の局員は歩む。
エリオ・ハーヴェイが潜んでいると通報された廃都の奥へと…。

「……知らない天井…でもないな」
クロノはボヤけた意識に喝を入れながら清潔感のある天井を眩しそうに見上げる。
クロノは取り合えずベットから降りようとして手を動かそうとしたが、その腕は包帯でぐるぐるに固定されている事に気付く。
よく見ればもう片方の腕も同じ様に固定されている。
「参ったな……いったいボクはどんな失敗をやらかしたんだ？」
これでは提督としての威厳とかがあった物じゃ無いと苦笑する。

何故か、この状態に追い込まれた時の記憶が無い。
恐らく、何か余程ショックな事があって記憶を無意識に封じているのだろう。

「この分じゃ……足も酷い事になってるだろうな」

クロノは少しずつ身体を起こす。
そして、彼が見たのは……片脚が膝から無くなった自分の姿だった。

エリオ・モンディアルは静かに立ち上がった。
彼の前には、金髪の女性と栗色の髪の少年が映る画像が浮いていた。

「……フェイトさん」

全ての絆を断つ。
それを定めた時から覚悟はしていた物の、まさかこんなに早く相対するとは思っていなかったのだろう。
エリオの表情は酷く悲しそうに歪む。

だが……

「まだ……捕まる訳にはいかないから…」

ストライクカノンを構える。

相手が、フェイト・T・ハラオウンなら生半可な覚悟では勝てない。
模擬戦では勝ち星を挙げた事もあるが……今は実戦だし二対一と此方は不利だ。

「フェイトさんを狙えば避けられる。なら、まずは……キミからだ」

エリオはストライクカノンの標準を真夜中に出会った局員……ロウファへと向けて引き金を引いた。

「ぐっ！」

「ロウファ！」

フェイトは敵の魔法弾に狙撃されて気絶したロウファを抱えて物陰に隠れる。
何か、衝撃でも受けた様に倒れたロウファを見た限り……それは、魔力ダメージではなく質量兵器による物理的に気絶させたソレだろう。

「魔力を質量に変換するなんて……」

コレでは、何故質量兵器を廃止したか分からない。

「私は時空管理局執務官、フェイト・T・ハラオウン。
貴方は今、二つの殺人未遂事件の容疑を掛けられている！！」

「否定するつもりは無い！
だけど、僕はまだ貴女に捕まる訳には行かない……貴女が引かないと言うなら僕はそれを押し通るまでだ！！」

話し合う余地など無いとエリオはフェイトに叫ぶ。
そして、フェイトの前に蒼い突撃槍を持つ赤毛の青年が現れる。

「僕は……エリオ・ハーヴェイ。貴女には少し眠って貰う！！」

エリオとフェイト。
同タイプの魔導師による戦いが今初まった。

目覚めと争いと…（後書き）

前にとったアンケートですが、何れにするか決めました。
さて、クロノをこれからどうしようかな……。
そして、ロウファは主人公と言う名の噛ませ犬扱いにして仕舞いました……。

ロウファ……戦闘に置いて、今だ主人公をしていない…。
何時になったら彼に真面な戦闘描写が描かれるか作者にも分からない。

それでは！

決着と起源と…（前書き）

偽道です。
スランプです。
微妙です。
ぶっちゃけ……今回の文章は駄文すぎると思った故に次話投稿して良い物か物凄く悩みました。

次回から、一章の時みたいに誰々　視点で書こうかな……と思ってたりします。
だって……第三者視点で書いていると自分の文章が幼稚に見えてくるんですよ……マジで。

それとも、オリジナルストーリーと言う見に合わない事をやったからかな……。
兎に角、今回のは本当に駄文……今までので最も最悪な出来だと思う程の物ですが……それで良い方のみどうぞ…。

ぶっちゃけ、感想で叩かれても仕方ない気がするくらいですよ……自分。

決着と起源と…

エリオ・モンディアルはフェイトの強さを改めて実感していた。
自分より素早いその機動力、自分には出来無い空中戦……。
だが……同時に喜びを感じていた。
憧れた人は自分なんかより強い事に、そして……そんな強い人と今の自分は…
「……また、追い付かれた！」
自分は戦えている。
フェイトはエリオのスピードに驚愕する。
なんせ、今迄自分はスピードだけは誰にも負けた事が無いからだ。
その、スピードに目の前の青年は喰らい付いてくる。
「それだけの実力があるのに……何故あんな事をした！」
フェイトの言葉にエリオの表情は歪む。
「この程度の力しかないから……」
自分は何を自惚れていたのか？
「あんな事に為ったんです！！」
その激情に任せた力尽くの一閃でフェイトを突き飛ばす。

思い出すのは、助けられなかったピンク色の髪の少女。
死にゆくその瞬間まで、何故か笑顔を自分に向けていた優しい人。

「そうだ、僕がもっと強ければ！！」

「くっ！？」

エリオの連撃がフェイトを襲う。
フェイトはそれを受け流しながらも、着実にダメージを溜めていた。

「貴方は……その、力の為に誰かを傷付ける気！？」

「奴を殺す為なら……それでも構わない！！」

殺す……。
フェイトはその一言を聞き目の前の青年を危険人物と認定した。

「そんな事を言える貴方は……簡単に殺すなんて言う貴方は…間違っている！！」

思い出す。
かつて、ユウと言う魔導師に操られて言葉にした殺す覚悟。

そして、気付いた……。
操られてはいたけど、確かに私の家族だったユウの死を聞いた時…。
クリフと言う魔導師が亡くなった事で悲しんだ人達を見て…。
母の死を看取って……。

ああ、命はなんて儚くも尊いのだろう……と。

だから、許せない。
誰かの命を奪う行為を…。
させてはならない。
誰かを悲しませる行為を！！

「時空管理局、執務官……フェイト・T・ハラオウン」

エリオは、フェイトの雰囲気が変わったに気付き身構える。
彼女は突破しなければならない敵だ。

天夢　龍二
彼を殺さなければならない。
もう、多くの人を悲しませない為に斬り捨てねばならない。

……いや、それは言い訳だろう。
エリオ・モンディアルはただ……守りたかった少女の仇を討ちたいだけだ。

そして、この世界の守りたかった少女を……

「……行きます！！」

今度こそ……守りたいのだ。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

バルディッシュをザンバーフォームに切り替えて向かって来るフェイトにエリオは苦悶の表情を浮かべる。

勝てない。
今のエリオ・モンディアルの実力では、フェイト・Ｔ・ハラオウンには勝てない。
スピード、パワー、魔力、技術……自分の利点とする物は全てフェイトの方が一枚上手。
同じＧＷであり、同じ戦闘スタイル。
だから……普通にやっていては勝てない。
「スバルさん……力をお借りします」
ならば、この時代ではあり得ない普通以外の方法を使えば良い。
エリオは、斬りかかってきたフェイトのバルディッシュの柄に手を突き出す。
「ソードブレイカァァァァァァ！！」
「……えっ？」
ＣＷ－ＡＥＣ０７Ｘ改　「ソードブレイカー」
スバルのＩＳ“震動破砕”を解析し、誰でも対象の武器を破壊する機能扱う事が出来る様に改造された格闘戦技使用者向けの防衛装備。
それを持ってエリオはバルディッシュを破壊した。
その柄は粉々に砕け散り、茫然としたフェイトにエリオは蹴りを打ち込む。
「くっ……待…て…」

未だに意識が残っていた事に驚きながらも、エリオはストラーダを構える。
まるで、何かを振り払う様な……そんな風に…

〈マスター！〉

「……くっ！」

ストラーダの警告にエリオは素直に後ろに飛び引く。
すると、上空から先程まで彼が居た場所に薄緑の砲撃が着弾した。
上を見上げれば頭を手で押さえながらフラフラと浮かぶあの時の局員が杖を構えている。

「時空管理局、捜査官…高町　ロウファ陸曹だ。
キミには公務執行妨害、殺人未遂、暴行罪の嫌疑がかけられている」

「……」

エリオはロウファと名乗る男から向けられた敵意に自然とストラーダを構えた。
ロウファは、エリオと言う青年に対しての嫌悪感に疑問を感じながらもクルタナを向ける。

「質問……いいですか？」

「……ああ」

ロウファは、エリオの突然の問い掛けに困惑しながらも頷く。
過去の経歴が全く掴めない謎の騎士……それの正体が解るかも知れないと言う期待を込めながら。

「貴方は……復讐をどう思いますか？」

ドクンとロウファの心臓が鳴る。

何故かは分からない……分からないのに…“復讐”と言う単語に…

その言葉に込められた感情に……何故か…。

「…っ、そんなのは駄目だ。

キミに何があったのかは分からない……誰に復讐したいのかも分からない…。

でも…復讐なんて……虚しいだけだ」

心にも無い道徳的な言葉を並べた。

まるで、自分にそう言い聞かせる様に……。

「……なら、ある男を殺せば…確実にこの世界が平和になるとします。

逆に……その男を生かしておけば…そいつは悦んで虐殺を行います

……貴方はどうしますか？」

エリオは苦々しげにその男の事を思い出しながらロウファに問い掛ける。

「逮捕する……僕は…誰も死なせない、誰も傷付けない、誰も悲しませない！！」

宣言する様な叫びにエリオは頷く。

何となく……本当に何となくロウファと言う魔導師なら自分側に着いてくれる様な気をしていたのだ。

だが、違った。

彼は間違いなくエリオ・モンディアルの敵。
ロウファは自分の内側から湧き上がる様なドス黒い感情を押し殺す。
その、何かに呑まれれば間違いなく自分は化物になる気がする故に。
「なら！」
エリオは一瞬で間合いを詰め、ロウファの腹に拳を打ち込む。
エリオとロウファ……その力の差は限りなく遠く。
ロウファではエリオの拳を避けられる様な技量はない。
だから、こうも簡単に敗れるのは必然……経験も力も足りないのだから。
「ぐっ……宣言…する。
僕は……絶対に…キミに誰も……殺させ…ない」
その言葉を最後にロウファは気絶した。
今の彼ではエリオには勝てない……だから宣言した。
勝てなくても、邪魔をする事なら出来る。
だから、エリオを逮捕するその日までロウファは彼の邪魔をし続ける。
「出来るのなら……やってみせて下さい」
その言葉をエリオは気絶したロウファに投げかけた後、フェイトを一瞥し……この場を去った。

失った物と得た縁（前書き）

こんにちは、偽道です。
誰々視点にしました……滅茶苦茶書きやすいです。
ただ、誰々視点ってキャラ崩壊しそうで怖いんですよね。
今回、原作キャラがまた一人参戦します。
まあ、自分で書いてて……結構唐突な感じがしましたが…。
では、どうぞ！

失った物と得た縁

クロノ　視点

左脚を喪った……。
いや、喪ったのは左脚だけではない。
リンカーコアもボロボロに為っている。

これまでボクが学んだ知識、技術、技……。
血反吐を吐く思いで、色んな物を犠牲にして得た守る為の力……。

それが、一瞬で奪われた。
そんな、戦えない者を管理局は今までの様に扱うだろうか？

答えは……否だ。
いざと言う時戦えない者を提督にする程、管理局は優しく無いだろう。
戦えない……そう、最早戦えないんだ。

「だったら……ボクに何が残るんだ…」

思い返せば……ボクは常に魔法と共にあり、戦いと共にあった。
誰かを守る為に杖を取り、悲しませない為に杖を振るう……。

そう、クロノと言う存在は魔法と共にあったんだ。

「クロノくん……あまり思い詰めないでね」

「……ああ、すまない…なのは」

見上げれば、車椅子を押してくれているなのはの心配そうな表情があった。

そうか、ボクはもう……彼女達を守る事も助ける事も出来ない。
上に昇れば……強い権力さえ手に入れれば彼女達を守れる筈だった。

犯罪者、大魔導師プレシアの娘であり、プロジェクトＦＡＴＥにより生まれたフェイト。

多くの犠牲を生み出したロストロギア闇の書の主、はやて。

その、闇の書の守護騎士、ヴォルケンリッター。

かつて、多くの人を救い、多くの人に憎まれた男と同じレアスキルを持つ士郎。

世間は、世界は……彼女等の…彼の言葉を聞いてくれる程優しくない。

フェイトはプロジェクトＦＡＴＥの遺産として、様々な組織に狙われるだろう。
はやてとヴォルケンリッターは、闇の書に恨みを持つ者達に永遠に憎まれるかもしれない。
士郎は……かつて、正義の味方を目指した男と似た容姿になり始めたんだ……無関係とは思われないと思う。

守るには、上に昇るしかなかった。
例え、彼女達を直に守る事は出来なくても……権力を握る事で守る事が出来る筈だった。

「なのは、飲み物を買ってきてくれないか？」

「うん」

走り去るなのはを見ながら思う。
ボクは……もう、何も守れない。
彼女も、彼女の周りの人々も……！！

「……誰も見てはいないな」

涙が出た。
ボクは……クリフの…アイツの想いすら引き継げない！！
最早、リンカーコアは戦闘には耐えられない。
片脚のない魔導師など、戦場では足で纏い以外の何者でもない！！

「ボクは……っ！！」

今の……ボクには…何も……ない。

ロウファ　視点

濃い血の匂いがする……。

『やっやめてくれ！』

逃げ惑う誰かを追い詰めた。
手には折り畳み式の槍が一本……。

『無駄だ……お前は…俺から逃げられない』

驚く程、冷たい声が響く。
獲物は震えた声で命乞いをし続けている。
思わず口元がつり上がる。

『やめてくれ！俺が何をしたんだ！！
俺はただ、腐った管理局からこの世界を救っただけだぞ！！』

『……その結果、どれ程の被害が出たか貴様に分かるか？
全く……貴様達■■■は何時だってそうだ…。
自分達の正義を押し付け、救えた筈の人達を死なせる』

ズブリと槍の矛先が目の前の男に突き刺さる。
元は美形であったであろう顔は、鼻水と涙で滅茶苦茶になっている。

『痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛いいいいいいいい！！
何でだ！神様は……この世界は■■の平行世界だから、好きにしていいって言ってたのに！！』

『■■？
また、訳の分からない言葉が増えたか……。
まあいい……貴様、■■　■■と言う名の男を知ってるか？』

聞き取れない何かを言った瞬間、心がドス黒い何かに蝕まれる。

いや……もしかしたら、本来在るべき姿に変わっているのか……？

『知らない知らない知らない知らない知らない知らない知らない知らない！！』

『そうか……』

槍を降ろす。

その瞬間、目の前の男は安堵した様な表情を浮かべた。

『なら……死ね』

トスン　と、槍は男の心臓を穿つ。

『見逃すと思ったか？

■■■など、この世に不要。

元より、見逃すつもりなどない』

槍を引き抜く。

同時に赤く熱い液体が全身に掛かった。

満たされはしない。

まだまだ殺し足りない……。

『そうだ……こんな奴等では足りない』

この程度で……

『こんな奴等では……俺の憎しみは…』

やめろ！

こんなのは見たくない！
これは違う……こんなのが僕である筈がない！！
嫌だ……。
憎しみ、憤怒、悲しみ、拒絶、孤独、■■心。
こんな、こんなのだけで生きるのは嫌だ！
こんなのは……
「嫌だぁぁぁぁぁぁ！！」
「うわっ！？
いきなり起きるなよブラ……高町捜査官」
目の前には、平凡な顔付きの青年が驚いた表情をしながら此方を見ていた。
確か……
「テンム司書……？」
「ああ、名前憶えてくれていたんですか……忘れて良いのに」
後半の言葉がいまいち聞き取れなかったが……問題は無いだろう。
辺りを見渡すと、瓦礫の山と眩しいパトライト……そして、ハラオウン執務官が救急車に運び込まれる姿が見て取れた。
「夢……だったのか？」
それにしてはリアルな夢だった。
今だに、あの槍で人を刺した感触が、返り血を浴びた時の温かさが、

あの身を焦がす程の深い憎しみが……リアルに感じる程…。

「うっ…」

「無茶しない方がいいですよ。
お腹に強い衝撃を与えられたみたいですから、本調子じゃないでしょう？」

何故だろう？
目の前の男に目を惹かれる。

「……どうしましたか？」

武器が無い。
いや、その様な物は不要。
この距離なら……首を掴んで軽く力を入れれば……。

「……っ！？」

「なっ！？
なにやってんですか！！」

テンムに向かっていた右手を壁に叩きつける。
今、僕は何をしようとしていたのか？
首を掴み、軽く力を入れればどうなると考えた！？

「ああっと、では俺は今から一応第一発見者なので事情聴取されに行きます。
請求されてた資料はデバイスにインストールしたんで後で目を通して下さい」

「……ああ、すまない」
その、離れて行く背中にホッとする。
ホッとしている筈……なのに…。
「くそっ……何でアイツを殺さなくてはならないなんて！」
内に秘めた狂気だけは、少しずつ膨らみ続けている事を自覚した。

???　視点

士官学校、空士訓練校。
その何方にも落ちてしまった。
受かったのは第三志望の陸士訓練校……。
その事に不満はない……ただ、あたしの力が及ばなかっただけなのだから。

それでも、悔しい物は悔しい……。
兄の夢……執務官になると誓った。
その為に誰よりも努力をして来た……。
凡人のあたしでも、苦労のしらない才能だけの奴には負けないと頑張り続けた…。
「でも、結局は才能か…」

筆記試験で落ちたとは思えない。
士官学校は兎も角、空士訓練校の方は手応えがあった。
問題は……空戦適性が低かった事。
落ち込んで、挫折してやるつもりはないけど……少し位は休んでも良いかな…と思って公園に入ってみた。

そこには、悔しそうに涙を流す車椅子の成年がいた。

よく見れば、最近新聞で大きな見出しを飾った人だ。
確か……

「高町　クロノ提督……」

「ん、ああ……すまない。
見苦しい所を見せた……キミとは何処かで面識があったかな？」

「いっいえ、すみません……最近新聞で見た人でしたので…つい」

呟いた言葉が聞こえてしまった様で、普通に対応してくれた有名人に謝罪する。

高町　クロノ
旧姓は、クロノ・ハラオウン

執務官を目指す者なら彼の名を知らない方が珍しい。
史上最年少の執務官……そして、若くして提督まで上り詰めたこの人を、周りは天才だと祭り上げている。
実際、あたしだってそう思っていたし、こうして目の前にするまで化物みたいな人だと言うイメージがあった。

「新聞……ああ、あの結婚騒動か…」

「あの……何かいやな思い出でも？」

あまり、私生活に踏み込むのもどうかと思ったけど……さっきまでみたいに泣いているよりマシだろうと質問する。

すると、高町提督はどこか達観した様な遠い視線を空に向けた。

「ああ、義兄さん……なのはの兄なんだが…極度のシスコン……いや、何処か親馬鹿な所があってね…」

ブルブルと身体を震えさせる高町提督の姿に話題の選択ミスである事を痛感した。

ならば、何とか話を変えないと……。

「えっと、でっでは結婚後はどうだったんですか！？」

と言うか、何故あたしはここまで苦労しなければならないのか？

一応、現在進行形で他人なのに。

「……新婚旅行中にね…「このＫＹ野郎！なのはたんは僕の嫁だ～！」とか、「てめえの嫁はエイミィだろが、大人しく舞台裏にブラックアウトしろ！」とか、「はっはっは！なのはよ、僕の愛でキミの目を醒まさせる！！」とか、「クロくんはアチキの嫁よ～！」とか言う全く理解出来ない生命体に邪魔されてね……。

新婚旅行で何人の犯罪者を検挙したか……」

「どれだけ貴方の結婚生活は波乱万丈なんですか」

普通、有名であるだけでここまでストーカーに狙われるものだろうか？
と言うか、最後のアチキの嫁と言った人が女性であると信じたい。

「まあ、でも彼女との生活自体は楽しいよ」

それはもう、幸せそうにそう言ってくれる高町提督に若干の羨ましさを感じた。
そうか、この人は別にあたしが関わらなくても涙を止めてくれる人がいるのだろう。

だったら、それはとても羨ましい。

「そう言うキミは……何か思い悩んでいるように見えるが…。ボクで良ければ相談にのるが？」

一瞬、断ろうとも思ったけど……この人が最年少執務官だった事を思い出した。
なら、この人の話は今後あたしの歩む人生で絶対に役立つ。
なら、相談してみよう。

それが、あたしティアナ・ランスターが不思議な縁で巡り会った先生との出会いだった。

失った物と得た縁（後書き）

九理歩道場　出張版！

九理歩「久しぶりの出番だぞ弟子一号」

ユウ「だ～か～ら～……誰がてめえの弟子だゴラァ！！
頭に蛆湧いてのかオリキャラ野郎！？」

九理歩「尚、画像が出ていないのが残念ですが……彼はブルマを穿いて…」

ブルマ「る訳ねぇぇぇぇぇぇだろぉぉぉ！！
なあ、それが例え真実でも画像にして誰が得すんの！？誰が喜ぶんですかぁぁぁぁぁぁぁ！！」

九理歩「ほら、いま巷のゲームやアニメはその手のネタで女性のファンを増やそうと」

ブルマ「こんな駄小説にんなもんで誰もこねぇぇぇぇ！！
て、また名前とこ変わってんし！！おい、ちょっと来いオリキャラ！！」

九理歩「待って！話し合おう！！俺の戦闘力なんて慢心してないキミ相手じゃ足下にも及ばな……」

ユウ「いくぞ三下ぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

《暫くお待ちください》

ユウ「んじゃ、今回はオリキャラ野郎が伸びてんで俺が司会で……サポートどうすっかな？
アルハザードに俺以外の人間は……やっぱいないか。
まあ、いいか……確かここに…」

おおおおおお！

あはははははは！

パチパチパチパチ！

ユウ「あった、お茶の間バラエティー番組必需品！
なんか、感嘆の声とか笑いとか拍手をボタン一つで鳴らすアレ！！
これで、多少は寂しさを紛らわそう……。
画面の向こうはコッチ見えるけど、コッチから画面の向こうは見えないし……」

ええええええええええ？

ユウ「ボタン間違えたか……。
まあいいや、今回は何故ロウファがあんな風に為ったか説明しようと言う議題らしい……」

おおおおおおおおお！

ユウ「これは、三次創作「とある罪悪［クライム］の物語」で明かされてるけど……瞬さんの文章を穢す様な駄文を読者が読んでる訳

ねぇ〜〜よな」

ブゥゥゥゥゥ！！

ユウ「おい作者！妨害すんな！！
さっきのは笑うボタンだろか！！
……で、ならばここでその理由を明かす事に為ったんだが……アレはエリオの復讐と言う言葉とそれに込められた感情、何よりそれが向けられている先……それ等の偶然がロウファの起源［復讐］に触れてしまったらしい」

へえぇぇぇぇ

「で、起源って言われても良くわかんねぇ……て人に簡単に説明すると…あっ、俺は作者の作ったカンペ読んでるだけだからな。
間違ってたら作者の無知が悪いんだぞ」

ブゥゥゥゥゥ！

ユウ「邪魔すんなっつってんだろ！！
たく……で、起源とは…簡単に言えば人間が絶対に抗えない本能。
起源に気付いて仕舞えば、それから逃れる術がない……てのが型月の方での世界観だな。
詳しく知りたい奴は「空の境界　殺人考察・後」を見る様に」

ブゥゥゥゥゥ！！

ユウ「（もういい、無視だ無視）で、ロウファのその起源は“復讐”なんだと。
真祖の姫君……つまり、アルクェイドなきこの世界が神の娯楽で自

分達が滅茶苦茶にされんのを意味嫌って神の遊びの駒である俺達転生者を狩る存在として、わざと起源が暴走する様に修正してんだと……悪趣味だね～」

ブゥゥゥゥゥ！

ユウ「ああっと、それは世界にやってんだよな？
まあいいや。んで、ロウファの場合は転生者のいる世界だと高確率でライザスのおっさんとその奥さんが殺される……て、これって龍二のせいだろ？
まあ、兎に角殺されて、後に女性陣以外の原作キャラに保護される。後は、どっかの審判者気取りの転生者がその原作キャラを殺してロウファの起源が発動……本当えげつなぇ～なオイ。この小説の作者、絶対性格悪りぃ～よ」

ブゥゥゥゥゥ！

ユウ「つうか、龍二って俺より性能下なのな。経験の差ね……まあ、今更遅いけど」

あはははは！

ユウ「（では、今回はこの辺で。皆さん最後まで有難うございました！）作者ウザい……やべ…」

ＬＡＷ？（前書き）

こんにちは偽道です。
今回は……ロウファは悪役とも善人とも見れる微妙な立ち位置にいます。
自分としてはロウファの今回の在り方は善人ですが……人によっては…。
では、どうぞ！

LAW？

ロウファ　視点

あの日から……何時も耳鳴りがする気がする。
意識を集中すれば……その音は嫌と言う程ハッキリとしてくる。
殺せ……憎め…って。
頭に浮かぶのは父と母との最後の約束。
果たされる事のなかった……約束…。
それを……奪った■■■に復讐しろと……。

「高町捜査官……聞いていますか？」
「はい……大丈夫です。ナカジマ捜査官」
何とか、あの日からこの身を蝕む狂気に蓋をして目の前の捜査資料に目を通す。
「……ナカジマ捜査官、今回の件は僕だけで構いませんよ？」

「ですが……」

手を前に突き出して首を振る。

今回の事件は……あまりにも悲し過ぎるから…。

ギンガ・ナカジマさん…。

最近、訓練生から局員へと上がったばかりの彼女には……この事件は重すぎる結末だ。

「憎まれるのは……僕だけで充分です」

資料に書かれている九年前に起きた誘拐事件の全貌。

その犯人は……ハーミット・アンジェラス。

当時…二歳だった少女の名は……ルミナ・ルーセントさん。

そして……現在の名は…ルミナ・アンジェラスさん。

僕は法と秩序の為に……一つの家庭を壊しに行く……。

アンジェラス家の前に立ち扉を叩く。

執務官の指示の元、家の周りには何人もの捜査官で包囲されていて……おそらく、その中には新米捜査官のナカジマさんもいるのだろう。

「は～い、どなたですか？」

「時空管理局、捜査官……高町　ロウファです。ルミナ・アンジェラスですか？」

「はっはい。管理局の方が何故？」

彼女が不思議そうに此方を見る表情に罪悪感が沸く。
彼女は……知らないのだ。
彼女の本当の家族は自殺している事も……自分が…誘拐された人間だと言う事も…。

「ルミナ、どちら様が？」

「あっお父さん……管理局の高町　ロウファ捜査官と言う方らしいよ」

「管理局……」

アンジェラス氏は……僕達が何の為に来たのか理解したのだろう。
一瞬、悲しそうな目をした後にゆっくりと僕の前に立つ……。

「……とうとうこの日が来たんだね」

「貴方がやった事は許されない……それは…理解していますか？」

アンジェラス氏はその言葉にゆっくりと頷く。
僕は、それを確認した後に……彼の両手にバインドを掛けた。

「待って！なんでお父さんが逮捕されるの！？」

「ルミナ……落ち着きなさい」

「落ち着いてなんていられないよ！！
お父さんが何をしたの……話して！！」

成る程……。
今回事件を担当した執務官がこの仕事を僕や彼女に押し付けた理由が良く分かる。
九年……九年だ…。
九年もこの人達は家族をしていた……。
この家庭は……とても平穏で幸せだったのだろう。

それでも……

「落ち着いて下さい……ルミナ・“ルーセント”さん」

「えっ？」

目の前の少女が不思議そうな表情を浮かべる。

「貴女の本当の名前です。
貴女は……ルミナ・ルーセント…九年前、当時二歳だった貴女は…
ハーミット・アンジェラスに誘拐されて……今迄生きて来ました」

「うそ……嘘だよ…お父さん……この人何を言ってるの？」

「……ルミナ、彼の言っている事は…本当だ」

違う違うと頭を振るルミナさんを視界から外す。
彼女はまるで……。

「違うもん！私のお父さんはお父さんだけだもん！！
約束したんだよ！明日、遊園地に行くって！！」
『でも、やくそくしたよ？
帰ってきたら遊園地にいこうって…』

「……っ！？」

忘れたと思っていた過去が……目の前にある。
それでも……

「行きましょう……アンジェラス氏」

「ええ、ルミナ……お父さんは本当のお父さんじゃなかった。
お前を誘拐した最低な犯罪者だった……それでも、お父さんはお前の事を愛していた！！」

「お父さん！！」

ルミナさんとアンジェラス氏を遮る様に身体を割り込ませる。
アンジェラス氏は……僕と共に来ていた局員と共に車の中へと入った。
そして……

「ふん、流石は傲慢な管理局……法と秩序の番人を気取り…平穏な家庭を破壊するか！！」

突然、真紅の砲撃が車に迫る。
急いで車とルミナさんの前に立つ。

「くっ……我が身は盾、あらゆる厄災より守りし壁よ」

〈ワイド・プロテクション〉

自分の知りうる限り最も硬い広域防御魔法を展開する。
それでも、このＡＡ並の砲撃を連射には長くは持たないだろう。

「何をしているんですか、さっさと車を出して下さい！！」

「わっ分かった。執務官は今此方に向ってるみたいだ……何とか持たせろよ高町！」

同僚の言葉に頷きながら、前を見据える。
プロテクションには既にヒビが入っていて維持できるのはおそらく持って……十秒。

「硬いな……雑魚では無いと言う事か…」

護送車が去った頃にそいつは砲撃を止めて現れた。
手には、バカみたいにデカイ大砲の様な狙撃銃らしきもの。
背中にも……やっぱりバカみたいにデカイ大剣……。

「時空管理局、捜査官……高町　ロウファ陸曹だ。
貴方には……公務執行妨害の罪が着せられている」

「……随分と生意気な事を言うものだ。
幸せな家庭を崩壊させる事がキミの公務か？」

その言葉は心に突き刺さる……。
そうだ、確かに僕は今日……悲しみを作り出してしまった。

「……だが、法を破る者は許す訳にはいかない。
一つの例外も作ってはならない……それは、結果的により多くを悲しませる事に繋がる」

「一つの例外も？
くくく……ははははは！そうか……キミは…“闇の書事件”の犯罪者がどうなっているのか知らないんだな！？」

闇の書事件……？
確か……連続で魔導師が襲われ…最後には父さん達アースラの魔導師が解決した……？

「さて、キミに質問しよう。
管理局は万年人手不足だ……そこで、力のある犯罪者はある取り引きを条件に罪を軽く出来る……これは、“例外”ではないのかね？」

「それは……」

「不平等では無いか？
幾ら、大きな犯罪を犯そうと……管理局に協力するだけで罪は軽くなる！！
今回の……ハーミット・アンジェラスの様な力無き者にはそんなチャンスすら無い」

言い返せはしない。
僕も……レジアス中将もその管理局の体制が大っ嫌いだからだ。
だから、僕は中将に協力をしている……犯罪者が…こんな取り引きなど出来無い……平等に罪を償って行く様な世界にする為に……。
被害者に悔しい想いをさせ無い為に……。

「僕は……それを憂いて…変えようとしている人を知っている。
僕は……その人を信じて助けになると誓っている！！」

「成る程……管理局の人間にしてはまともな奴か…」

それに……僕が最も嫌いなのは…！

「寧ろ、僕からみれば……キミの様に大義を振りかざしテロを行う犯罪者の方が嫌いだ。
内側から変えようとせず、努力もしないで大義の言葉を振りかざすキミの言葉では……僕は折れ無い！！」

だから……

ＬＡＷ？（後書き）

色んな二次創作を見ているとイメージＣＶってあるなと思い、取り敢えずクリフとロウファだけ考えてみました。

ロウファは櫻井孝宏さん。
コードギアスの枢木　スザク、ＦＦＶＩＩのクラウド・ストライフ、ゼロの使い魔のギーシュ・ド・グラモン、．ｈａｃｋ／／Ｇ．Ｕ．のハセヲなどなど……。

理由としては……このキャラは善人だったり復讐者だったり忙しいキャラでこの声優さんはこの二つを使いこなせる方だから…です。

クリフは関智一さん。
機動武闘伝Ｇガンダムのドモン・カッシュ、機動戦士ガンダムＳＥＥＤのイザーク・ジュール、フルメタル・パニック！の相良宗介などなど。

理由は……クールと熱血どっちもつかえるから？
いえ、何となくと言うのが本音です。

と言うか……声優さんの名前ってこんな駄文の小説で挙げていいのだろうか？
……不安だ。

近い内にステータス欄にこれ等を付け足そうと思います。
では次回！

ＬＡＷ？（前書き）

偽道です。
ＬＡＷ……前回の続きでこれの後にもう一話だけあります。
ついでに、ＬＡＷの意味は法律やよく知られてるのでは秩序です。
にしても……ロウファが弱い。

LAW？

？？？　視点

闇の書……
悲劇を作り出す悪魔のロストロギア。

今は……蒼天の書と呼ばれ…エースの一人を気取っている八神　はやての手の中に……。

悔しい……。
八神　はやてに関しては……ただの被害者だと納得出来る。
その罪が許されるのも分かる……。

でも……何で！？
闇の書は封印処理されない！
ヴォルケンリッターは何故許される！！

悔しい……憎い…。
いや、本当はもっと昔から気付いてた……管理局の誤ちに。
確かに管理局の在り方は訳ありの犯罪者には優しいだろう……。

だけど……なら…。
被害者には優しいのか？
俺達みたいな闇の書を追っていた者には堪えろと言うのか？
喪った者がいる人間に……ただ堪えろと言うのか！？

「青いな……」

目の前の少年は俺と同じ物を見たらどうなるのだろう？
それでも尚……内側から変えると言えるのだろうか？

ロウファ　視点

「青いな……」

そんな声が響く。
男は狙撃銃を肩に掲げると背中に背負った大剣に手を掛けた。

「……少年、お前の理想は綺麗で優しい。だが、世界はそこ迄優しくないぞ？」

「別に……僕の世代で完成するとは思っていない。
例え、僕がゴールに辿り着けなくても……きっと誰かがバトンを受け取ってくれる」

そうだ、別に僕一人でゴールに辿り着く必要は無い。
横に並んでいる人がいるなら一緒に走ればいい。
後ろにいる人がいるなら手を引けばいい。
前に立つ人がいるならバトンを預ければいい。

「哀れだな……。
バトンは引き継がれなければ？次の走者まで走れなければ？
理想は積み重ねるのは難しいが……崩れるのは一瞬だぞ？」

「だとしても、貴方の様に力で変えても意味がない。
結果の共は無い過程には意味が無いが……過程の共は無い結果は長続きしない！」

「ならば、今悔しい想いをする者は堪えろと？
管理局さえ無くなれば……その苦しんでいる者達は……」

「だったら、今救えてる人、救える人に地獄へ堕ちろと？
管理局が無くなれば…犯罪者は管理外世界で自由に暴れ回る、管理外世界でのロストロギアの暴走を止める者はいなくなる！」

お互いの主張は平行線だった。
目の前の男と僕の考えは……何処まで行っても交わらない。

「分かってはくれないか……」

「それは……僕の台詞だ」

男は大剣を大きく振りかぶり、一気に距離を詰めてくる。
それを、辛うじて避け杖を向けようとするが……。

「あまいっ！」

「なっ……クルタナ！」

〈スティンガーレイ〉

大剣を振り降ろした反動を利用した蹴りをクルタナで防ぐ。
その威力に抗わず、後方に吹き飛ばされながスティンガーを撃ち込

んだモノのそれは身を隠す程の大剣によって無力化された。
「俺も時空管理局に身を置いていた時期があった！
闇の書と呼ばれるロストロギアによって悲しんだ人に……きっと罪を償わせると誓った時期もあった！！」
「ならっ……なんでその意志を貫かずにこんなテロ紛いの事を！」
「正しい方法では、奴らを裁けない程に周りを固められたからだ！！」
男の顔は絶望と憤怒に染まり上がっていた。
「お前に解るか！？
十年……十年だ！十年もの時間をアレの為に費やした！！
調べれば調べる程……多くの悲しみを作り出したロストロギアだと……何人もの嘆きを見て来た！！
巫山戯るな……なぜ犯罪者が許される！？なぜ、せめて数年間の投獄すらしない！！
なぜ……奴らは許されるんだ！！」
「だからって、なんで管理局を壊滅させるなんて理屈になるんだ！！
管理局が無くなれば……どれ程の混乱が齎されるか、どれ程救えた筈の管理外世界が滅ぶか……貴方の様な人なら解るだろうに！！」
〈スティンガーブレイド〉
男から一気に距離を離し、自分の扱える大出力の魔法を展開する。
魔法刃の数は……５０。
義父さんの物に比べれば半数にも満たないが……それでも自分の魔

力を全て使った数。

「エクスキューションシフト！！」

それが男に向かって一斉掃射される。

「だが……最早…あんな研究迄に手を染めた管理局など……害悪以外の何者でもない！！」

男が取り出したのは不思議な光を放つ宝玉。

それを、デバイスに組み込み……ただ一言だけ叫んだ。

「リフレク！」

最後に見たのは全ての魔法刃が自分にはね返ってくる光景。

魔力を使い果たした僕はそれに抗う術もなく呑み込まれた。

？？？　視点

「あの男に借りを作ってしまうとわな」

魔力ダメージで意識を喪った少年のデバイスを拾いデータを打ち込む。

戦闘機人、スカリエッティ、最高評議会。

そして……闇の書事件の詳細に犯人の行方と今迄の被害。

「これを見ても尚も……お前は管理局を信じられるか？」

正直趣味の悪い鏡を見せられた気分だった。
この少年は余りにも昔の自分に似ている。

「もしも、それでもと俺と敵対するのなら……」

最後に自分の居場所をデバイスに入力して少年に向かって放り投げる。

「また勝手な行動して～。
品川もいい加減にしないとドクターに説教されると僕ちゃんは思うんだけど？」

「……カンダタか」

お調子者の仮面を付けた少年、カンダタがいきなり現れるや、管理局の少年に向かって量産型のデバイスを放り投げた。
その行動の意味が解らずに疑問の視線を向けると、カンダタはヘラヘラと笑いながら言う。

「遅くなったけど、ライザス・ストリートの形見を田川に返しただけだよ。壊れた剣士さんは、今の田川ならコレを有効に扱う筈だってさ」

壊れた剣士……龍二の事を思い出し思わず嫌悪感が顔に浮かぶ。
あの男の思惑が何処に有るかは知らないが……いい結果には為らないだろう。

「それでさ、品川……アレ…どうする？
このままだと田川は殺されちゃうと僕ちゃんは思うな～♪」
カンダタの視線の先には包丁を持った少女が立っていた。
成る程……確かに今のままでは少年は少女に殺される。
「どうする？
一応、壊れた剣士さんの依頼で田川を守んなきゃ為らないんだけど？」
つまり、俺が何か手を打たないと殺すと言う事か。
「……ルミナ・アンジェラス」
びくり　と少女が肩を震わせる。
しかし、その瞳は少年を捉えたまま。
「少年が憎いか？」
「……うん、私は幸せだった。
お父さんは本当のお父さんじゃ無かったけど……幸せだった。
この人は……私のお父さんを奪った！！」
少女の父親は既に管理局の……何処かの部隊の下に送られただろう。
なら、少女の父親を今は救う事は出来ない。
「ルミナ・アンジェラス……なら、俺と共に来い。お前の父親を救う術を教えてやる……」

「本当に？」

「ああ、代わりにこの少年はまだ殺すな」

少女は暫し考える表情をしたが頷いた。
これで良いか？　とカンダタに視線を向けると、彼は薄っすらと笑みを浮かべて転送魔法を展開する。
少女はその光に慌てて入り込むのを確認した後……最後に少年を一瞥した。

「お前は……絶望せずにいられるか？」

こんな、現実を突き付けられて……。

ＬＡＷ？（後書き）

次回でＬＡＷは完結し、その次はエリオの物語……そしてようやく二章の最終話に為ります。
しかし、二章はオリキャラが目立つな……。
二章が終われば六課成立後の三章にする訳ですが……。
後、暫しの間、二章の二人の主人公にお付き合い下さい。

ＬＡＷ？（前書き）

偽道です。

この話は前回の話から二年後より始まります。

では、どうぞ！

LAW？

ハーミット　視点

彼に逮捕された日から二年の月日が流れた。
私は……私の罪を償う事に専念している。
ルミナの前に……もう一度父親として立つ為に……。

「お勤めご苦労様です……アンジェラスさん」

「やあ……久しぶりだね…ロウファくん」

それに、面会の時間にはいつも彼が来てくれる。
最初の頃は私は彼を責めた……娘を犯罪者に誘拐されたこの男に殴りかかろうともした。

『申し訳……ありません。
僕は……絶対に…ルミナ・“アンジェラス”さんを貴方の前に連れ戻します』

そう言う彼の真摯な態度を私は信じた。
実を言うと……彼の今の状況はあまり良く無い事も私みたいな囚人の耳にも届いている。

無能な英雄の子。

今の彼の姿を示す全ての言葉らしい。
彼に私を逮捕する様に指示した執務官が「犯罪者の足止めも出来ず、民間人の拉致も阻止出来なかった親の七光りだけで生きる無能」と

言いふらし、元々その時期に他の噂もあった為……今では管理局の汚点の様に扱われる位だと言う。

「その制服……執務官になったんだね？」

「ええ、捜査官の権限では限界が有りましたから……。それに……僕の周りは敵で一杯だ」

苦笑しながら青年はなんでも無い様に語る。
実際……そんな事は無いだろうに…。

「今回は……お別れを言いに来たんです」

「別れ？」

「ええ、僕はどうやら触れてはいけない所に触れてしまったみたいです。
最近、レジアス中将にこれ以上深入りしない様に忠告され……近い内にこの制服は剥奪されて遠い無人の管理世界に左遷される事になりました」

その言葉に……私は何も言えなかった。
彼が何かギリギリの綱渡りをしていたのは知っていたが……まさか、こんな事にまでなっているなんて。

「安心して下さい。
執務官の資格を剥奪され、左遷される迄は……残り一ヶ月の猶予があります。
そして、僕はその一ヶ月以内にルミナさんを取り戻し、僕の事件に終止符を打つ宛がある」

そう言った彼は何かを決めた表情をしていた……。
それが……
私が高町　ロウファくんと話した最期の会話となった。

ロウファ　視点

家族とは疎遠になった。
あの闇の書事件の真相を知り……納得出来ない自分がいたから。
レジアス中将ともあまり話さなくなった。
最後に話した時に……「ゼストの時の様に儂には救えないのか」と言う呟きを聞いた様な気がした。

それでも……

「もう……僕は止まれない」

真実を知った者にはそれ相応の義務がある。
後、一押し必要な証拠。
それさえ揃えば……僕は、最高評議会とレジアス中将を法廷に掛ける事が出来る。

「それに……」

父さんの形見であるデバイスを起動する。

『これは……メテオのマテリア。
私が、今まで世界を破壊するさいに扱ってきた魔法だよ。
クロノ・ハラオウンを殺し、ユーノ・スクライアを殺し、ロウファ・ストリート……いや、ロウファ・ハラオウンの生かしたまま、世界の終焉を見せ付けるのに最高の物！！
キミに……その力の一端を見せてやろう』

「天夢……龍二…！」

ギシリと歯を食い締め、口の中に鉄の味が広がるのを認識しながら父の最期の記録に目を向ける。
この映像を見た瞬間、僕は奴の事を何故か理解出来……殺すべき対象だと認識仕掛けた。
知らない筈の記憶の濁流……深い深い憎しみの波に呑まれ掛けた。

だけど……

『それは出来ない。
だって、この先には守りたい“想い”がある。
例え、この手が赤黒く汚れていたとしても……散っていった人達の“想い”くらいは守れるはず！！』

憎しみより、復讐心より……大切な想いの為に戦ったのはどの世界の僕なのか？

『退けませんよ。
僕は“想い”を守ると言った筈です。
同時に、僕はこの先にある“想い”に支えられている！』

ああ……その言葉は…何て眩しいのか。
つまり僕は、自分自身の事ながら……憧れたんだ…復讐心に囚われながらも……それすらも乗り越える大切な“想い”を背負った自分自身に。

「復讐に生きるのは簡単だ」

この身を蝕む負の感情に身を任せれば良いのだから。

「それでも……アイツ程では無いけど…僕にだって」

背負っている“想い”がある。
復讐への誘いが……この身を蝕む憎しみが消えた訳では無い。
意識を集中すれば、今でも聞こえる怨嗟の言葉。

「それでも……僕は…俺にはならない」

クライムと名乗る自分。
アレだけには絶対にならない。
転生者が全て悪党なんてきっと無い。
少なくとも……僕の友人に一人転生者がいるんだ。

龍一　視点

無限書庫に現れた悪魔の姿に首を傾げたくなった俺に責められる要因は無いと断言出来るだろう。
なんせ、あの黒い悪魔は資料の請求をして来ないのだ！！
俺だけでは無い、周りの司書達でさえ「明日の天気は槍の豪雨だ！」とか、「槍は槍でもランサー兄貴のゲイボルグだ！」とか「いや、明日は晴天さ……高町教導官のスターライト・ブレイカーと言う日差しが地面に降り注ぐぜ！」と混乱の一途を辿っている。

「失礼だな……キミは。
いつも通りモノローグらしきものが口から出てるぞ」

不満そうに睨んで来るが……なら、もう少し資料請求の量を減らせよ馬鹿野郎！
あんたと全盛期の高町提督くらいだぞ……あんな無茶な量を請求するのは！！

「安心しろ、平行世界の無限書庫はここ以上に大変だと思うぞ？」

いきなりの電波発言で誤魔化すな！
……で、何の様なんですか執務官殿？

「ああ、まずはキミ達にとっての朗報だ。
僕は一ヶ月後に無人世界に左遷される事になった」

……左遷？
何でも無いと言う様にしれっと言うブラック野郎の襟を掴む。
ふざけないで欲しい……確かにあんたの資料請求の多さには辟易してはいるが…あんたは多くの人を救っている。
実績もある……左遷される所なんて…。

「キミ達にそう思われていたのは嬉しいよ。
でも、実際に左遷される。反対意見も殆ど無かったらしい」
また……あの噂が？
「まあ、それもあるけど……理由は聞かない方がいい。知ればキミも……おそらく巻き込まれる」
君子危に近寄らず……あるいは好奇心は猫をも殺す？
「地球のことわざだっけ？
そんな感じだ……やめて置くんだ」
……分かった。
俺は平穏に暮らしたいだけだしな……。
「やっぱり……キミはどの転生者とも違うな」
っ！？
何故、こいつは転生者の事を知っているのだ？
俺はその事を誰にも告げていない筈なのに……まさかお前も！？
「残念ながら、僕は純粋なこの世界の人間だ。
転生者の事を知っているのは……平行世界からのある男との因縁のせいさ」
そう言うと、高町は目を瞑り……静かに言った。
「天夢　龍二……僕の全てをあらゆる世界で奪う男との因縁だ」

……最悪だ。
弟よ……お前は一体何をしているんだ？
そして、高町はこの場を去った。
おそらくアイツは……俺を答えによっては殺す為に来たのではないか？
龍二の名を出した時のアイツの瞳には……そうした増悪が爛々と輝いて見えたのだから。

ロウファ　視点

自分のやってる事が、まるで死期を悟った人間の様だなと苦笑する。
「まあ……上手く行っても左遷、上手く行かなければ死ぬかもしれない…案外変わらないか」
次に歩を進めたのは喫茶翠屋ミッドチルダ店。
父……クロノが最近開店した喫茶店だ。
甘い物が苦手な癖に……シュークリームとコーヒーが人気と言うのだから驚きだ。
「……二年ぶりか」
そして、僕はゆっくりと店内に足を入れた。

ティアナ　視点

「ティ……ティア…何でこんなに空気が重いの？」

そんな事、私が知るか。

目の前では先生が黙って……ドデカイコップにシリアル、バニラアイス、スポンジを入れコレでもかと言う程生クリームとイチゴのシロップをぶっかけてチョコチップを振り撒き、クッキーやポッキー、板チョコで彩った何処ぞの麻婆豆腐とは真逆の道を辿った私外道パフェを淡々と口に運ぶ執務官の制服を着た男がいる。

その姿はパフェの修羅。

水など要らぬ、ましてやよそ見など絶対にせぬ。

スプーンのひとすくいたりとも休むわけにはいかぬ　と言わんがばかりの気迫。

「……二年振りだな、ロウファ」

ピクリと男のスプーンが止まる。

男はパフェから視線を外し、先生に視線を向けて呟く様に……

「お久しぶりです……父さん」

それだけ告げた。

（あれ……ティア、もしかしてあの人高町　ロウファさん？）

（私は初めて見たから知らないけど……確かに先生の息子はそんな名前だったわね。何で知ってるのよ？）

（あの人、あたしの命の恩人）

世界は狭い物だ実感した瞬間だった。
しかし……彼の制服は執務官の制服だな…。
先生が言うには、ロウファさんは物覚えは良いけど才能や魔導師としての資質が低いらしいのに。

「一年前に執務官になったのはエイミィから聞いている……おめでとう」

「一ヶ月後には執務官の資格を剥奪されて無人世界に左遷されますけどね」

苦笑しながら言うその言葉に先生は驚愕の表情を浮かべた。
それでも、ロウファさんは何でも無い様に笑いながら懐から一つのデバイスを取り出す。

「僕には……やらなきゃいけない事が出来ました」

「コレはライザスの……何でお前が…」

「僕は……ライザス・ストリートの息子、ロウファ・ストリートですよ。持っていてもなんらおかしくないでしょう？」

ただ……その男は微笑み続けていた。
まるで……死の間際に浮かべる穏やかな笑みを…。
「一ヶ月たったら……中身の確認をして下さい。コレは……僕達が決着をつけなきゃいけない問題だ」
それだけ言うとそいつは席を立った。
「また、機会があれば……来ます」

ロウファ　視点

後顧の憂いは最早無い。
僕に今出来る事は出来るだけやった。
「結局……あの誓いは果たせないんだな」
誰も死なせない、誰も傷つけない、誰も悲しませない。
最早、多くの人を悲しませた。
秩序に忠実だろうが、誰かの為に動こうが……結局誰かは悲しんでしまう。
多くの人を傷つけた。
肉体的な事ではない……心の問題だ。

法を守る事が間違いだとは思わない……それでも、多くの人を傷つけた。

だけど……

「誰も死なせない……死なせてはいない…死なせたくない」

だから……闘わないと…天夢　龍二と。

この身の憎しみすら乗り越えて、この想いを貫く為に……。

「キミには……法の裁きを受けて貰う」

だから、止めないと……本当は優しい青年を。

「エリオ……別の世界の僕の弟分…説教してやるからな」

本当は天夢　龍二を殺す方が正しいのかもしれない。

でも、それでも……誰も死なせたく無いと願った。

それは……僕の考えは間違っていて、歪で愚かなのかもしれない。

それでも……

「僕は時空管理局執務官……高町　ロウファだ」

僕の名にＬＡＷ［正義］と言う意味を入れてくれた父さんと母さんに恥無い様に……僕は僕の偽善を貫き通す。

ＬＡＷ？（後書き）

一度これでロウファの物語を終え、次回はこの日より一年前…エリオの物語が始まります。
ロウファは復讐の否定者になりましたが……エリオはどの様な答えを持って最終話に向かうかの物語です。

それでは、次回！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2450q/

アンチをアンチする妙な小説

2011年9月7日15時14分発行